



ISSN 1342-6834

研究紀要 12

かながわの考古学

2007.3

財団法人 かながわ考古学財団

かながわの考古学

2007.3

財団法人 かながわ考古学財団

はじめに

今年度も、各時代の研究プロジェクトチームから提出された共同研究および個人研究の成果を掲載することができました。

旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世の各研究プロジェクトチームは設定したテーマの継続研究を続けております。膨大なデータの蓄積を合理的にまとめ、この紀要の限られた紙面の中で反映させています。各研究課題については、それぞれの目標に沿って検討を進めています。

また個人研究では今までの知識と経験を生かし、さらなる考古学の深化につながる研究を行っています。個人の能力・技術の発展にも大いに役に立つことでしょう。

今後ともこうしたグループの共同研究と個人研究を進めることによって、職員の資質向上が図られ、皆様にその成果が還元できるようであれば、幸いです。

また、これら研究成果を通して、私たちの郷土かながわの先人たちの足跡をたどり、歴史を学ぶ一助となることを期待して刊行の言葉とさせていただきます。

刊行にあたりまして、関係各位にご指導をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。

2007年3月

財団法人 かながわ考古学財団
理事長 熊田 節郎

目 次

神奈川県における旧石器時代の遺構(その6) ーまとめー	
旧石器時代研究プロジェクトチーム	1
神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅲ	
ー後期初頭期 称名寺式土器文化期の様相 その2 土器編年試案ー	
縄文時代研究プロジェクトチーム	21
相模湾沿岸の「低地」に立地する弥生時代遺跡	
弥生時代研究プロジェクトチーム	33
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡 (4)	
ー通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介ー	
古墳時代研究プロジェクトチーム	49
神奈川県内における奈良・平安時代の農具 (2)	
奈良・平安時代研究プロジェクトチーム	61
神奈川県内の「やぐら」集成 (5) ー「やぐら」出土遺物の分析ー	
中世研究プロジェクトチーム	75
近世民家の集成 (4)	
近世研究プロジェクトチーム	91
神奈川県域における弥生時代木器農工具にみる地域相と変遷	
ー逗子市池子遺跡群の木器農工具出土事例を中心にー	
渡辺 外	107

例　　言

1. 本書は、財団法人かながわ考古学財団および神奈川県教育委員会教育局生涯学習文化財課の職員で構成する研究プロジェクトチームが、時代ごとに計画的に共同研究を行った結果と研究助成を行った個人研究の成果を掲載する。

2. 各研究プロジェクトチームの構成は以下のとおりである（五十音順）。

・旧石器（先土器・岩宿）時代研究プロジェクトチーム

井関文明・大塚健一・加藤勝仁・栗原伸好・鈴木次郎・砂田佳弘・畠中俊明・三瓶裕司・御堂島　正
吉田政行

・绳文時代研究プロジェクトチーム

阿部友寿・天野賢一・井澤　純・井辺一徳・岡　稔・小川岳人・恩田　勇・小西絵美・長岡文紀
松田光太郎

・弥生時代研究プロジェクトチーム

飯塚美保・池田　治・伊丹　徹・櫻井真貴・新開基史・谷口　肇・渡辺　外

・古墳時代研究プロジェクトチーム

上田　薰・植山英史・柏木善治・須藤智夫・近野正幸

・奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

大上周三・加藤久美・河野喜典・高橋　香・富永樹之・中田　英・西谷俊廣・平間英明・宮井　香・
依田亮一・渡辺清史

・中世研究プロジェクトチーム

宍戸信悟・鈴木庸一郎・服部実喜・松葉　崇・宮坂淳一

・近世研究プロジェクトチーム

市川正史・木村吉行・永井　淳・掛瀬規彰・柳川清彦

神奈川県における旧石器時代の遺構（その6）

－まとめ－

旧石器時代研究プロジェクトチーム

はじめに

当プロジェクトでは、2001年度から、神奈川県内で発見された旧石器時代（一部縄文時代草創期を含む）の遺構について、各層位毎に集成を行って検討を加えてきた。基本的な資料集成は2005年度までに終了したため、本年度（2006年度）は、礫群、配石、磨石状礫集積遺構、住居状遺構、炉址、土坑・ピット、炭化物集中箇所等各遺構の特徴と研究上の課題等について記載し、そのまとめとしたい。併せて、これまでの資料集成で漏れた遺構についても補遺編として掲載することにする。

（鈴木次郎）

各遺構の特徴と研究上の課題

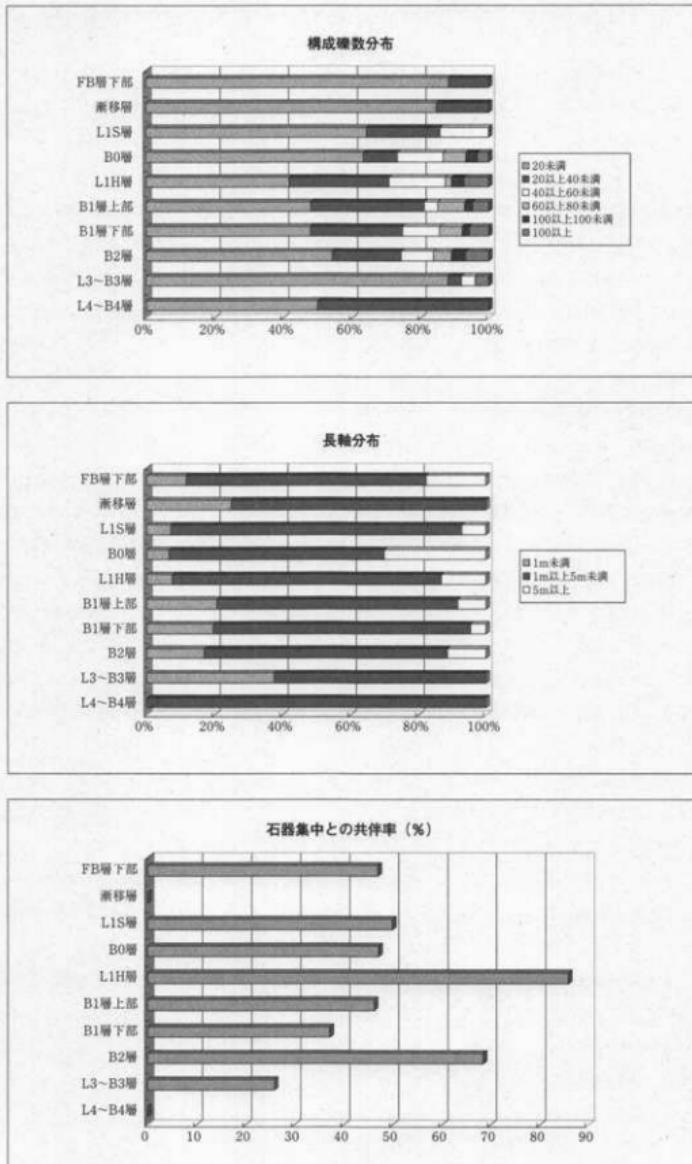
a) 磕 群（第1図、第1表）

当プロジェクトでの昨年度までの集成により、層位ごとの検出事例等を確認することが出来た。まず、遺跡数や検出事例（基數）などをまとめたものが第1表である。県内における礫群の検出事例はB4層から認められている。そして、礫群を伴う遺跡数（礫群検出遺跡数）やその出現率（礫群検出遺跡率）はB2層において、それ以前の時期の2倍以上の出現率となり、さらに、全体の礫群基數や1遺跡あたりの平均基數も、7基以上と大きい値となっている。次の時期のB1層では、礫群を伴う遺跡数やその出現率はB2層よりも幾分高くなるが、検出された全体の礫群基數や平均基數は少なくなっている。さらに続く、L1H層以降は礫群を伴う遺跡数をはじめ、各数値はより小さい・低いものとなっている。さきのB2層における変化については、相模野第Ⅲ期において礫群が急激に発達・普及したとされ、その要因として、捕獲した動物等の処理が増大したことがあげられている（鈴木2006）。

次に、礫群の形質についていくつか確認する（第1図）。①礫群構成礫の点数については第1図上段のとおりである。各時期を通じて、20点未満で構成される礫群が最も多く存在している。さらにその割合は、B3～L3層で80%と非常に高い割合であったものが、B2層以降L1H層までは40～50%となり、その後は、また徐々に割合が高くなっている。②礫群の規模（長軸の分布）については第1図中段のとおりである。いずれも1m以上5m未満が最も高い割合となっている。また、1m未満の小さな礫群はB3～L3層で3割以上存在しているが、漸移

第1表 時期毎の礫群事例数量（「遺跡数」は（鈴木2006）より）

層を除く他の時期では2割	遺物群	遺跡数	礫群検出遺跡数	礫群検出遺跡率(%)	礫群基數	平均基數
に満たない。一方、5m以上	F2層下部		2		17	8.50
	漸移層		4		13	3.25
上の広がりを持つ礫群は、	L1S層	193	45	23.32	14	2.33
小さな礫群が2割以上存在	B0層		6		36	2.25
するB3～L3層や漸移層	L1H層		16		57	3.35
では認められないが、その	B1層上部	199	17		149	5.73
他の時期ではある程度組成	B1層下部		26	33.17	234	5.85
している。③石器集中と分	B2層	173	66		404	7.77
	L3～B3層	57	52	30.06	27	3.38
	L4～B4層	28	8	14.04	7	1.75
	L5～B5層	12	4	14.29	0	@
			0	@	0	@



第1図 時期毎の縄群形質

布が重なる頻度（石器集中との共伴率）については第3回下段のとおりである。B 2層で6割以上、L 1 H層で8割以上の疊群が石器集中と分布が重なっているようである。また、B 3～L 3層では3割に満たない割合であるが、B 1層上部以降は5割近い割合で石器集中と分布が重なるといえる。

これらのことから、B 4～L 3層にかけては、2割に満たない遺跡において、1遺跡あたり4基に満たない疊群が認められ、それらの疊群は、20点未満の疊で構成される5m未満の小規模な疊群で、かつ石器集中と分布が重ならない事例が多く組成していた。それがB 2層において、検出事例は増大し、3割以上の遺跡において平均7基を超す疊群が認められるようになる。疊群自身も、20点以上の構成疊からなるものや5mを越す広がりのある事例も認められるようになり、石器集中との分布の重なりも高い割合で認められる。このことからも、B 2層の時期において、道具の加工方法・居住の仕組や移動の仕方など、疊群が形成される頻度や遺存する度合いを高めるような大きな変化が起こったと考えられる。

(吉田政行)

b) 配 石

これまで集成された配石は17遺跡22文化層116事例を数え、漸位層～B 4層にかけて確認されている。確認層位 漸位層で1遺跡1文化層2事例、L 1 S層では1遺跡1文化層1事例、B 0層で4遺跡4文化層7事例、L 1 H層で2遺跡2文化層2事例、B 1 U層で1遺跡1文化層2事例、B 1 L層で4遺跡4文化層18事例、B 2層で2遺跡7文化層80事例、B 3層で1遺跡1文化層3事例、B 4層で1遺跡1文化層1事例が確認され、L 2層とL 3層では確認されていない。各層位ごとの事例数は多い順にB 2層の80事例、B 1 L層の18事例、B 0層の7事例となるが、これら以外の事例数は1～3事例までであり、B 2層の80事例が数の上で突出し、全体の事例の約70%を占めているが、B 2層ではその90%以上が柏ヶ谷長ツサ遺跡1遺跡の事例だけ構成されている。

重量 配石の定義は「1kg以上の主に焼けていない疊が点在するもの」(保坂1980)や900g以上の疊(竹内他1996)等がある。B 1層の配石は「おむね1kg以上の疊・石器によって構成される。」といった設定基準を授用した場合、他の遺跡でも抽出される可能性が高い(吉田2004)ことが指摘されている。B 2層で90%以上を占める柏ヶ谷長ツサ遺跡の配石の設定基準は「900g以上の疊」(保坂1996)である。配石を他の疊や石器と分ける上で重量の基準が重要とされるが、これまでの集成された配石で報告に重量の記載がある112事例中、「おむね1kg」あるいは「900g以上」の疊を構成疊に持つ配石は116事例中105事例で全体の約90%を占めるため、本稿で扱う配石は重量面での基準がおむね満たされたと判断される。

形態 平面形が扁平の配石が大半と推定されるが、構成疊が楕円形を呈する柏ヶ谷長ツサ遺跡第IX文化層配石26・32・34や構成疊が棒状を呈する南鎌治山遺跡漸位層1号配石等の形態は特異な例と理解される。

個体数 接合後の疊の個体数は1～20まで、その数は多い順に宮ヶ瀬サザランケ(No12)遺跡第III文化層P 1号配石の20個体、南鎌治山遺跡漸位層2号配石の13個体となるが、それ以外は10個体以下で構成され、単独の疊で構成される配石は116事例中64事例あり、全体の約60%を占めるが、更にその約90%を柏ヶ谷長ツサ遺跡の57事例が占めるので、柏ヶ谷長ツサ遺跡の場合は遺跡の特性や「配石遺構に対する報告者の捉え方や見解の相違」(島中2005)が要因になったと考えられる。

分布範囲・状態 平面分布は、構成疊が単独か重複する場合を除くと、長軸0.3～3.6m×短軸0.1～3.6mの範囲にあり、分布状態は構成疊数が多いほど集中か密集、少ないほど散漫か分散と捉えられている。

赤化・破損 構成疊に赤化の痕跡が認められる配石は報告に記載のある111事例中95事例あり、全体の約90%

を示す。構成礫にヒビもしくは剥落等を含めた破損部分の認められる配石は報告に記載のある104事例中70事例あり、全体の約70%を示すが、構成礫が単独で破損部分の認められる配石は63事例中31事例で、全体の約50%を示すことから、単独の礫で構成される配石は破損例が少ない傾向がうかがえる。「赤化についてでは埋没後の酸化による可能性」(吉田2003)もあると指摘されているが、ヒビもしくは剥落等の破損とともに、これらの痕跡は礫群構成礫と共に通する特徴であることが確認される。

石材組成 報告に記載のある37事例に限定されるものの、配石を構成する石材には凝灰岩や砂岩、安山岩、チャート等のあることがうかがえる。宮ヶ瀬サザランケ (No12) 遺跡第Ⅲ文化層P 1号配石は、岩質から川原石で構成されたことが推定され、柏ヶ谷長ツサ遺跡第Ⅸ文化層配石26・32・34は多孔質安山岩に限定される石材組成が明かとなり、前者は「性格がまったく明らかではない」と捉えられ(鈴木1996)、後者は「磨石状礫集積遺構」と捉えられた(畠中2005)。このような石質の違いや石材組成のあり方から、配石が一律に同じ機能を担った遺構と捉えることは困難であると考えられる。

石器群における関係 配石の各文化層内における石器集中や礫群等との関係は平面分布の位置関係で明らかとなる。南鍛冶山遺跡漸位層1・2号配石は2列の弧状配列が確認されている。宮ヶ瀬サザランケ (No12) 遺跡第Ⅲ文化層P 1号配石は、石圓炉と赤化した礫群に推定される部分が接する。柏ヶ谷長ツサ遺跡第Ⅸ文化層配石1は単独だが、866点の石器集中の縁辺に磨石状礫2点と礫群を伴って位置していることから「ある種の作業地点を暗示させる配置」が想定され、同遺跡第Ⅸ文化層の配石26・32・34は石器集中や礫群の外縁または空白域に位置していると指摘されている(堤1997a)。これらの事例は他の配石にはみられない特異な分布状態を示すことから、大半の配石とは性格や機能が区別される可能性がある。石器集中と分布がほぼ重なるもしくはその縁辺に位置する配石は116事例中91事例あり、全体の約80%で、礫群と分布がほぼ重なるもしくは礫群の縁辺に位置する配石が116事例中59事例あり、全体の約50%であることから、配石は礫群よりも石器集中に伴う傾向がうかがえる。なお、礫群に伴って3個体以下で構成される柏ヶ谷長ツサ遺跡の配石は遺跡の回帰的な利用過程で、何度も利用されたことが類推されている(保坂1997)。

構成石器 配石の一部を構成していたと推定される石器には南鍛冶山遺跡漸位層1号配石の打製石斧・剥片、宮ヶ瀬中原 (No13c) 遺跡第V文化層P 2号配石の台石、同遺跡同文化層P 3号配石の礫器、宮ヶ瀬上原 (No.13) 遺跡第V文化層P 3・5・6・10号配石の叩石、同遺跡同文化層P 8・10号配石の台石、柏ヶ谷長ツサ遺跡第Ⅸ文化層配石1の台石等がある。

共伴石器 配石と共に伴する石器では、柏ヶ谷長ツサ遺跡第Ⅳ文化層に細石刃・細石刃核・スクレイパーを伴い、今田遺跡第II文化層第1号配石に剥片類・スクレイパーを伴うことが指摘される。

周辺の石器 座間市栗原中丸遺跡の礫器や宮ヶ瀬サザランケ (No12) 遺跡第Ⅲ文化層P 1号配石の磨痕のある礫等は配石の周辺に伴う石器と考えられる。

性格と機能 配石にはピットや土坑、炭化物集中等が周囲で検出されず、縄文時代以降に特徴的な儀礼行為も示唆されてはいないので、性格や機能の特定は困難と思われるが、本稿でこれまでに明らかとなった配石は一律に同一の性格や機能を担った遺構とは考えにくく、いくつかの種類に分かれることが確認される。

大半の配石は礫群構成礫と同様に赤化やヒビ・剥落等の破損がみられたり、礫群と分布が重なるもしくはその縁辺に位置すること等から礫群と同様の機能を担った遺構の一部と類推される。柏ヶ谷長ツサ遺跡の礫群に伴う3個体以下の配石は、回帰的な遺跡利用の際に複数回利用されたことが推察されている(保坂1997)。のことから遺跡の回帰的な利用を目的とした配石もあったと考えられる。

柏ヶ谷長ツサ遺跡第Ⅸ文化層の配石26・32・34は、石器集中や砾群等との位置関係と多孔質安山岩に限定された石材組成から、石器もしくは石器素材（原材）の一時保管場所であったと想定されている（堤1997b）。大規模な石器集中の縁辺に位置し、磨石状2点と砾群を伴う大型台石1点で構成される柏ヶ谷長ツサ遺跡第Ⅸ文化層配石1は、ある種の作業地点を暗示させる配置と捉えられている（堤1997a）。この場合の配石は、ある種の作業に関係する付帯施設であった可能性がある。宮ヶ瀬サザランケ（No12）遺跡P1配石は石囲炉や赤化した砾群に推定される部分が近接することにより、その構成砾は石囲炉や砾群構築のために集められ、その後不要とされたために廃棄されたと推定される。この他、南鍛冶山遺跡漸位層1号配石には、テント状の作業小屋か住居等で土器を据え置くための施設とされる部分のあったことが棒状を呈する一部の構成砾から想定されている（桜井1994）。

以上のようないくつかの異なる性格や機能が想定された配石からは、該期の変化する環境で必要とされた多様な文化的行為の一端が読み取れる。

（井間文明）

c) 磨石状砾集積遺構（第2図）

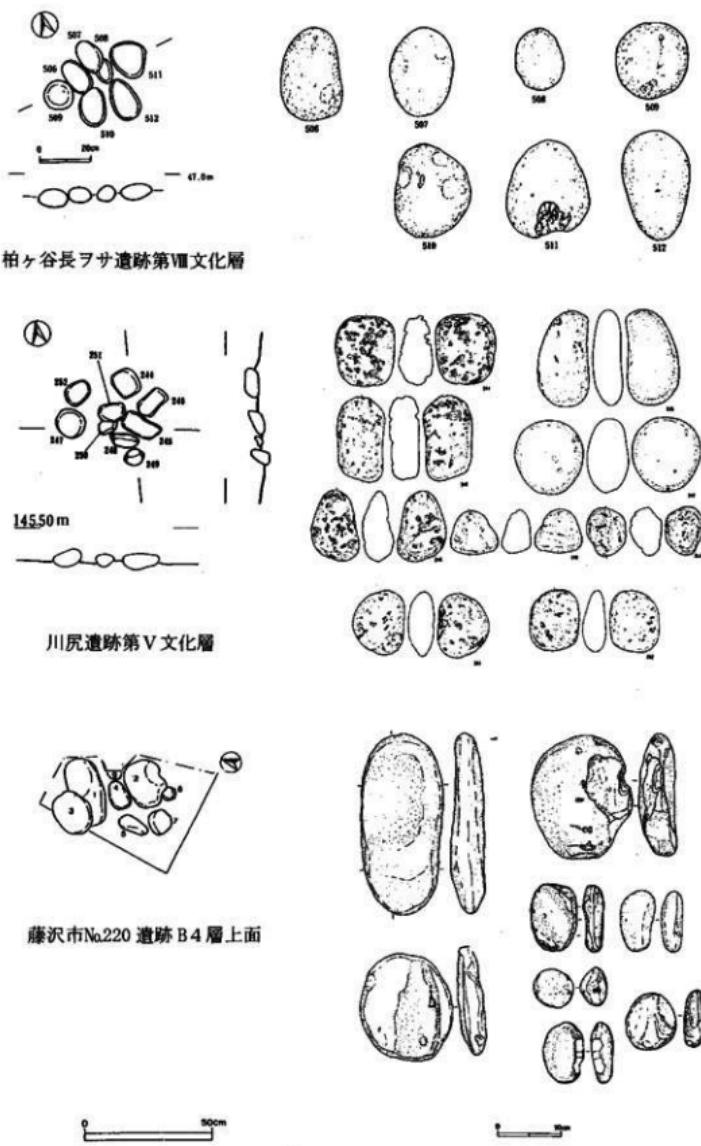
「磨石状砾集積遺構」は相模野第Ⅷ期（B2層）相当の時期に特徴的に認められるものである。これは、多孔質安山岩や富士玄武岩等とされる石材（註1）の「磨石状の円砾」が数点まとめて出土する事例であり、分布は相模野台地を中心に大磯丘陵や武藏野台地でも同様の出土例が知られている。この事例については、今までに何回かの集成がなされており（須田1996・2002、加藤1996、旧石器時代研究プロジェクトチーム2005）、「磨石状砾」について砾群出土砾との違いが分析され（須田1996）、他の時期で見られる磨石・砾石との違いについても言及されている（加藤1996）。

「磨石状砾集積遺構」に伴う「磨石状砾」の特徴として、1. 石材が多孔質安山岩や富士玄武岩等とされる石材に偏る。2. 大きさ・形態・破損率が砾群出土の砾と異なり、選択性が想定される。3. 磨石として報告されることが多く、磨痕・敲打痕が見られる例もあるが、多孔質な石材の性格上磨痕の不明確な例も多い。4. 被熱の痕跡が見られない場合が多い。等の特徴が挙げられる。

石器ブロック・砾群と分布を異にして独立した集積状態で検出された例として、藤沢市南葛野遺跡第Ⅱ文化層第13号拡張区第1号砾集中部例、平塚市原口遺跡第Ⅱ文化層1号砾群例、綾瀬市早川天神森遺跡第Ⅵ文化層例、同市吉岡遺跡E区B2層例、同市吉岡遺跡群C区22ブロック例、相模原市橋本遺跡第Ⅳ文化層例、藤沢市菖蒲沢大谷遺跡第Ⅳ文化層1号ブロック例（麻生2006）等が挙げられる。

石器ブロック・砾群と隣接して検出された例としては、藤沢市南葛野遺跡第Ⅱ文化層第15拡張区第2号砾集中部例、海老名市柏ヶ谷長ツサ遺跡第Ⅸ文化層配石26・32・45例、城山町川尻遺跡第V文化層例が挙げられる。柏ヶ谷長ツサ遺跡例の報告書では「配石」（「磨石状砾集積遺構」）の分布が石器分布・砾分布の空白地點にあることから、住居・設置物・木などの内部かそれに隣接して設置されたことが想定されている。

石器ブロック・砾群と共に出土している例として、綾瀬市吉岡遺跡C区B2層例が挙げられる。吉岡遺跡C区例では「磨石状砾」によるいくつかの「ユニット」が「石器ブロック」を構成している例もあるほか、集積した状況での出土例以外に破損した「磨石状砾」の接合例もある。出土状況だけではなく、出土した「磨石状砾」の大きさ・形態にもバリエーションがあるようである。報告書では器種として、磨石のほかに石皿・台石等の分類がされている。集積する状態を呈しないが、砾群・石器ブロックと共に「磨石状砾」が多く出土した例として、藤沢市慶應大学湘南藤沢キャンパス内遺跡第Ⅳ文化層例が挙げられる。相模原市田



第2図 磨石状隕集積

名堀ノ内遺跡においても、B2層相当層で検出された砾群中に肉眼上は被熱の痕跡が見られない富士玄武岩の円礫が含まれておる（加藤2005）、集積していくなくても「磨石状礫」の存在には注意が必要であろう。

「磨石状礫集積遺構」の性格については、「磨石状礫」が携行するには重量がある「石器」であることから、堤隆は保管場所である「キャッシュ」を想定している（堤2000ほか）。同じ地点への将来的・回帰的な使用を期待して作られた遺構といえるであろう。「磨石状礫」の用途としては、磨石としての植物加工の道具、敲石としての石器製作の道具の他、民族例を援用した皮革加工（堤2000）の道具が想定されている。

相模野第Ⅲ期以外の時期の類例として、より新しい時期の例としては、相模原市田名向原遺跡の「住居状遺構」の外周に環状に配置された、多孔質の玄武岩を主体とする磨石状の円礫が挙げられる。石器群は相模野Ⅳ期後半に位置付けられ、層位はB1層上部相当層である。古い時期では藤沢市No220遺跡の相模野第Ⅱ期にあたるB4層上面で石皿3・磨石4ほかがまとまって出土している例が挙げられる（加藤・安達1996）。

（加藤勝仁）

註1 石材の名称については1996年当時、相模川水系でと想定される石材も酒匂川水系と想定される石材も一括して「多孔質安山岩」とする傾向があったが（加藤1996）、最近では相模川水系で採集可能なものに「富士玄武岩」、箱根方面に産地が想定されるものに対し「多孔質玄武岩」と使い分けがなされているようである（柴田2004ほか）。

d) 住居状遺構（第3図、第2・3表）

2001年度より本プロジェクトのテーマとして扱ってきた縄文時代草創期および旧石器時代の遺構の中で、住居状遺構は最も検出例が少ない遺構である。具体的には縄文時代草創期では勝坂・上和田城山・吉岡遺跡群A区・南鐵治山・慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡II区の5遺跡6事例、旧石器時代ではJ1H層より田名向原遺跡の1例が報告されているに過ぎない。しかし、この傾向は、決して本県に限った現象ではなく、この時期、取り分け旧石器時代の住居状遺構として報告されている遺構は、全国的にみても僅か19例程度の検出数に留まる（第2・3表）。

稻田孝司は、旧石器時代の住居状遺構の判断基準として、①住居が一定の構造を持ち、それが安定した状態にあること、②年代判定可能な遺物を伴い、住居状遺構と遺物の分布に有機的な関連があること、③遺構の上を安定した無遺物層が覆い、他の時期の遺構・遺物との見分けが明瞭であること、という3つの条件を満たす必要があると定義した。同時に上記の3条件は必ずしも全てが揃っている必要性は無く、確実な住居例の検出とともにその後は柔軟な判断が可能であるとしている（稻田1988・2003）。しかし、これ以後も、旧石器時代の住居状遺構の検出例が著しく増加したといった事実はない。この背景には、日本の土壤の大部分が酸性土であり、住居状遺構の構造材的な資料が残存しにくいといった物理的要因が大きく影響しているものと考えられる。

旧石器時代の人々の痕跡は、大小の規模の差異はあるものの一定の空間的広がりを持った石器製作址として発見されることが多く、旧石器時代の遺物の出土状況としてはこれはむしろ一般的なものである。しかし、前述の様な理由によりこれまでにそこから住居状遺構の構造材と考えられるような明確な資料の出土は確認されていない。筆者は以前、旧石器時代の住居状遺構を「雨・風・暑さ・寒さ・外敵などから身を守るために構築された前後・左右および上部の一定空間を人為的に囲ったもの」と定義したが（栗原2004）、全国各地で普遍的に発見されているこの石器製作に関わる作業が常に屋外で実施されていたとは考え難い。当時の生活形態は遊動を主体とした狩猟採集社会であったと考えられているが、風雨等をしのぐのに常に洞穴・岩

しかし、これが簡易であればあるほど、前述の物理的要因とも相俟って、遺跡の調査中にそのような遺構の痕跡を検出することはより困難である。本県の場合、縄文時代草創期では6件中5件が極めて浅いものの堅穴状の掘り込みを有している。各地から検出されている旧石器時代の19例についても、掘り込みを有するものが12例と全体の2/3程度を占めている。つまり、時期的な差異というよりも考慮する必要はあるが、基本的には掘り込みを伴うものは悪条件の中でも比較的発見される可能性が高く、掘り込みのないものについてはその発見例が少ないと傾向にある。

この様な状況の中、田名向原遺跡の住居状遺構は、掘り込みは確認できなかったものの、外周円環と剥片石器・炭化物等の出土範囲の関連性、柱穴の配列および柱穴内の土層の堆積状況、炉址の存在など、いわゆる状況証拠の積み上げ的な認定方法でしかないが、福田の提示した各条件を満たした遺構と考えられる。しかし、直径約10m四方という規模での検出は、それまでの予想をかなり上回る大規模なものであったと言えよう。宮本長二郎による上屋構造の復元も試みられているが、宮本も論文中で指摘しているように現段階ではあくまで1つの案の提示であり、今後さらなるデータを加えた解析が必要となろう。

但し、L 1 H層のこの段階から、この様な遺構が発見されたことの意義は大きいものと考えられ、田名向原遺跡の住居状遺構は、旧石器時代の人々の住居構造や居住形態を解明する上で大きな足がかりになるであろう。

(栗原伸好)

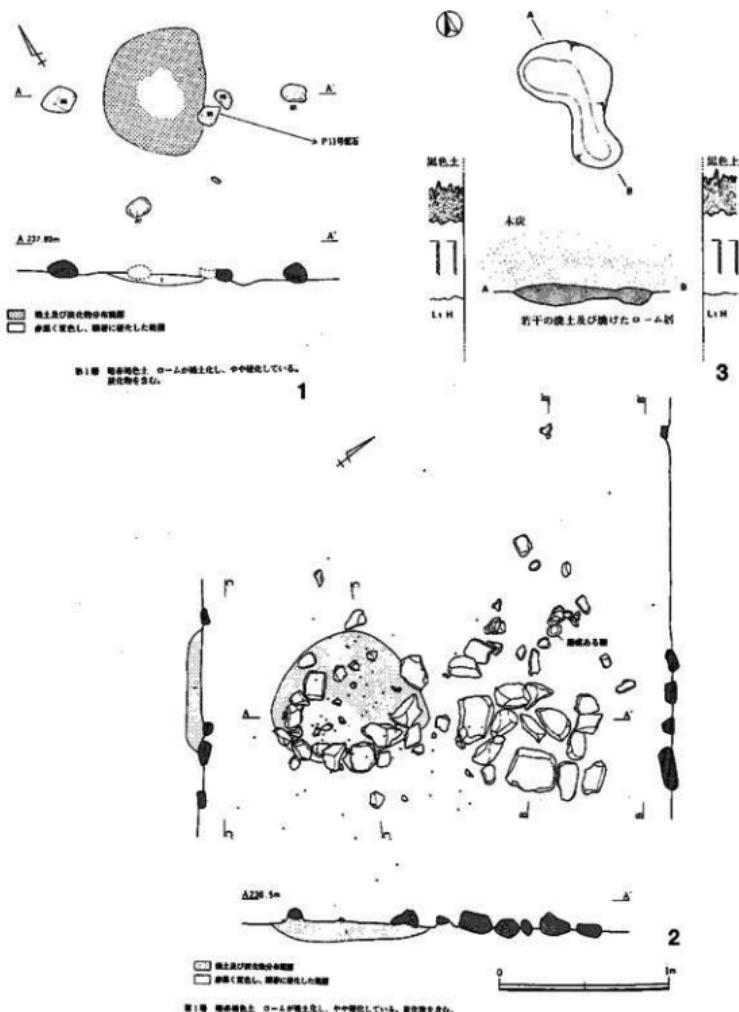
④ 炉 址 (第4図、第4表)

神奈川県内において、旧石器時代の炉址に関する報告は極めて少ない。これまで本プロジェクトで集成してきた全てを合わせても10例にも満たない。発見遺跡も偏っており、調査当時における担当者の判断にも左右されるものと思われる。そもそも「赤土」と称されるローム層中において、焼土を認識し、炉址と判断するのは難しいかもしれない。また、よく似た構造をもちらながら、炉址とは認定されない遺構もあるだろう。ただ、今回はそうした事例を全て取り上げて検証している時間的・紙面的な余裕はなく、これまでに集成された炉址について述べるに止めたいと思う。

大和市上和田城山遺跡では、B 0層下部から出土し、周囲には細石刃の石器集中が伴っている。ローム面が焼けただれていのが認められるが、掘り込みは不明瞭であるという。宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡では

第4表 神奈川県内で発見された旧石器時代の炉址

遺跡名	標高(m)	文 号	遺跡名	長径(m)	短径(m)	掘り込みの有無	地質	地帯分帯	石の状態	石材組成	備考
上和田城山	BBL	H	炉址	0.80	0.45	不明	-	-	○	1cmの木炭を含む。	
宮ヶ瀬 サザランケ (No. 1 2)	LHIM	H	P1号炉址	1.00	0.70	有(0.15m)	92	密集	○	中粒凝灰岩; 47. 安山岩; 19. 火山巖 泥灰岩; 10. 石英閃长岩; 6. 流れい 岩; 5. 硅酸塩岩; 4. 灰岩; 2. 硫 酸塩岩; 1. 長石矽長岩; 1. 玄 武岩; 1.	"O"の字の縦に織を配置し た右図と、奥壁してP 1号配 ね
宮ヶ瀬 サザランケ (No. 1 2)	LHIM	H	P2号炉址	1.00	1.00	有(0.15m)	40	やや 密集	○	中粒凝灰岩; 12. 灰岩; 9. 火山巖 泥灰岩; 5. 安山岩; 1. 鹿れい岩; 3. 長石矽長岩; 2. 硫酸塩岩; 1. 不規 則岩; 1.	北半分削減、左の西側には幼 児頭の大約6倍配置、最右1
宮ヶ瀬中東 (No. 1 3 c)	BBIM —L	V	P1号炉址	0.65	0.55	無	31	散乱	○	軟質火成岩灰岩; 5. 中粒凝灰岩; 3. ビーチ; 29. スス; 1. タール; 5	門: 1. 開口; 3. 片井: 1 [$f_{18} = 1820 \pm 100$ y, B.P. (AM 測定)]
宮ヶ瀬中東 (No. 1 3)	BBIM —L	V	P1号炉址	0.75	0.65	無	-	-	○	軟質火成岩灰岩; 5. 中粒凝灰岩; 1. 硫酸塩岩; 1. 火山巖凝灰岩; 3. 鹿れい岩; 1. 硫酸塩岩; 4. 硫質 中粒凝灰岩; 1	火成岩分布: 中央部(0.3 × 0.4m)多量 炭化物はカラマツ葉ごと トウヒ葉(1240 ± 100 y, B.P. (AM測定))
宮ヶ瀬上東 (No. 1 3)	BBIM —L	V	P2号炉址	0.75	0.60	無	5	散度	○	中粒凝灰岩; 3. 硫質砂岩; 1. 鹿れ い岩; 1.	火成岩分布: 全面
宮ヶ瀬上東 (No. 1 3)	BBIM —L	V	P3号炉址	0.30	0.25	無	10	散乱	○	粗粒凝灰岩; 1. 安山岩; 1. 硫質砂 岩; 1. 火山巖凝灰岩; 2	炭化物分布: 全面
用田大河内	BBL	D	第2石器 集中地點 1号炉址	0.68	0.50	有(約 0.25 m)	69	やや 密集	○	硫鐵鉱; 69	中粒凝灰岩・砂岩を主体とする。 石炭・炭化物や礫土等を分離 する事で区分される。平底 鍋の深さ: 220 ± 80y, B.P. (AM 測定)



第4図 炉址 (1.宮ヶ瀬遺跡群上原遺跡 P 2号炉址 2.同サザランケ遺跡 P 1号炉址 3.上和田城山遺跡ファイアーピット)

L 1 H層中より2基の炉址が出土した。P 1号炉址は、拳大から幼児頭大の礫が「U」字状に配置された石圓炉であり、炉址に伴う炭化物によるC14年代測定からB.P.17460±330という測定値が出されている。同宮ヶ瀬遺跡群中原遺跡で1基、上原遺跡では3基の炉址が、B 1層中～下部より出土している。上原遺跡のP 1号炉址を除き、礫を伴う石圓炉と推定されているが、明確な掘り込みは確認されていない。用田バイパス

関連遺跡群大河内遺跡第VI文化層ではB 2層中から1例発見された。本遺構は、深さ25cm程の掘り込みをもち、被熱した69点の礫を伴っていた。その他、相模原市の田名向原遺跡No.4地点で発見された住居跡の中央付近からは2基の炉址が報告されている。

以上が、これまでに本プロジェクトにて集成した炉址の概要であるが、次に旧石器時代を通じた炉址の特徴をいくつか挙げてみたい。第一に、縄文時代の石圓炉にみられるような掘り込みがあまり顯著ではないという点である。宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡と用田大河内遺跡の例以外では明確な掘り込みは確認されていない。確認が困難ということもあるかもしれないが、共伴する礫等とのレベル差からも掘り込みが無い又は不明瞭なものが多い。第二に、礫が伴う点である。炉址に共伴する礫は、サザランケ遺跡のように炉の周りに整然と配されることは稀であり、むしろ大小様々な礫が炉址と重複して礫群を形成している場合がほとんどである。おそらく旧石器時代の炉址と礫群とは極めて密接な関係を有していたものと考えられる。第三に、すべての炉址が、粗密の差はあるものの石器集中を伴っているという点である。以上3つの点から、旧石器時代の炉址は、短期間に移動を繰り返す生活において、ある種の「イエ」を単位とした中で機能していた遺構であったと思われる。

(高田俊明)

① 土坑・ピット（第5～8図）

これまでのところ縄文時代草創期から旧石器時代にかけての土坑は30基ほど確認されている。これらを概観すると時期的には縄文時代の草創期とB 3層段階、地域的には県央の台地部分（相模野台地や相模川を挟んだ対岸の伊勢原台地）と三浦半島南部にくっきりと区分される。さらにそれぞれの区分は現状では相關しており、B 0層以下の文化層においてはB 3層以外の報告資料は見あらない。

縄文時代草創期、県央地区で蓄積されている資料では2002年以来新資料はない。ただ、綾瀬市の上土棚遺跡からはL 1 H層から掘り込まれたと見られる土坑が5基検出されており、墓坑である可能性が指摘されている。

B 3層相当での資料では横須賀市の打木原遺跡で発見されたまとまった資料、土坑SK01～09が特筆される。これらの9基の発見例のきっかけとなった同一台地上の文化財確認調査において1990年には別に3基の土坑が報告されているものが初例となっている。また、同市佐島の丘遺跡群において発見された高原北遺跡2例、一本松遺跡3例など同層準に比定される発見例が相次ぐ。

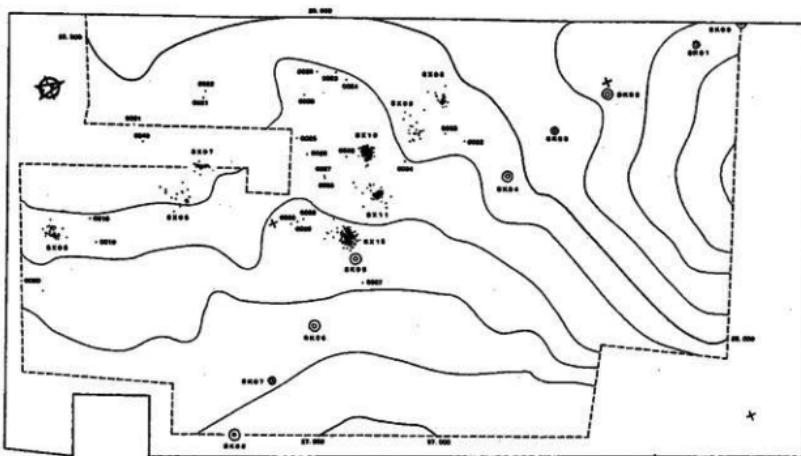
県外におけるこれらの類例は、今の所武藏野台方面では武藏台西地区で発見されたSK-15例以外には求めることができず、もっぱら静岡県方面に求めなければならない。静岡では初音ヶ原を代表格として下原・加茂ノ洞・焼場・観音洞B・谷田押切・八田原など多くの発見例があげられており、比定される時期や形態、帶状に分布する様など酷似する点が多い。

また、近年調査が行われた横須賀市に隣接する三浦市のがんだ畑遺跡においても同様な土坑が発見されており、近く報告書が刊行されるという。今後の県内における資料数の増大、ことに静岡から三浦半島の間に広がる空白地域、また武藏野台への分布の広がりを含めた発見例が期待される。

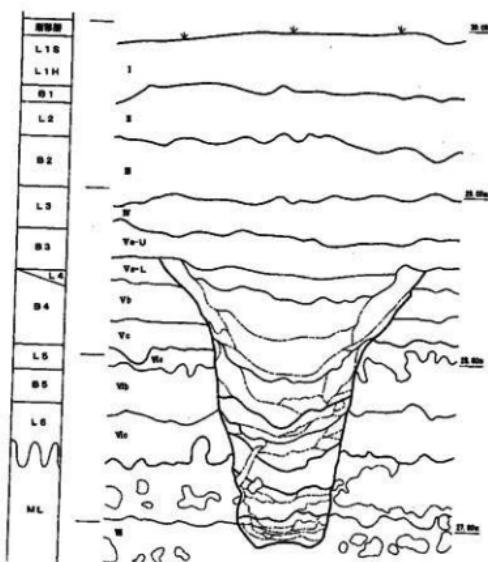
(三瓶裕司)

② 炭化物集中箇所（第9図）

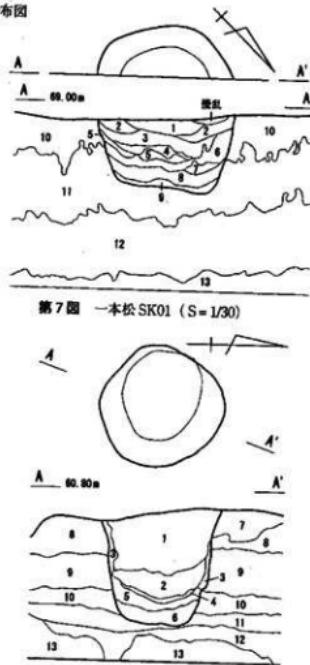
炭化物集中の多くは平面分布及び垂直分布において、ある一定の範囲に微細な炭化物がまとまって検出されたものである。各報告者によって炭化物集中箇所、～集中地点、～集中部など様々な呼称があるが、それ



第5図 打木原遺跡土坑分布図



第6図 打木原SK09 (S = 1/30)



第7図 一本松SK01 (S = 1/30)

らを「炭化物集中」と捉え、集成を行ってきた。その結果、検出層位を基準に抽出してきたこともあり、一部縄文時代として報告されているものも含むが、漸移層以下ローム層中から発見されたものとして、25遺跡81例（註1）、このうち9例は草創期等、縄文時代の所産とされている。詳細データは既刊行の各号に譲る。

これらの中には微細な炭化物だけではなく、用田鳥居前のように板状の炭化材が残存していたものなども含まれる。以下、集成されたデータを基に若干の検討を加えていきたい。

規模 炭化物の分布範囲を規模として捉えている。

報告書内明記の規模の他、明記されていないものは、平面図とともに本プロジェクト集成者が計測を行った数値である。この数値を扱う上では、葛原淹

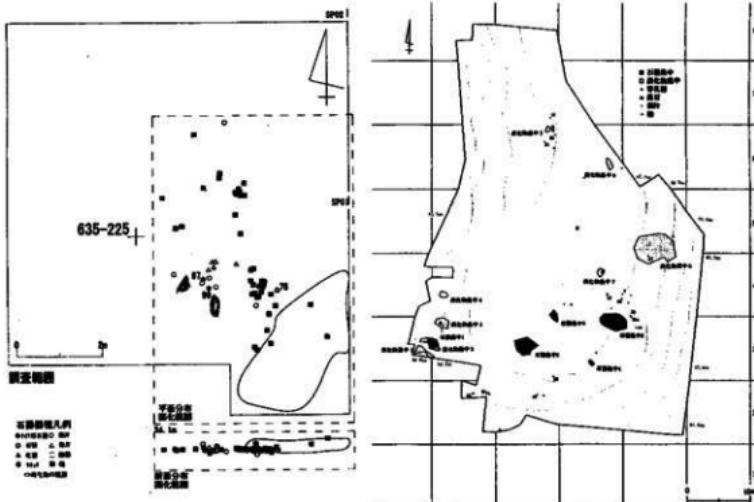
谷や二ノ丸のように10m以上の範囲に広く炭化物が分布しているなかに、更に炭化物がより集中する箇所が複数箇所見つかっている例もあり、どこを対象として規模と捉えるかなど、統一した基準は必要と思われるが、ここでは、前述の例でも、より集中した箇所を炭化物集中の1例と捉え、規模の判明している72例を元に検討を加えたい。

この72例のうち、最大の規模で径10m、最小規模が0.7m弱であり、規模は大小様々である。また参考までに各層位毎の平均規模を第5表に示した（註2）。これら全体の平均値を見ると、概ね長軸約3m、短軸2mの規模である。ただし、石器でさえ土中での移動がある。ましてや炭化物は微細で非常に軽量であり、埋没以前、以後に自然の営力により相当な影響を受けていると思われ、全てが本来あるべき規模を保っているとは到底考えられない。しかしながら、現代においては調査により確認し得た数値のみが結果であり、

第5表 各層位毎の平均規模

検出層位	対象事例	長軸平均	短軸平均
L 1 S層	2遺跡2例	2.50	2.30
B 0 層	5遺跡6例	3.42	2.68
L 1 H層	5遺跡8例	3.64	2.21
B 1 層	9遺跡24例	3.16	2.18
B 2 層	7遺跡20例	2.91	2.13
L 3層以下	3遺跡12例	2.58	1.74
全体平均	20遺跡72例	3.05	2.14

*報告上縄文時代となっているもの、規模が不明などを除く (m)



第9図 炭化物集中 [1. 南鎌治山0201遺物集中 (B B 0 ~ L 1 H層) 2. 山ノ神石器群IV遺物分布図 (B B 3層)]

ここで提示した数値もあくまでも、そうしたことの前提とした一つの結果であることを断っておく。更には、この数値をもって炭化物集中の規模の傾向もしくは特徴を抽出し得たとは思っていない。むしろ後述する検出状況が、炭化物集中という遺構を考える上で重要な要素となりうると思われる。

検出状況 通常、粗密はあるにせよ、平面的に炭化物がある程度のまとまりを持って分布している範囲を炭化物集中と捉えている例が多く、今回集成し得た事例の多くもこれに該当する。これらの中には炭化物の分布のみ、掘り込みを伴うもの、礫群と重複するもの、石器集中部と重複して検出されているもの、重複しないまでも、周辺に石器集中部が認められるものなどがあり、礫群、土坑等のような主たる遺構というよりは、それらの性格を検討する上での付加的な側面の強い遺構であると言える。炭化物集中は基本的に木材等が燃焼した痕跡と考えられるが、その検出状況の検討によって、その場で燃焼行為が行われた要因が推察されるものと思われる。以下に、遺構と共伴する例を幾つか挙げてみる。

掘り込みを伴うもの 葛原滝谷B B 1層上部で土坑を伴う事例が報告されている。

礫群と重複するもの 受地だいやまB B 0層下部～L 1 H層上部検出の炭化物集中、用田南原B 2 U～B 2 L①層では石器群、礫群と重複して検出されている。

石器ブロックと重複するもの 小国前畠B 2 L層上面ではブロックを取り囲むように木炭が分布していたと報文にあり、南鍛治山B B 0～L 1 H層では炭化物集中の分布と接して礫集中や石器集中が分布していた。用田鳥居前IV B B 1層下部の第3石器集中地点では炭化物集中を取り囲むように石器が分布していた。

このように何らかの遺構と共伴して検出された炭化物集中は、その遺構に付加情報を与える。仮に礫群が調理施設とするならば、食物等に加熱するために火が焚かれた跡であろうし、また「石器ブロックと重複するもの」は、石器製作に伴い、時として作業中の照明の替わりや、暖をとる手段、外敵から身を守るために、更には石材に加熱処理を施す施設であったりと、様々な設定が推察される。今後は、資料の更なる増加に伴い、個別事例の検討と共に遺跡全体での分布のあり方、他遺構との関係も含め、より詳細な分析・検討が必要となろう。

まとめ 以上のように、炭化物集中は様々な規模、検出状況があり、一つの遺構として、一定の特徴を見いだすことは困難だが、当時の人々が活動を行った結果として、土中に既然と記された痕跡であることは間違いない。炭化物が残存する事となる原因は、その当時の人々の活動内容や、その場所の状況や環境に応じて様々考えられる。ただし自然災害の痕跡など、全てが人為的な行為の所産と断定できない部分を含んでいるのも確かである。いずれにせよ炭化物集中は、「火」と密接に結びついた遺構として、当時の人々の遺跡内での生活スタイルもしくは行動・行為を解明していく一つの要素となり得る重要な遺構であると言えよう。

(大塚健一)

註1 山ノ神遺跡の検出例が集成から落ちており、且つ、他のデータで表記上適切ではなかった箇所等を修正した結果の数字である。

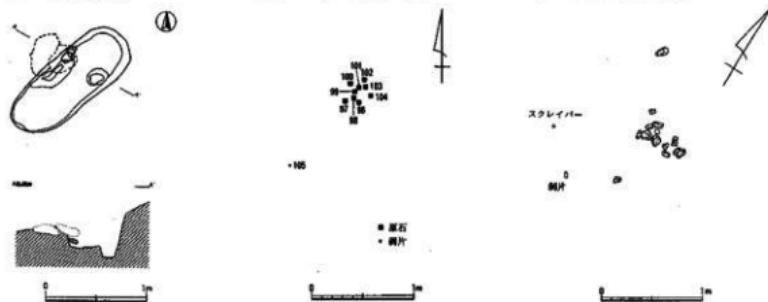
註2 複数層に跨って分布していると報告のある炭化物集中は、より分布の遡い層位に帰属させた。

h) デボ(第10回)

デボとしてはこれまで4例取り上げており、今回補遺として取り上げる1例を加えても合計5例確認されるにすぎない。その内訳は、F B層下部及びL 1 S層(繩文時代草創期)では南葛野遺跡と吉岡遺跡群D区の各1例、B 1層上部では田名向原遺跡No.2地点の1例、B 1層下部では宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡と下森鹿島遺跡の各1例である。これらの事例の中で、明確に埋納遺構として捉えうるのは吉岡遺跡群D区4ブ

ロックの事例だけであり、それは長指円形を呈する土坑の壁際覆土中に砾群・砾器各1点が埋納され、その上に大形の扁平な河原砾2点が蓋石のように配置されていたもの（第10図左）で、さらに土坑から2mほど離れて砾器・打製石斧各1点が出土している。そのほかの事例は、いずれも土坑や蓋石などの施設ではなく、石核や石核原料・黒曜石原石がまとめて出土したもので、その出土状況から埋納遺構と同様のデボと捉えたものである。各事例の内容は、南葛野遺跡3号遺物集中部からは砾器状の石核3点、田名向原遺跡No2地点2号ブロックからは信州産の黒曜石原石9点と黒曜石の剥片1点（第10図中）、サザランケ遺跡第V文化層ブロック外からは同一母岩の石核原料と考えられる大形の加工痕ある剥片・使用痕ある剥片各1点、下森鹿島遺跡第III文化層9号ユニットからは石核14点とスクレイバー・剥片各1点（第10図右、第10表）が集中して出土したものである。

(鈴木次郎)

吉岡遺跡群D区（草創期）
4ブロック埋納遺構田名向原遺跡No2地点
2号ブロック石器出土状況下森鹿島遺跡第III文化層
9号ユニット石器出土状況

第10図 デボ

おわりに

これまで数年にわたり、県内の旧石器時代遺跡（縄文時代草創期を含む）において検出された各種の遺構について集成を行ってきたが、今回はそのまとめを行った。それらを概観すると、砾群に代表される河原砾を配置した遺構と、掘り込みをもつ遺構、石器や炭化物の出土状況から遺構の一種として積極的に捉えたものがあり、河原砾を配置した遺構が圧倒的に多い。

砾群は、群馬県岩宿遺跡や東京都茂呂遺跡など研究初期の調査でその存在が確認されているように、もともと一般的な遺構であり、県内においては1,000基近い資料が検出されている。構成砾の多くは火熱を受けた痕跡を残し、旧石器時代の日常生活を支えた重要な遺構と考えられる。その時期的な出現頻度に偏りをもつことが明らかにされ、規模も多岐にわたる。配石は、古くは砾群と特に区別されることはなかったが、近年では、おおよそ1kg以上の砾により構成される遺構を配石として砾群と区分することが多く、そうしてみると構成砾の数量や火熱を受けた痕跡を残す度合いなどは通常の砾群とは異なる場合もある。また、磨石状砾集積遺構は、その名が示すように形状が磨石に近い砾が群集して出土する事例であり、構成砾の石材が富士玄武岩あるいは多孔質安山岩が多いことと、検出される層位がB2層に特に多いことが特筆され、石質によるものか明らかではないが火熱を受けた痕跡がほとんどみられないという特徴をもつ。さらに、炉址の中では石囲い炉も河原砾を配置した遺構といえる。ローム層中の調査では炉址を決定づける焼土の検出が困難な場合が多く、このため炉址の検出例が少ないものと考えられる。宮ヶ瀬遺跡群の炉址では、内部のローム層

が黒く変色し硬化している特徴をもつことが明らかにされており、こうした観点から礫群として捉えた遺構を観察することにより炉址の検出事例が増えることも想定される。

一方、掘り込みを有する遺構は比較的少なく、土坑やピットとピットを伴う住居状遺構がある。これらの遺構の多くはL1S層を検出層位とし、縄文時代草創期に位置付けられるものである。旧石器時代の遺構としては、上土棚遺跡のL1H層検出の墓壙とされる長方形土坑と三浦半島地域のB3層検出の陥穴状土坑があり、上和田城山遺跡と田名向原遺跡から住居状遺構が発見されている。このうち田名向原遺跡の住居状遺構は、旧石器時代では構造的に堅固に作られた建物施設として傑出した存在であり、その評価に当たっては、遺構の構造や規模と遺構内の遺物出土状況とともに遺構を構築した場所の地形的な立地条件など総合的に検討を加える必要がある。

このほか、炭化物集中箇所は、中には落雷等による火災など自然現象によるものもあり得ると考えられるが、多くは石器群や礫などの分布範囲つまり集団の居住範囲から発見されていることから、焼土とともに人類活動の火處の存在を示すものとして礫群や炉址などの遺構との関係で検討する必要がある。また、デボとした事例のうち、明瞭な埋納遺構は吉岡遺跡群D区の縄文時代草創期の事例のみであり、ほかはいずれも石核・石核原材・黒曜石原石が数点～十数点ほど集中して出土した石器ブロックであり、ブロックを構成する石器の内容からデボとしたものである。このことは遺構の一種として検討するだけではなく、むしろ石器ブロックのあり方から復元される旧石器時代の居住様式の問題として、より具体的にいえば石器製作と石材供給のあり方として検討する必要がある。

本誌では、現時点での各遺構についてのまとめを報告したが、その内容は必ずしも各遺構の性格や評価について詳細に検討したものではない。それは当プロジェクトの活動が日常業務を行いながらの共同研究という性格から、事例集成を第一の目的とし、まとめも集成した内容についてのまとめを基本としたためである。こうした事例集成の成果については、旧石器時代研究の基礎資料として県民や学界に提供するとともに当プロジェクトチームのメンバー各個人の研究資料として活用していかたい。

(鈴木次郎)

第5表 配石(補遺)

遺跡 No.	遺跡名	確認層位 文化層	遺構名	長幅 (m)	横幅 (m)	層數	分 布	礫の状態	石材組成	備考 (判別遺物等)
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lu	V	配石1	0.16	0.14	1	単 块	完形、赤化、重さ 908 g	2号ブロックと重複、礫群 8と重複
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lu	V	配石1	0.20	0.10	1	単 块	破損、赤化、重さ 1176 g	1号ブロックと重複、礫群 1と重複
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lu	V	配石2	0.20	0.20	1	単 块	完形、赤化、重さ 5545 g	1号ブロックと重複、礫群 4と重複
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lu	V	配石3	0.20	0.10	1	単 块	破損、赤化、重さ 1241 g	2号ブロックと重複、礫群 4と重複
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lu	V	配石1	0.60	0.30	1	単 块	完形、赤化なし、重さ 5300 g	1号ブロックと重複、礫群 8と重複
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lu	V	配石2	0.20	0.10	1	単 块	破損、赤化、重さ 1316 g	1号ブロックと重複、 9と重複
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lu	V	配石3	0.70	0.20	5	集 中	完形: 2、破損: 1、赤化: 5、重さ: 計 6170 g: 1185 g: 1071 g: 1372 g: 1319 g: 1243 g	7号ブロックと重複、礫群 13と重複
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lu	V	配石4	0.20	0.10	1	単 块	破損、赤化、重さ 927 g	7号ブロックと重複、礫群 15と重複
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lu	V	配石5	0.20	0.20	1	単 块	完形、赤化、重さ 2256 g	
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	II	配石1	0.20	0.15	1	単 块	完形、赤化、重さ 3375 g	24号ブロックと重複
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	II	配石2	0.15	0.10	1	単 块	破損、赤化なし、重さ 1869 g	多孔質安山岩
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	II	配石3	0.20	0.10	1	単 块	破損、赤化、重さ 2133 g	1号ブロックと重複、 2と重複
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	II	配石4	0.15	0.10	1	単 块	破損、赤化、重さ 975 g	1号ブロックと重複、 3と重複

神奈川県における旧石器時代の遺構（その6）

遺跡 No.	遺跡名	層位 層位	文化 層	遺構名	長幅 (m)	短幅 (m)	面積 m ²	分布 単純 複数 分類	の状態	石材組成	遺物 (伴存遺物等)
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 5	0.15	0.10	1	単純	破損、赤化、重さ 1785 g	2号ブロックと重複、礫群 7と重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 6	0.25	0.15	1	単純	破損、赤化、重さ 510 g	3号ブロックと重複、礫群 12と重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 7	0.80	0.20	2	複数 単純	完形:不明、破損:1・不明、赤化:2、 重さ:計 2500 g (1584 g, 1736 g)	7号ブロックと重複、礫群 20と重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 8	0.40	0.20	1	単純	完形、赤化、重さ 10910 g	5号ブロックと重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 9	0.15	0.10	1	単純	破損、赤化、重さ 1897 g	5号ブロックと重複、礫群 30と重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 10	0.15	0.10	3	重複	完形:1、破損:1、他不明:1、赤化: 2、地不詳:1、重さ:計 1397 g (1328 g, 79 g)、他不明	5号ブロックと重複、礫群 35 cと重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 11	0.40	0.15	1	単純	完形、赤化、重さ 1425 g	5号ブロックと重複、礫群 35 aと重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 12	0.15	0.10	1	単純	破損、赤化、重さ 5140 g	5号ブロックと重複、礫群 40と重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 13	0.20	0.10	2	重複	完形:0、破損:2、赤化、重さ:g:計 1137 g (1104 g, 33 g)	5号ブロックと重複、礫群 40と重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 14	0.20	0.10	1	単純	完形、赤化、重さ 4075 g	5号ブロックと重複、礫群 29と重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 15	0.25	0.10	1	単純	破損、赤化、重さ 1281 g	5号ブロックと重複、礫群 43と重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 16	0.60	0.20	2	重複	完形:2、破損:0、赤化:2、重さ:g: 計 3335 g (1810 g, 1517 g)	5号ブロックと重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 17	0.20	0.10	1	単純	破損、赤化、重さ 911 g	7号ブロックと重複、礫群 49と重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 18	0.20	0.15	1	単純	破損、赤化、重さ 1969 g	7号ブロックと重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 19	0.30	0.20	1	単純	完形、赤化、重さ 5115 g	8号ブロックと重複、礫群 52と重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 20	0.25	0.15	2	不明	完形:0、破損:2、赤化:2、重さ:g: 計 2528 g (1926 g, 622 g)		
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 21	0.20	0.15	1	単純	完形、赤化、重さ 1322 g	8号ブロックと重複、礫群 54と重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 22	0.15	0.10	1	単純	完形、赤化、重さ 1373 g	8号ブロックと重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 23	0.15	0.10	1	単純	破損、赤化、重さ 956 g	8号ブロックと重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 24	0.20	0.10	1	単純	完形、赤化、重さ 2401 g	12号ブロックと重複、礫 群 61と重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 25	0.10	0.10	1	単純	破損、赤化、重さ 1028 g	12号ブロックと重複、礫 群 61と重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 26	0.65	0.35	5	複数 単純	完形:5、破損:0、赤化:0、重さ:g: 計 5940 g (1616 g, 1044 g, 996 g, 1135 g, 1151 g)	8号ブロックと重複、磨 石:2	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 27	0.25	0.15	1	単純	破損、赤化、重さ 2202 g	9号ブロックと重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 28	0.25	0.10	1	単純	破損、赤化、重さ 2059 g	9号ブロックと重複、礫群 75と重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 29	0.20	0.15	1	単純	完形、赤化、重さ 1993 g	11号ブロックと重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 30	0.20	0.10	1	単純	破損、赤化、重さ 1159 g	11号ブロックと重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 31	0.15	0.10	1	単純	完形、赤化、重さ 1077 g	11号ブロックと重複、磨 石 77に近接	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 32	0.40	0.30	3	複数 単純	完形:3、破損:0、赤化:0、重さ:g: 計 2380 g (736 g, 950 g, 694 g)	11号ブロックと重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 33	0.20	0.15	1	単純	破損、赤化、重さ 1064 g	11号ブロックと重複、磨 石 81と重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 34	0.40	0.25	3	複数 単純	完形:3、赤化なし、重さ:g:計 3613 g (1349 g, 1014 g, 1250 g)	11号ブロックと重複、磨 石 3と重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 35	0.20	0.15	1	単純	完形、赤化、重さ 3500 g	13号ブロックと重複、磨 石 98に近接	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 36	0.10	0.10	1	単純	完形、赤化、重さ 1584 g	14号ブロックと重複、磨 石 99と重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 37	0.20	0.10	1	単純	完形、赤化なし、重さ 1338 g	14号ブロックと重複、磨 石 101に近接	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 38	0.10	0.10	1	単純	完形、赤化なし、重さ 1395 g	14号ブロックと重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 39	0.15	1.00	1	単純	完形、赤化なし、重さ 966 g	14号ブロックと重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 40	0.20	0.15	1	単純	破損、赤化なし、重さ 1019 g	14号ブロックと重複	
74	船ヶ谷長ツサ	B2Lm	IX	配石 41	0.20	0.10	1	単純	完形、赤化なし、重さ 1369 g	14号ブロックと重複、磨 石 103に近接	

遺跡 No	遺跡名	確認層位	文化層	遺物名	長幅 (m)	幅幅 (m)	面積 (m ²)	分類	磨の状態		石材組成	番号 (共伴遺物等)
									合計	単数		
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	K	配石 42	0.50	0.20	3	集中	完形: 2、破損: 1、赤化: 3、重さ:g: 計 7227 g (1564 g: 5245 g: 968 g)			20号ブロックと直板、 群 104と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	K	配石 43	0.30	0.20	1	集中	完形、赤化、重さ14200 g			20号ブロックと直板、 群 105と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	K	配石 44	0.40	0.15	2	集中	完形: 2、破損: 0、赤化: 2、重さ:g: 計 5610 g (1602 g: 4008 g)			20号ブロックと直板、 群 107と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	K	配石 45	0.15	0.15	2	集中	完形: 1、破損: 1、赤化: 2、重さ:g: 計 1685 g (1650 g: 35 g)			20号ブロックと直板、 群 107と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	K	配石 46	0.40	0.20	2	集中	不明(データなし)			21号ブロックと直板、 群 109と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	K	配石 47	0.20	0.10	2	直板	破損: 2、赤化: 2、重さ:g:計 3010 g (2664 g: 346 g)			21号ブロックと直板、 群 110と直板、発合して1 個体
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	K	配石 48	0.10	0.10	1	单数	完形、赤化、重さ1001 g			22号ブロックと直板、 群 113と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	K	配石 49	0.20	0.20	2	集中	完形: 1、破損: 1、赤化: 2、重さ:g: 計 2235 g (1602 g: 1663 g)			23号ブロックと直板、 群 115と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	K	配石 50	0.30	0.10	2	集中	完形: 1、破損: 1、赤化: 2、重さ:g: 計 2157 g (1255 g: 904 g)			23号ブロックと直板、 群 118と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	K	配石 51	0.10	0.10	1	单数	完形、赤化、重さ912 g			23号ブロックと直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	K	配石 52	0.15	0.10	1	单数	完形、赤化、重さ969 g			23号ブロックと直板、 群 120と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	K	配石 53	0.10	1.00	1	单数	破損、赤化、重さ900 g			23号ブロックと直板、 群 121と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	K	配石 54	0.15	0.10	1	单数	完形、赤化、重さ1159 g			23号ブロックと直板、 群 122と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	K	配石 55	0.20	0.10	1	单数	破損、赤化、重さ1018 g			23号ブロックと直板、 群 123と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	K	配石 56	0.20	0.15	1	单数	破損、赤化、重さ1978 g			23号ブロックと直板、 群 124と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	K	配石 57	0.15	0.10	2	直板	完形: 0、破損: 2、赤化: 2、重さ:g: 計 1245 g (1222 g: 21 g)			23号ブロックと直板、 群 125と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	K	配石 58	0.80	0.40	1	单数	破損、赤化、重さ2631 g			22号ブロックと直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	K	配石 59	0.30	0.15	1	单数	完形、赤化、重さ5110 g			22号ブロックと直板、 群 126と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Lm	K	配石 60	0.15	0.10	1	单数	破損、赤化、重さ981 g			10号ブロックと直板、 群 127と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Ll	X	配石 1	0.50	0.20	2	分散	完形: 0、破損: 2、赤化: 2、重さ:g: 計 3638 g (2725 g: 905 g)			22号ブロックと直板、 群 128と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Ll	X	配石 2	0.40	0.20	3	分散	完形: 0、破損: 3、赤化、重さ:g:計 2049 g (1038 g: 966 g: 49 g)			22号ブロックと直板、 群 129と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Ll	X	配石 3	0.15	0.15	2	直板	完形: 0、破損: 0、赤化、重さ:g:計 1569 g (634 g: 935 g)			2号ブロックと直板、 群 130と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Ll	X	配石 4	0.15	0.10	1	单数	破損、赤化、重さ1349 g			隣群4と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Ll	X	配石 5	0.20	0.10	1	单数	完形、赤化、重さ938 g			
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Ll	X	配石 6	0.20	0.10	1	单数	破損、赤化、重さ1126 g			2号ブロックと直板、 群 132と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Ll	X	配石 7	0.45	0.20	2	面積	完形: 0、破損: 2、赤化、重さ:g:計 10324 g (1634 g: 8700 g)			2号ブロックと直板、 群 133と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Ll	X	配石 8	0.25	0.15	1	单数	破損、赤化、重さ3893 g			2号ブロックと直板、 群 134と直板
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Ll	X	配石 9	0.40	0.20	2	分散	完形: 1、破損: 1、赤化: 2、重さ:g: 計 2243 g (1163 g: 1080 g)			
74	柏ヶ谷長ツサ	B2Ll	X	配石 10	0.30	0.20	1	单数	破損、赤化、重さ3797 g			1×2 m の範囲に7点 拾拾時 1期の例?

第7表 磨石状遺集積(補遺)

遺跡No	遺跡名	確認層位	文化層	遺物名	長幅 (m)	幅幅 (m)	面積 (m ²)	面積 (結合面積)	分布	磨の状態	磨削石材組成	番号 (共伴遺物等)
55	楠木	B2U	IV		2.20	1.50	9		密集		玄武岩	南に5 m 程離れて1点出土
309	上土櫛巻山	B2L上東底下	III	第一号ブロック	2.00	—	7		密集		多孔質安山岩	4点集中。特に石器21点
360	高倉沢大谷	B2L1	IV	8号ブロック	7.30	2.00	12		やや密集		多孔質安山岩	1×2 m の範囲に7点 拾拾時 1期の例?

神奈川県における旧石器時代の遺構（その6）

第8表 炭化物集中（補遺）

遺跡No	遺跡名	確認部位	文化層	遺構名	長軸(m)	短軸(m)	備考(実体遺物等)
10	横本	BB2U	V	炭化物片集中帯 No.13	2.50	2.00	規範は1/10000全体面上で計測した精度
10	横本	BB2U	V'	炭化物片集中帯 No.14	3.00	3.00	規範は1/10000全体面上で計測した精度
10	横本	BB2L-L3	V	炭化物片集中帯 No.15	3.00	2.00	規範は1/10000全体面上で計測した精度
10	横本	BB2L-L3	V	炭化物片集中帯 No.16	4.00	2.00	規範は1/10000全体面上で計測した精度
10	横本	BB2L-L3	V	炭化物片集中帯 No.17	2.50	2.50	規範は1/10000全体面上で計測した精度
10	横本	BB2L-L3	V	炭化物片集中帯 No.18	3.50	3.00	規範は1/10000全体面上で計測した精度
10	横本	BB2L-L3	V	炭化物片集中帯 No.19	1.50	1.50	規範は1/10000全体面上で計測した精度
10	横本	BB2L-L3	V	炭化物片集中帯 No.20	1.50	1.50	規範は1/10000全体面上で計測した精度
10	横本	L1H-BB1U	II	炭化物片集中帯 No.21	2.00	(2.00)	規範は1/10000全体面上で計測した精度 一部調査区外
10	横本	BB1-L2	III	炭化物片集中帯 No.24	2.00	1.50	規範は1/10000全体面上で計測した精度
10	横本	BB1-L2	III	炭化物片集中帯 No.25	2.00	2.50	規範は1/10000全体面上で計測した精度
10	横本	BB1-L2	III	炭化物片集中帯 No.26	3.00	2.50	規範は1/10000全体面上で計測した精度 細碎5-7と繰替
10	横本	BB1-L2	III	炭化物片集中帯 No.27	2.00	2.00	規範は1/10000全体面上で計測した精度 細碎7と繰替
10	横本	BB1-L2	III	炭化物片集中帯 No.28	3.50	1.50	規範は1/10000全体面上で計測した精度
10	横本	BB1-L2	III	炭化物片集中帯 No.29	3.00	2.00	規範は1/10000全体面上で計測した精度
10	横本	BB1-L2	III	炭化物片集中帯 No.30	3.00	2.00	規範は1/10000全体面上で計測した精度
10	横本	BB1-L2	III	炭化物片集中帯 No.31	2.50	2.00	規範は1/10000全体面上で計測した精度 プロックと繰替
10	横本	BB1-L2	III	炭化物片集中帯 No.32	2.00	1.50	規範は1/10000全体面上で計測した精度
99	早川天守森	B2Luu	V	II 地区 1-32-33 区 炭化物片集中箇所	2.50	2.00	C 14 ± 22150 ± 1,600 B.P.
99	早川天守森	B2Luu	V	I 地区 C-6-7 区 炭化物片集中箇所	(2.50)	(1.20)	調査が先駆的と先端部で検出されており、多くは調査区外 全体の規模は不明
99	早川天守森	BB3	V	I 地区炭化物片集中箇所	2.50	(1.50)	一部調査区外
99	早川天守森	BB3	V	II 地区炭化物片集中箇所	1.70	1.50	
99	早川天守森	BB3	V	III 地区炭化物片集中箇所	3.50	(1.00)	一部調査区外
99	早川天守森	BB3	V	IV 地区炭化物片集中箇所	2.40	2.00	
99	早川天守森	BB3	V	V 地区炭化物片集中箇所	4.00	4.00	
351	山ノ神	BB3	V	炭化物片集中帯 No.1	3.00	1.50	
351	山ノ神	BB3	V	炭化物片集中帯 No.2	3.20	1.00	
351	山ノ神	BB3	V	炭化物片集中帯 No.3	2.20	1.50	
351	山ノ神	BB3	V	炭化物片集中帯 No.4	1.20	1.00	
351	山ノ神	BB3	V	炭化物片集中帯 No.5	1.00	0.80	
351	山ノ神	BB3	V	炭化物片集中帯 No.6	2.00	0.60	
351	山ノ神	BB3	V	炭化物片集中帯 No.7	1.20	1.00	
351	山ノ神	BB3	V	炭化物片集中帯 No.8	7.00	4.50	3cmを計る炭化物塊

第9表 土 坑（補遺）

遺跡No	遺跡名	確認部位	文化層	遺構名	長軸	短軸	深さ	平面形態	断面形態	備考
348	高原北		A-T下位	P 1号土坑	0.84	0.70	0.40	円形	逆台形	土坑上半部削平のため、確認面と本来の土坑の規模は不明 土坑底部の法量は 32 × 38 cm 夷界遺物は無し
348	高原北		A-T下位	P 2号土坑	0.77	0.75	0.72	円形	U字形	土坑上半部削平のため、確認面と本来の土坑の規模は不明 土坑底部の法量は 48 × 54 cm 夷界遺物は無し
349	一本松 北A-C-D地区		A-T下位	P 1号土坑	0.82	-	0.48	円形?	逆台形	土坑北東部試掘時取り扱い 上半部削平のため、確認面と本来の土坑の規模は不明 土坑底部の法量は 52 × 49 cm 夷界遺物は無し P 2号土坑と同一面確認
349	一本松 北A-C-D地区		A-T下位	P 2号土坑	1.04	1.00	0.77	不整円形	不整台形	土坑上半部削平のため、確認面と本来の土坑の規模は不明 土坑底部の法量は 33 × 40 cm 夷界遺物は無し P 1号土坑と同一面確認
349	一本松 南A-B地区		A-T下位	P 3号土坑	1.08	0.92	0.56	不整円形	不整な円錐状	土坑上半部削平のため、確認面と本来の土坑の規模は不明 土坑底部の法量は 84 × 76 cm 夷界遺物は無し 夷界遺物は無し
347	打木原 第1地点A区	Va-L带 (BB3M)		土坑 S K 09	1.50	1.48	1.71	円形	逆台形	放射性炭素年代測定:昭和年代 27120 ± 180 B.P. 平成 12 年度調査の土坑 S K 09 と同一位置 調査記録によると西北半分の調査

第10表 デボ (補遺)

遺跡No	遺跡名	確認部位	文化層	遺構名	長軸(m)	短軸(m)	遺物数	分布	遺物の様相	石材組成	備考
216	下高尾島	BB1L	Ⅲ 9号ユ ニット	1.70	1.40	16	16	石片 石核	石片 14 件とスクリーパー、 石核 1 件 剥片各 1 件が出土。	各種の質岩が主体。他に チャート、經營砂岩	石核 2 件は複合、遺跡内でこれらの石核から 剥片生産はほとんど行われていない。

第11表 住居状遺構等(補遺)

遺跡 No	遺跡名	確認 程度	文化層	遺構名	長幅	短幅	深さ	地址	柱穴	柱穴数	柱穴規格	備考
332	田名原遺跡 向原No4地点	B.1 ?	-	住居状遺構	10.50	9.80	-	2	有	12	柱穴P 2・9は、断面複雑の他基、右 や斜面的な特徴。他の柱穴は半調査。	P 4:幅45~50cm、深5.56cm P 10:幅56cm、深5.35~45cm

引用・参考文献

- 麻生順司ほか 2006 「打木原遺跡・長井高原遺跡 発掘調査報告書」 玉川文化財研究所
- 麻生順司 2006 「菖蒲沢大谷遺跡発掘調査報告書」 北部第二(三地区)土地区画整理事業区域内埋蔵文化財発掘調査団
- 矢島龍雄ほか 2002 「続櫻市史」 5 櫻市
- 稻田孝司 1988 「旧石器集団の行動軌跡」「古代史復元Ⅰ 旧石器人の生活と集団」 113-136 講談社
- 稻田孝司 2003 「日本における旧石器時代住居遺構の批判的検討」「考古学研究」第50巻第3号 85-101 考古学研究会
- 大坪宣雄ほか 2003 「神奈川県横須賀市佐島の丘遺跡群発掘調査報告書」 佐島の丘遺跡群発掘調査団
- 加藤裕夫・安達尊伸 1996 「藤沢市No220遺跡B 4層出土の石器について」「考古論叢神奈河」 5
- 加藤勝仁 1996 「櫻石證」「石器文化研究」 5 石器文化研究会
- 加藤勝仁 2005 「田名原ノ内遺跡」かながわ考古学財团調査報告191
- 旧石器時代研究プロジェクトチーム 2002~2006 「神奈川県における旧石器時代の遺構(その1~6)」「研究紀要7~12かながわの考古学」 財団法人かながわ考古学財団
- 川島雅人ほか 2004 「武藏国分寺跡開闢遺跡(武藏台西地区)」 東京都埋蔵文化財センター
- 柴原伸好 2004 「田名向原遺跡における住居状遺構の上層構造の復元」「田名向原遺跡」 II 123-134 相模原市教育委員会
- 相模原市教育委員会・田名向原遺跡研究会 2004 「田名向原遺跡」 II 相模原市教育委員会
- 鈴木準也 1994 「配石遺構」「南政治山遺跡発掘調査報告書」 第1巻 機文時代草創期 藤沢市教育委員会
- 柴田 健 2004 「田名向原Iで出土した石材について」「田名向原遺跡II」 221-229 相模原市教育委員会
- 鈴木次郎 1996 「第4節 先土器時代 第Ⅲ文化層」「宮ヶ瀬遺跡群VI サザランケ(No12)遺跡」かながわ考古学財団 調査報告8
- 鈴木次郎 2006 「ピュルム氷期最寒冷期における石器群の変容—相模原第Ⅲ期石器群の評価—」「考古論叢 神奈河」 第14集 1-29頁 神奈川県考古学会
- 鈴木敏中 1992 「旧石器時代の土坑・箱根山石窯の遺跡からー」「考古学ジャーナル」 No351 p.p.14-18
- 鈴木敏中ほか 1999 「初音ヶ原遺跡」 三島市教育委員会
- 須田英一 1996 「櫻群から出土する玄武岩質安山岩窯の性格について—慶應SFC遺跡・南葛野遺跡の資料分析を通して—」「民族考古」 3 慶應大学文学部民族学考古学研究室「民族考古」編集委員会
- 須田英一 2002 「先土器時代の磨石集積遺構に関する研究の現状—キャッシュ・遺構・移動—」「民族考古 6」 慶應大学文学部民族学考古学研究室「民族考古」編集委員会
- 芦川忠利 2002 「初音ヶ原B遺跡 第4地盤」 三島市教育委員会
- 竹内直文・鈴木忠史他 1996 「勾束中遺跡発掘調査報告書」 菊田市教育委員会
- 田名塙遺跡群発掘調査団 2003 「田名向原遺跡」 I 相模原市教育委員会
- 堤 隆 1997a 「9 第Ⅲ文化層」「柏ヶ谷長ツサ遺跡」 柏ヶ谷長ツサ遺跡調査団
- 堤 隆 1997b 「柏ヶ谷長ツサ遺跡 第Ⅲ・第Ⅳ文化層の蔽石・磨石類」「柏ヶ谷長ツサ遺跡」 柏ヶ谷長ツサ遺跡調査団
- 堤 隆 2000 「搔器の機能と寒冷適応としての皮革利用システム」「考古学研究」 47-2 考古学研究会
- 島中俊明 2005 「神奈川県における旧石器時代の遺構(その4) -B 2層-」「かながわの考古学 研究紀要」 9 財団法人 かながわ考古学財団
- 保坂康夫 1980 「櫻群および配石」「寺谷遺跡発掘調査報告書」
- 保坂康夫 1997 「柏ヶ谷長ツサ遺跡における櫻群と配石について」「柏ヶ谷長ツサ遺跡」 柏ヶ谷長ツサ遺跡調査団
- 山田仁和 2006 「三浦市 がんだ畠遺跡—旧石器時代の土坑と縄文時代後期集落の調査—」「第30回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨」 神奈川県考古学会
- 吉田政行 2003 「第V章第4節第6項旧石器時代遺物群V」「吉岡遺跡群X」 かながわ考古学財団調査報告153
- 吉田政行 2004 「神奈川県における旧石器時代の遺構(その3) -B 1層下部~L 2層-」「かながわの考古学研究紀要」 9 財団法人 かながわ考古学財団
- *以前の研究紀要で集成された発掘調査報告書は省略した。

神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅷ

－後期初頭期 称名寺式土器文化期の様相 その2 土器編年試案－ 縄文時代研究プロジェクトチーム

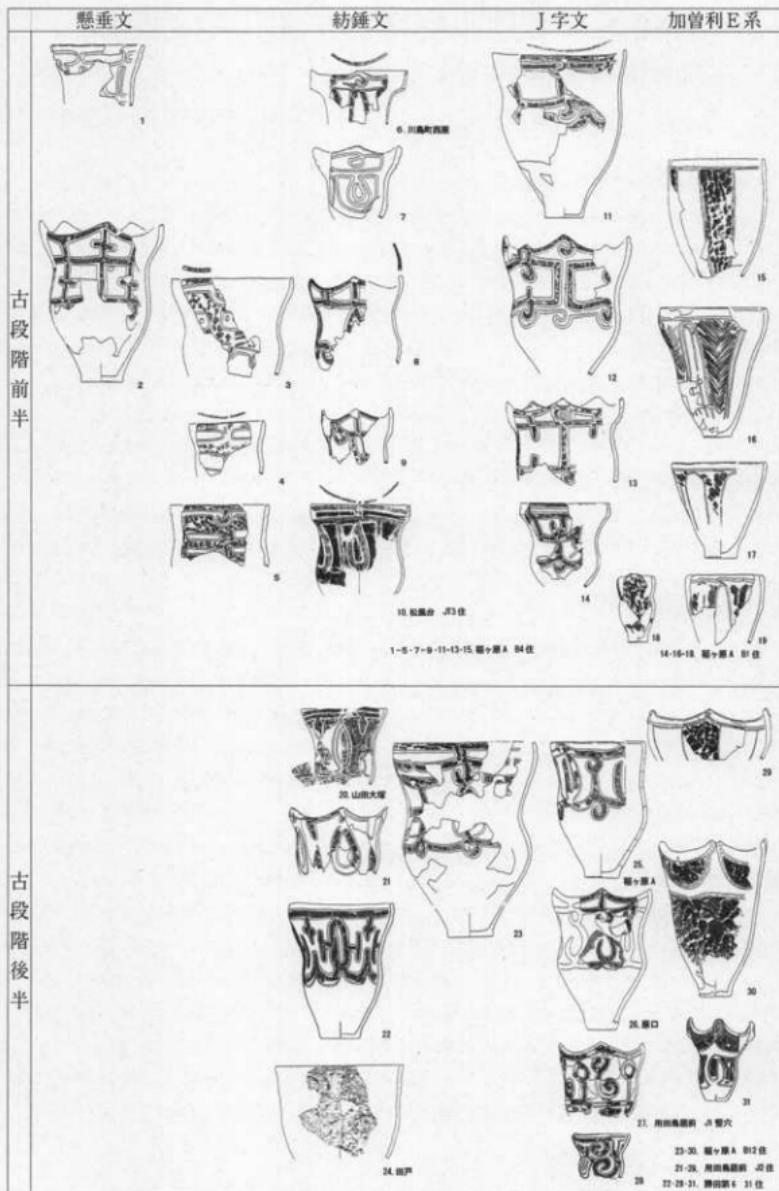
I. はじめに

今回の検討は、平成17年度から開始した後期初頭期・称名寺式土器文化期の様相をめぐる研究の2年次目にあたる。前回は報告書などの文献から当該遺跡に関する情報を抽出し、170を越える遺跡のデータベースの作成後、「主要遺跡の集成及び重複・一括出土事例」の検討を実施した。今回はその情報に基づき主要な遺跡から選択した土器の比較・検討を行い「土器編年試案」を提示するに至った。しかし今回取り扱う後期初頭称名寺式土器は、他の土器型式に比して時間幅が短い傾向が想定され、それを反映しているためか調査事例は増加する傾向にあるが、該期の遺構や遺物出土の好例に恵まれない現状がある。また対象とした資料は神奈川県内の出土資料のみと限定したことから在地土器と異系統土器との関係など地域的な傾向を捉えにくい側面もあり注意を要する。これら条件的な制約の中で、先学の研究成果の蓄積を踏まえた上で可能な限り時間軸確立の可能性とその課題を見いだすことを前提に今回の分析を進めてきた。将来的には新たな出土資料の蓄積により研究成果がさらに進展する可能性も含まれるものである。今後はこの編年試案に基づき、堅穴住居址・住居以外の遺構・集落構造・遺跡分布及び土器以外の遺物に関する研究を実施していく計画である。

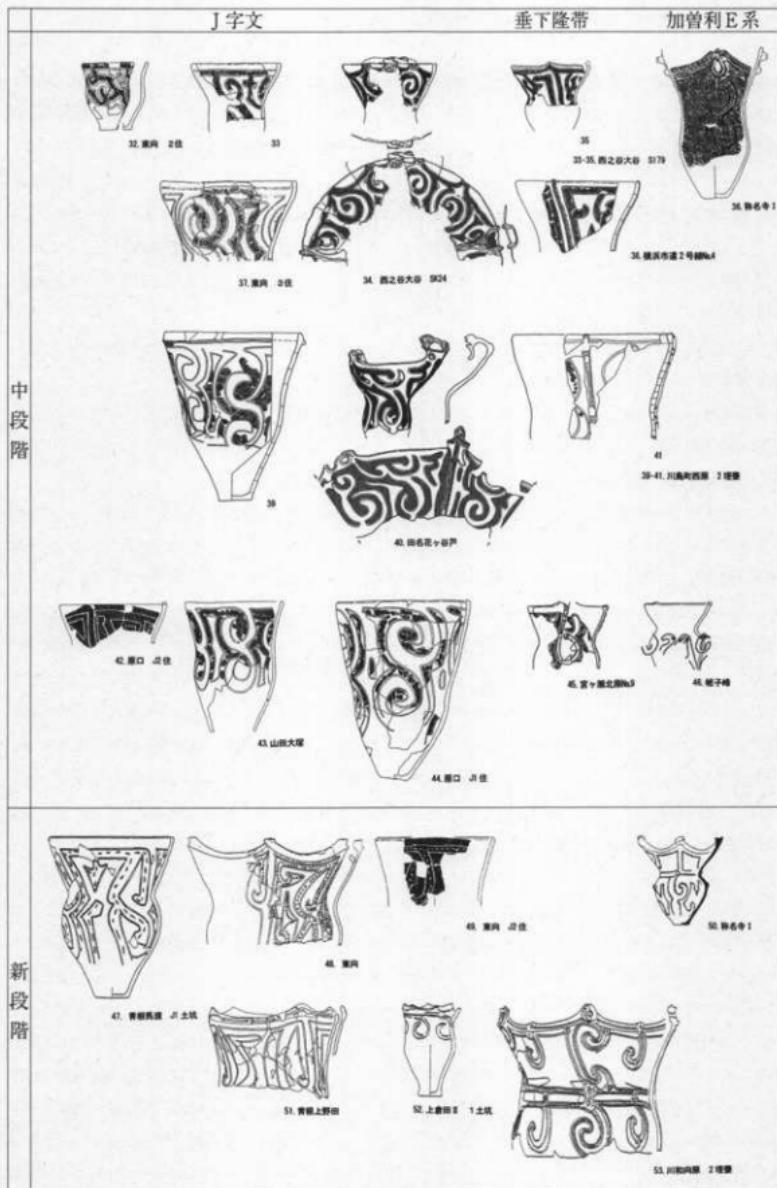
II. 研究略史

近年までの研究を簡単に振り返りたい。称名寺式土器は、吉田格氏により1951年に発掘調査された横浜市金沢区所在の称名寺貝塚出土土器を標式とする資料である。1957年には第二次調査を実施しその内容を補完し、1960年に発掘調査報告（吉田 1960）を刊行しその成果をまとめている。報文では、称名寺A貝塚の「第一群」とした加曾利E式から後続するものと、称名寺B貝塚の「第二群」とした堀之内式へ続くものを称名寺式土器として型式提唱された。その後1970年代中葉以降、出土資料の増加と前後の型式とくに中期後業加曾利E式土器の編年確立などにより後期初頭土器に関する研究（下村1973・1974、青木1977）など多くの論文が相次いで発表され、「称名寺式土器の研究」（今村1977）に代表されるよう型式としての位置づけが確立しその研究が大きく進展した。1985年には港北ニュータウン埋蔵文化財調査団により、「称名寺式土器に関する交流研究会」が開催されたことも画期であり、その成果はその後の研究の進展に大きな弾みを与えるものとなっている。内容は「称名寺式土器に関する交流研究会の記録」（石井ほか1990）として詳細に刊行されている。1992年には「称名寺式土器の分類と変遷」（石井1992）が発表された。その論文は、称名寺式土器を3大別し、7細別の段階区分案を詳細に提示するもので、その出現・中津式土器群と在地土器群の融合・独自型式としての安定・前後型式との関係など多岐にわたる課題を体系的に整理するものであった。今回の編年試案作成にあたり大いに参考にした。1990年代では称名寺式土器と中津式土器の文様要素の詳細な検討から表現形態の差異を見いだす研究（鈴木1995）など、前後の型式または地域間での比較・検討などの研究が行われている。

(天野賢一)



第1図 神奈川県における称名寺式土器編年案 古段階 (S=1/15)



第2図 神奈川県における称名寺式土器編年表 中・新段階 (S=1/15)

III. 神奈川における称名寺式土器編年案

古段階（第1・3図）

古段階は、西日本との相互影響のもと磨消繩文による帶繩文土器が成立する段階である。文様は、窓枠状区画を主とする口縁部文様帯と方形区画を基調とした胴部文様帯からなる。胴部の主文様として懸垂文や紡錘文、小型のJ字文があり、これらが太く深い特徴的なスリットで区画された帶繩文により描き出される。繩文は中期末に比べ細かく、器面調整も前段に認められた研磨単位の明瞭な光沢をもつ磨きではなく、研磨痕跡が不明瞭で鈍い光沢をもつものが多い。これらの特徴は西日本の中期末土器（北白川C式もしくは平式）にその形が求められ併行する中津式の成立と連動している（今村1997、石井1992、鈴木1993など）。これらの文様構成からなる土器に波状口縁および平縁深鉢があり、加えて、細かな繩文を縦位に施した粗製深鉢、中期末の土器の伝統を引き継ぐ加曾利E系土器が共存する。

*古段階の第1・3図は横に主文様の類型・系列を配したが、前後半の区分以外、資料の上下は変遷を示すものではない。

古段階前半（第1図1～19・第3図1～18）

古段階前半は関西地方に分布の中心をもつ中津式の影響を強く受け、称名寺式が成立する段階である。本段階の代表的資料として稻ヶ原A地点B-1号住居址、B-4号住居址、松風台遺跡JT-3号住居址、下鶴間長堀遺跡1号住居址などがある。

口縁部文様帯に窓枠状区画を有するものが主体であり、西日本中期末（北白川C式もしくは平式）の影響が確認できる。第1図6の川島町西原遺跡遺構外出土例、10の松風台遺跡JT-3号住居址、13・14の稻ヶ原遺跡A地点B-1号住居址などでは口縁部文様帯直下の屈曲が強く、関西地方中期末葉の影響をより色濃く残す。同様の系譜は、口唇部に施される刻みにも看取される（第1図3・4・6・8・10・11など）。波頂部を中心に懸垂文をもつもの（第1図1・2・4・8～10・14など）、小さなJ字文をもつもの（第1図3・5～7・11・12など）、円文をもつもの（第1図13など）がある（波頂部は4もしくは5単位）。窓枠状区画からなる口縁部文様帯のはかに、口縁部直下に一段の帯状文をもつもの（第3図10）、口縁部直下が無文帯となりその下に一段の帯繩文をもつもの（第3図7・8）がある。前者は先の窓枠状区画と同様、西日本にその系譜が求められるが、口縁部直下の無文帯は在地の加曾利E系土器から取り入れられたものであろう（今村前掲、鈴木前掲）。この口縁部直下の無文帯はこののち古段階後半以降主体化していくものであり、すでに古段階前半で加曾利E系土器との融合が認められることに本段階を設定した意味がある。

胴部文様帯は上下端を区画する帯繩文とこれを縦位に連結する懸垂文や紡錘文、J字文からなる方形区画を基調とする。主文様としての懸垂文、紡錘文および比較的小さなJ字文が、波状口縁土器の波頂部および波底部に配される。これらの主文様に古段階後半に盛んとなる横位の突出は未だ顕著ではない。本段階はこれらの主文様から構成され、主文様の間隔が広いため、無文部が多くを占めることとなる。胴部文様帯の下端が胴部の最大径付近にあることも本段階の特徴である。第1図、第3図に帯繩文からなる一群を胴部における主文様別に配した（図の上下は変遷を表さない）。いずれも、口縁部文様帯と胴部文様帯の縦位区画が一致している。胴部文様帯の区画もしくは波頂下に懸垂文を配し、その中间もしくは波底部に懸垂文や紡錘文、J字文を有するもの（第1図1～5・第3図1・2）、同じく紡錘文を主文様に、波底部に懸垂文やJ字文を配するもの（第1図6～10・第3図3～7）、J字文を主文様とし、その間に紡錘文やJ字文を配するもの（第1図11～14・第3図9～13）がある。ただし、口縁部文様帯の波頂部に施された主文様が円文（第1図13・第3図2・3）やJ字文（第1図3・5・6）であるというように、胴部文様帯の主文様と対

応しない場合もある。

一方で、平縁のものに波状口縁には認められない特徴がある。平縁土器において懸垂文を胴部文様帯の主文様とするものは、帯縄文の幅が広く、無文部とほぼ均等（第1図3・4）もしくは無文部が狭くなる（第1図5）。これらは本段階特有のものであり、のちに統くことはない。また、古段階後半に主体的となる横位連結のJ字文がこの段階から認められる（中段連結J字文、石井1992のB群）。第1図14は口縁部文様帯の窓枠状区画直下に段をもつ古手の器形を呈し、胴部文様帯における窓枠状区画直下の主文様を紡錘文とし、その間に縦位に連なるJ字文を配している。この上位J字文の下端で横に帯縄文が配され紡錘文に連結する。類例として第3図12がある。本段階は上位のJ字文が下位のものより大柄に描かれる。

上記の文様構成をもつもののはかに、縦位に施された縄文をもつ粗製土器もある。第3図14、15はそれぞれ稻ヶ原遺跡A地点B-4号住居址、松風台JT-3号住居址から上記中津式の影響を強く受けた土器と共に出土している。14は口縁部に横走する二条の沈線を有し、その直下に縦位に施された縄文を配し、15は口縁部文様帯をもたず縦位の縄文のみをもつ。両者とも口唇部に刻みをもち西日本との関連を伺わせる。14の口縁部文様帯の創出や縄文が細かいことも同様である。後半段階と異なり、縦位に施された縄文はまばらで単位文様化している。また、加曾利E式第IV段階の特徴をそのまま受け継ぐ加曾利E系土器も共存する（第1図15～19・第3図16～18、縄文時代研究プロジェクト2002）。第1図15および第3図17は口縁部直下の無文帯をはさんで横位の断面三角の微隆起線をめぐらす。胴部は垂下隆帯間に幅広の縄文帯を残すもの（第1図15）、逆U字文を有するもの（第1図17・19・第3図16・17）があり、前段の加曾利E式第IV段階との区別は難しい。ただし、第3図16のように口縁部文様帯が有段となり幅広沈線による窓枠状区画をもち、胴部に加曾利E式第IV段階の文様を施す事例は、加曾利E式に中津式の要素を取り入れたものといえる。（阿部友寿）

古段階後半（第1図20～31、第3図19～38）

本段階は、前段階で顕著であった口縁部の窓枠状区画の崩壊と段の喪失が認められる段階である。また、モチーフとしてJ字文が顕著に現れ始めるものこの段階である。前段階から見られる主文様の間隙を懸垂文などの副文様で埋める余白処理の傾向は顕著なものとなる。胴部文様帯の下端区画は、胴部最大径付近にあるが、最下端が胴部最大径付近より下がるものも少數であるが認められる。

第3図19～21は懸垂文が施される一群である。口縁部形態は、波状口縁と平縁が存在する。口縁部には帯縄文が巡るが前段階で顕著であった窓枠状区画の崩壊が認められる。19は波状口縁の波頂部下から懸垂文が胴部文様帯の下端区画まで垂下し、胴部文様帯中央部分からは横位に区画するかたちで帯縄文が巡り、波状口縁の波底部下付近には、渦巻文が施されている。21は口縁部に巡る帯縄文が沈線による連弧文で区画され、一見、窓枠状区画のように見えるが加曾利E系土器の影響によるものと考えられる。

第1図20～22、第3図22～24は紡錘文が施される一群である。第1図21は波状口縁に巡る帯縄文の波頂部からJ字文を意識したかのような小さな帯縄文の突出が認められ、その下には主文様として紡錘文が施される。主文様間に上下から剣先状の懸垂文が副文様として施文される。第3図22は同じく波状口縁に巡る帯縄文の波頂部から小さなJ字文が施されている。その下には第1図21とは逆に懸垂文が主文様として施文され、主文様間に紡錘文が副文様として施文されている。平縁の土器は、主文様である紡錘文間に副文様の剣先状の懸垂文が施されるもの（第1図20）、主文様の紡錘文の中央付近から横位に帯縄文が突出し、主文様間にスピード状の懸垂文が副文様として施文されるもの（第1図22）などがある。

第1図23・24、第3図25・26は紡錘文とJ字文が施される一群である。第1図23は口縁部に2段の帯縄文

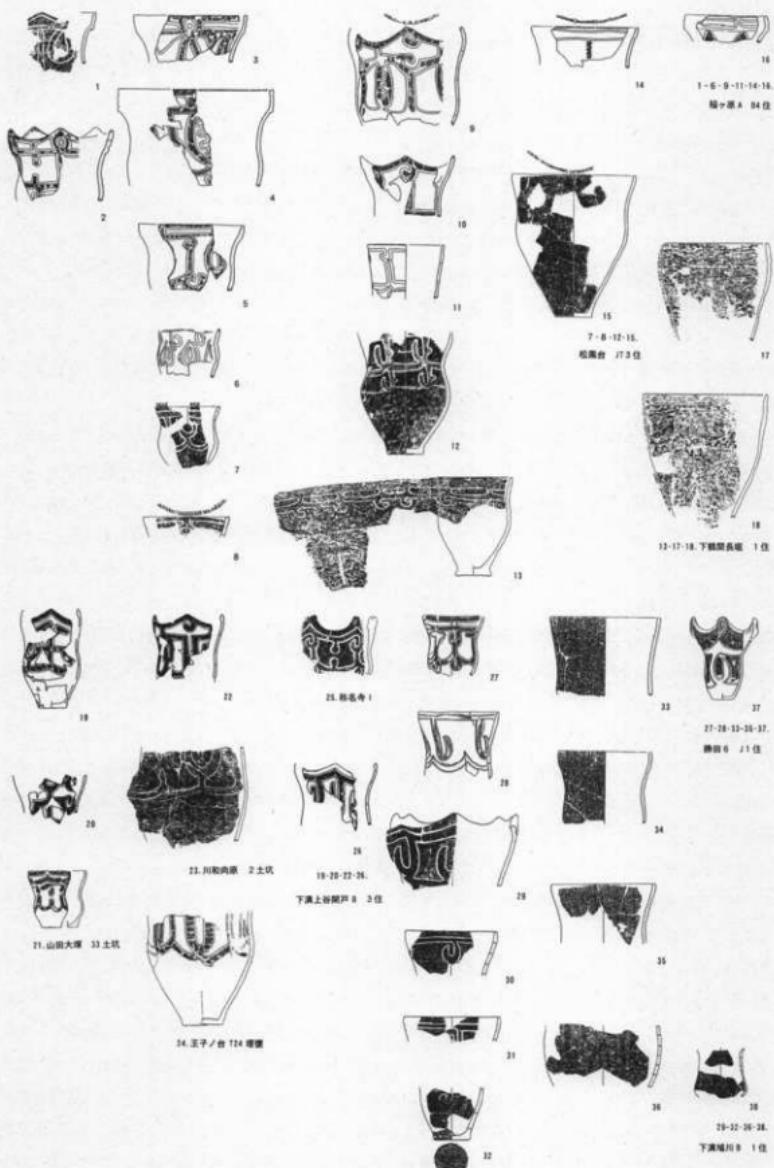
と懸垂文が施され、窓枠状の長方形区画が描出されているが、下段の帯縄文の一部が切れているため窓枠状区画は崩壊している。懸垂文直下には、主文様としてJ字文と紡錘文が施されている。主文様間に2段の長方形区画の帯縄文とこれらを連結する懸垂文が副文様として施文されている。胸部文様帶下端区画の主文様と副文様直下には、小さな紡錘文が施されている。口縁部の懸垂文と副文様、胸部下端区画の帯縄文内には、円形の列点が施されている。第3図25は波状口縁波頂部の帯縄文よりJ字文が施され、その下より懸垂文が胸部文様帶下端区画まで垂下する。波底部には副文様として小さな紡錘文が上下に施される。第3図26も波状口縁波頂部の帯縄文よりJ字文が施される。このJ字文は、紡錘文が施される一群で見られたような報長の紡錘文の上端の一部が途切れることにより変化したJ字文であると考えられる。波底部の副文様にも同様のJ字文が施文されている。

第1図25~28、第3図27~32はJ字文が主文様として施される一群である。第1図25は口縁部に連弧文による無文帯を施し、その直下に帯縄文が巡る。主文様として連弧文中央直下の帯縄文より小さなJ字文が発生し、更に懸垂文が胸部文様帶下端区画まで垂下する。下端区画の主文様直下には小さなJ字文が施文されている。主文様間に、継長の紡錘文から変化と思われる大きなJ字文が副文様として施文されている。第1図26は口縁部に窓枠状区画を有している。波頂部から懸垂文が施され、懸垂文直下には小さなJ字文が施文される。更にその下に大きなJ字文が施文される2段構成のモチーフとなっている。波底部直下にも2段構成のJ字文が副文様として施される。第1図27は口縁部に巡る帯縄文の波頂部からJ字文が施され、さらにJ字文下部より逆方向のJ字文が施されている。波底部直下には副文様として紡錘文とそこから懸垂文が施されている。胸部文様帶の下端区画は維持されているが、最下端が胸部最大径より下に位置している。第1図28は胸部に2段構成のJ字文が施される。上段のJ字は縄文充填されているのに対し下段のJ字は無施文といったネガボジの構成となっている。これら第1図26~28の土器は、中段階の縦位2段構成をとるJ字文をモチーフとしてもつ土器の一群へと繋がる資料であると考えられる(28については、中階段に下る可能性もあるが、同一遺構出土であるためここにおいて)。第3図27は口縁部に2段の帯縄文と懸垂文が施され、窓枠状の長方形区画が描出されているが、下段の帯縄文の一部が切れているため窓枠状区画は崩壊している。口縁部の懸垂文直下には、主文様としてJ字文が描かれ、J字文の下部からは懸垂文が胸部文様帶下端区画まで垂下する。主文様間に下端区画から上部に向けてT字状の懸垂文が施文される。下端区画の主文様・副文様直下には、小さなJ字文が施文されていることにより、胸部文様帶の最下端が胸部最大径より下に位置している。第3図28~31はいずれも口縁部に帯縄文が巡り、そこから派生したJ字文、または逆J字文(28)が施される。J字文は胸部文様帶下端区画に連結するもの(29)連結しないもの(30)などがある。

第3図33~36は粗製の深鉢形土器である。地文に縄文が施されている。

第1図29~31、第3図37~38は加曾利E系土器である。第1図29は沈線を平行に垂下させており、沈線で区画した中を無施文とし、無施文間に縄文を充填した土器である。この平行垂下文類型は、ほとんど形態変化をみせず、称名寺式後半段階まで継続する。第1図30は胸部文様帶2帯化構成をとる土器である。上部のU字文は矩形化し、胸部中央部に無文帯を形成する。第1図31も胸部文様帶2帯化構成をとる土器である。波頂部にU字文の接続点を持ち、胸部中央に無文帯を形成する。胸部無文帯から下部文様帶に無文帯の逆J字文が施される。これら加曾利E系内部で発生した胸部文様帶2帯化構成が、2段構成J字文の称名寺式を成立させる要因になったと考えられる。

(岡 稔)



第3図 称名寺式土器 古段階補足図 (S=1/15)

中段階（第2図32～46、第4図）

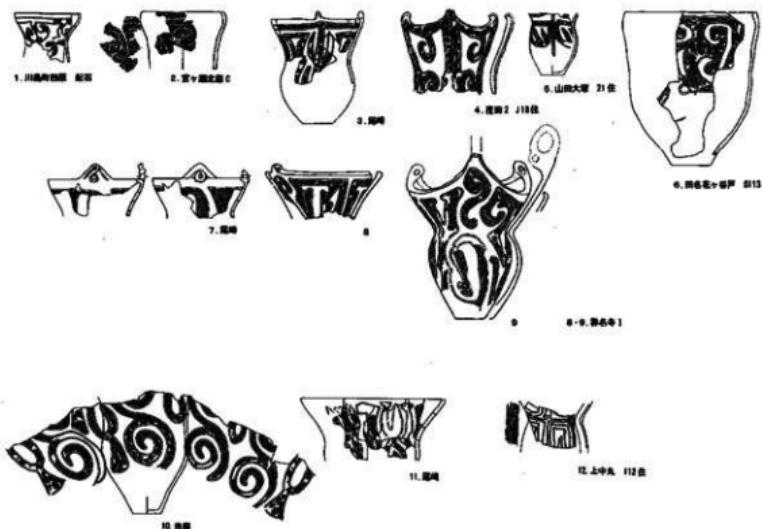
古段階後半において進行した西日本の土器群と在地系土器群との融合は、縦位2段J字文や垂下墻帶等、あらたな要素を有する土器類型の成立を促したとされている。これらの縦位構成をとる土器群が確立し、組成の主体を占める段階を中段階とする。

本段階の県内出土資料は、古段階後半に成立し、以後、称名寺式を通しての基本モチーフとなる縦位2段構成をとるJ字文が施された深鉢を主体とする。縄文・条線のみが施された粗製土器や、横浜市称名寺I貝塚出土資料（第2図36）、相模原市田名花ヶ谷遺跡SI13出土資料（第4図6）のような加曾利E系と呼称される中期末の伝統を受け継ぐ在地色の強い土器群の他、浅鉢や注口土器等も存在するようであるが、県内遺跡ではこれらの良好な伴出事例に恵まれていないため変遷図に多くを反映することはできなかった。

深鉢では平縁のものが主体となるが、波状口縁を呈するもの（第2図36、第4図4・9）や小突起を有するもの（第2図35・45、第4図3・8）の他、田名花ヶ谷遺跡出土資料（第2図40）のように、1・2単位の大形把手が付されるものも存在する。また、本段階の資料では、古段階でみられた口唇部の加飾は認められなくなるようである。

口縁部文様帶は、中井町東向遺跡2号住居址出土資料（第2図32）、同3号住居址出土資料（第2図37）、横浜市西之谷大谷遺跡SI79出土の伴出資料（第2図33・35）、横浜市川島町西原遺跡2号埋甕の伴出資料（第2図39・41）、横浜市荏田第2遺跡J18号住居址出土資料（第4図4）に代表されるように、古段階の特徴のひとつでもあった段・窓枠状区画が衰退し、帯縄文や横位沈線・微隆起線で区画された無文帯に置き換わる。このような動きは古段階において既に散見されるものであり、上記の資料は本段階の中でも古相のものとして捉えられよう（32は沈線が太いなどの特徴からより古い可能性もある）。これに対し、田名花ヶ谷遺跡出土資料（第2図40）、横浜市山田大塚遺跡出土資料（第2図43）、平塚市原口遺跡J1号住居址出土資料（第2図44）、山北町尾崎遺跡出土資料（第4図7）に代表されるように、口唇部直下の帯縄文、あるいは口縁部無文帯の下端区画をなしていた横位沈線・微隆起線をも喪失し、各モチーフの横位への連繋が寸断された資料は本段階の典型とも言えるもので、やや後出の資料として捉えられる。

胸部文様帶に採用されている主文様（モチーフ）は、細い沈線で描出された縦位2段構成のJ字文・渦巻文が主体となり、古段階にみられるようなバラエティーは認められない。古段階後半以降、主文様の間隙を懸垂文等の副文様で埋める余白処理の傾向が強まるが、本段階ではそれに拍車がかかる。西之谷大谷遺跡SI79出土の伴出資料（第2図33・35）、横浜市高速2号線No4遺跡出土資料（第2図38）のように、主文様の間隙に配された懸垂文を横方向に突出させる古段階にみられた手法で余白部分との均衡をはかるものもあるが、西之谷大谷遺跡SK24出土資料（第2図34）、東向遺跡3号住居址出土資料（第2図37）、田名花ヶ谷遺跡出土資料（第2図40）、山田大塚遺跡出土資料（第2図43）、相模原市当麻遺跡出土資料（第4図10）のように、多くは主モチーフとその間隙の形状に合わせた懸垂文を一定幅で描出することによって施文部（帶縄文部）と余白部の比率を拮抗させている。また、先述した各モチーフの横位への連繋が寸断された資料（第2図40・43・44、第4図9等）では、古相とした資料の余白に相当する部分に縄文充填が行われる施文の反転現象が認められるが、このような現象は在地系土器群の影響を受けて生成されたものとして理解されている。第2図34・35・38・40・41・45、第4図4・5・8のように、主に墻帶によって縦位区画を施す垂下墻帶類型（石井1992）と呼ばれる資料は、本段階を中心に組成する特徴的な類型である。荏田第2遺跡J18号住居址出土資料（第4図4）は最古相の資料として理解されているものであり、その成立についても在



第4図 称名寺式土器 中段階補足図 (S=1/15)

地系土器群との関わりの中で説明されている。

本段階においては、古段階後半からみられる胴部文様帶（施文範囲）の縱位拡張傾向がさらに進行し、文様帶の下端部が胴部最大径のかなり下方まで下りてくる。これによって重量するJ字文の大きさの均等化がはかられ、モチーフ全体（2段J字文）の大柄化が顕著となる。第2図32・36・39のように、モチーフを横位に連繋する胴部文様帶の下端区画が維持されたものは、古段階以来の伝統を保持した古相の資料として認識されるが、本段階の主体を占めるのは、第2図40・43・44、第4図9・10のように区画を喪失したものである。下端区画を喪失した資料の中には、原口遺跡J1号住居址出土資料（第2図44）のように、下段モチーフ自体の下端部も開放しているものが存在する。このような文様帶・モチーフの下端開放の傾向は、新段階へ繋がる顕著な動きとして捉えられるもののひとつである。文様帶・モチーフの下端開放傾向とともに、中段階から新段階へと引き継がれていく傾向として、2段J字文の整然とした縱位構成やモチーフ自体の崩れという点を指摘することができる。田名花ヶ谷遺跡出土資料（第2図40）のようにモチーフが斜方向に流れたものや、横浜市帷子峯遺跡出土資料（第2図46）、称名寺I貝塚出土資料（第4図8）、相模原市上中丸遺跡II2号住居址出土資料（第4図12）のように胴部文様帶が2帯構成をとるもののがそれである。また、量的には多くはないが、原口遺跡J2号住居址出土資料（第2図42）、称名寺I貝塚出土資料（第4図8）のように、新段階では安定的なモチーフとなる縱位・斜位の直線を基調とした鉤状のJ字文やR字状文が配された資料が散見されるようになる。

（井辺一徳）

新段階（第2図47～53、第5図）

主に列点や沈線文で文様を構成する段階を新段階とする。

文様の描出は、前段階までの沈線と充填縄文から、沈線と列点充填、または沈線のみに変わる（注）。文様は前段階の2段J字文の流れを基本的に汲むと思われるものが大多数であるが、J字文に直線的な辺が採用され、下段J字文の下端が途切れたものが圧倒的主体をなすようになる。時間的に前半・後半に大きく分けることができる。

新段階前半は2条の平行する沈線で文様を描き、沈線間の列点充填が盛行する。口唇部は直立するもの（第2図47）と、くの字状に内折するもの（第2図48）がある。口縁には平縁（第2図47）と波状縁（第2図48）があり、波状口縁の波頂部の頂上に突起がつくことが多い。器形は胴部中位で強めにくびれる深鉢（第2図47・48）が一般的で、くびれ部がちょうど2段J字文の中間点に相当しているものが多い。文様はJ字文が直線的な辺で構成され、2段J字文が全体で菱形状をなすものもしばしば見られる。J字文同士の間には、J字文に平行するように列点を充填した平行する沈線を配したり、銛先状文を垂下させたりし、それぞれの文様は上端が直線で連結されている。銛先状文の逆刺部両脇や下端J字文の先端の無文部分を中心とし、所謂R字状文が生成するが（第2図47）、2段J字文の下端は途切れ、開放する傾向があるため、R字状文が独立した文様として分離するもの（第2図47）もある。また新段階の前半か後半か明確に位置づけができるないが、J字文が1段のもの（第2図49）がある。第2図49は口縁下には列点を入れた沈線文を横位に巡らし、その下端沈線から分岐した沈線で1段のJ字文を描いているが、J字文の先端には本段階特有の鉤状の文様が描かれている。また胴部中位が強くくびれ、胴部下位が膨らむ器形をなし、くびれ部を境に上下で文様を異にするものもある（第2図50）。この段階純粋の一括出土事例はないが、原口遺跡J1号敷石住居址出土土器中の列点文土器群（第5図8～11）は以下に述べる後半段階の土器を含まないため、時間的に後半のものと画することができると思われる。充填縄文がどの程度残存するかはよくわからない。

新段階後半は文様描出沈線が3条程度になるものが出現在する段階である。また口唇部が内折するものでは口唇部に穴と沈線を巡らしたもののが現れる（第2図51）。この口唇部沈線は次の堀之内1式土器に引き継がれるが、本段階では沈線が途中で途切れ、口縁部を全周しないものがほとんどであることが異なっている。2段J字文をもつものでは主文様であるJ字文と主文様間の文様が平行しながら接近して描かれ、かつ列点文をもつもの少ないとから、3条の沈線で文様を描くようなもの（第2図51）が現れたり、2条の描出沈線間隔の幅広化傾向が見られる土器がある。2段J字文構成の崩壊もかなり進む。3条沈線文の登場で、口縁部下やや下がった所に横位1条の沈線が巡り、J字文の上端横位沈線と平行するもの（第5図35・36）が現れる。またJ字文が1段のものも出現する（第5図36）。このJ字文が崩れたものが単位文として横位に連続的に配されたり、沈線文間隔が更に広くなったり（第5図35）、口縁下の横位沈線が2重化したりして次期の西關東の堀之内1式土器に変容していくと考えられる。1段J字文が間隔をあけて懸垂した土器も口縁下の横位沈線がやや下がったものなどは本段階に位置づけられるかもしれない（第2図52）。またこの他隆線による文様を描いたものもある。第2図53は隆線と沈線で文様を描くものであるが、沈線文に3条沈線が存在するため、ここに置いた。隆線文では隆線文様の先端や分岐基点に円形の貼付文を付けたものがある。本段階を代表するものとしては青根馬渡遺跡J1号住居址出土資料（第5図20・21）、同J2号住居址（第5図22～24）、青根上野田遺跡出土資料（第5図29～38）などがある。

（松田光太郎）

*注 前段階には充填縄文内に刺突を施したものがあり、列点充填の発生に何らかの関与をしたと思われる。



第5図 称名寺式土器 新段階補足図 (S=1/15)

参考文献

- 青木秀雄 1977 「称名寺式土器の再検討」『埼玉考古』第16号 埼玉考古学会
- 石井 寛 1990 「称名寺式土器に関する研究史」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 石井 寛 1992 「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究集録』第9冊 (財)横浜市ふるさと歴史財団
- 泉 拓良 1990 「関西地方の中期最終末土器群」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 福村晃嗣 1990 「加曾利E系列の土器群」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 今井康博 1990 「勝田第6遺跡の1号住居並出土遺物」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 今村啓爾 1977 「称名寺式土器の研究(上)」『考古学雑誌』第63巻第1号 日本考古学会
- 今村啓爾 1977 「称名寺式土器の研究(下)」『考古学雑誌』第63巻第2号 日本考古学会
- 柿沼修平 1973 「いわゆる“称名寺土器”に関する二、三の疑義」『史館』1 市川ジャーナル
- 柿沼修平 1981 「称名寺式土器」『縄文文化の研究』4 雄山閣
- 下村克彦 1973 「称名寺式土器の意義二題」『埼玉考古』11 埼玉考古学会
- 下村克彦 1974 「大宮市北袋出土の称名寺式土器」『埼玉考古』12 埼玉考古学会
- 縄文時代研究プロジェクト 2002 「神奈川における縄文時代文化の変遷VI—中期後葉期加曾利E式土器文化期の様相その2 土器編年案—」『研究紀要7かながわの考古学』財団法人かながわ考古学財団
- 鈴木徳雄 1990 「称名寺式土器」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 鈴木徳雄 1991 「称名寺式の変化と文様帶の系統」『土曜考古』第16号 土曜考古学研究会
- 鈴木徳雄 1993 「称名寺式の変化と中津式」『縄文時代』第4号 縄文時代文化研究会
- 鈴木徳雄 1995 「称名寺式の文様施文過程と伝統」『縄文時代』第6号 縄文時代文化研究会
- 鈴木徳雄 1998 「称名寺式の文様変化と論理—称名寺式と堀之内1式の文様構造—」『東海大学校地内遺跡調査団報告』8 東海大学校地内遺跡調査委員会
- 鈴木徳雄 1999 「関東地方 後期(称名寺式)」『縄文時代』第10号〔第1分冊〕 縄文時代文化研究会
- 鈴木徳雄 1999 「称名寺式閏沢類型の後裔—堀之内1式期における小仙塚類型群の形成—」『縄文土器論集—縄文セミナー10周年記念論文集—』縄文セミナーの会
- 谷井 麗 1977 「称名寺式土器の推移について」『埼玉県立博物館紀要』3 埼玉県立博物館
- 玉田芳英 1990 「中津式土器」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 中島庄一 1981 「土器文様の変化—称名寺様式を中心として—」『神奈川考古』第12号 神奈川考古同人会
- 中島庄一 1988 「縄文土器文様の研究—土器文様から見た称名寺様式期の遷延集団の構造—」『東京考古』第3号 東京考古講話会
- 中島庄一 1989 「称名寺式土器様式」『縄文土器大観』4 小学館
- 平林 彰 1990 「中部高地の中期最終末及び後期初頭の土器群」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 柳沢清一 1977 「称名寺式土器論(前編)」『古代』第63号 早稲田大学考古学会
- 柳沢清一 1979 「称名寺式土器論(中編)」『古代』第65号 早稲田大学考古学会
- 柳沢清一 1979 「称名寺式土器論(続編)」『古代』第66号 早稲田大学考古学会
- 柳沢清一 1980 「称名寺式土器論(結編)」『古代』第68号 早稲田大学考古学会
- 山下勝年 1990 「東海地方」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 山下勝年 1990 「補考 東海地方西部地域における縄文中期末から後期初頭の様相」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 吉田 格 1960 「横浜市称名寺貝塚発掘調査報告」「東京都武藏野郷土館調査報告書」第一冊 武藏野文化協会
- 渡辺 寿 1990 「横浜市松風台遺跡出土の称名寺式土器」『調査研究集録』第7冊 横浜市埋蔵文化財センター

相模湾沿岸の「低地」に立地する弥生時代遺跡

弥生時代研究プロジェクトチーム

I. はじめに

今回のテーマは、相模湾沿岸の沖積平野を中心とした「低地」に所在する弥生時代から古墳時代前期の遺跡の動向について、現状を把握・提示することにある。

これまで弥生時代の遺跡は、台地・丘陵上に立地している遺跡の調査が主であったこともあって、低地に所在する遺跡の調査事例は多くはなく、遺跡の分析も台地上の遺跡の事例が主体であった。しかしながら、小田原市、平塚市、茅ヶ崎市、藤沢市、鎌倉市など相模湾沿岸の平野部では市街地が沖積地にあり、いわゆる低地の遺跡調査は以前から行われていて、弥生時代の遺跡に関する成果も蓄積されて来ている。さらに近年道路建設等による大規模調査の進展によって、これまで有無さえも明らかではなかった低地に立地する弥生時代遺跡の内容が知られるようになってきた。

本稿では、神奈川県内の相模湾沿岸の沖積平野に所在する弥生時代から古墳時代前期の遺跡について、時期や遺構の種類について現状での概要を把握しておこうというものである。全ての遺跡を網羅したものではなく、遗漏もあることと思われる。取り上げた遺跡は、発掘調査によって弥生時代中期から古墳時代前期の遺構が調査されている遺跡を対象とした。遺物のみが出土している遺跡や分布調査による遺跡については集めの対象としなかった。但し、現在調査中もしくは整理途上のため未だ確定した内容ではない遺跡であっても、概要を提示できるものは取り上げている。

本稿で取り扱う低地遺跡は、砂州・砂丘、自然堤防、扇状地、沖積地に立地する遺跡である。遺跡の立地に関する表記では、砂州・砂丘は「砂丘」にまとめている。

対象遺跡の資料収集は当財団勤務のプロジェクトメンバーで分担して行い、各種分布図の作成は飯塚美保が担当し、池子遺跡群の遺構分布図は新開基史が担当した。遺跡一覧表と本文は池田 治が担当した。

II. 個別遺跡の概要

集成した遺跡の概要を以下に記す。遺構の概要記載は、対象時期以外の遺構については省略した。遺跡の分布と参考文献については、表1および第1図を参照されたい。

1. 久野下馬道上遺跡

久野川右岸の沖積地に立地している。弥生時代後期の土器集中が発見されている。

2. 成田上耕地遺跡

酒匂川左岸の自然堤防上に立地している。弥生時代後期の方形周溝墓が発見されている。

3. 高田南原遺跡

森戸川右岸の沖積地に立地している。弥生時代後期の溝（流路）があり、壙状の施設の存在が推測される。田下駄、鍍等の木製品が出土している。古墳時代前期の包含層から小型微製鏡（珠文鏡）が出土している。

4. 中里遺跡

酒匂川左岸の自然堤防上に立地している。弥生時代中期中葉の居住域および墓域（方形周溝墓群）が発見

された遺跡である。この遺跡では、弥生時代終末から古墳時代初頭頃の集落跡も発見されている。

5. 矢代遺跡

酒匂川左岸の自然堤防上に立地している。古墳時代前期の水田の杭列畦畔が発見されていて、弥生時代から古墳時代前期の水田跡に関する県内唯一の事例である。弥生時代中期中葉の土器も出土している。

6. 酒匂北中宿遺跡

酒匂川左岸の海岸近くの砂丘上に立地している。古墳時代前期の堅穴住居が発見されている。隣接するNo124遺跡でも古墳時代前期の堅穴住居が発見されている。

7. 小八幡東畠遺跡

森戸川右岸の河口近くの砂丘上に立地している。弥生時代中期の方形周溝墓が発見されている。隣接する小八幡中沢遺跡では古墳時代前期の方形周溝墓、堅穴状造構、土坑、溝が発見されていて、三ツ俣遺跡から関連する遺跡と考えられる。

8. 三ツ俣遺跡

森戸川右岸の自然堤防上に立地している。弥生時代中期の堅穴住居、弥生時代後期から古墳時代前期の堅穴住居、古墳時代前期の方形周溝墓が発見されている。古墳時代前期の居住域は北側に、墓域は南側に分かれている。有頭石錘や環状石錘などがあり、水田稻作のはか、漁撈に関する比重が高い遺跡と考えられる。

9. 沢狭遺跡

金目川左岸の自然堤防上に立地する。弥生時代後期の溝2条と河道路、古墳時代前期の土器集中があり、弥生時代後期後半の土器、木製梯子、石製穀搗具が出土している。弥生時代中期後半の壺が出土している。

10. 横岸B遺跡

花水川右岸の沖積地に立地する。弥生時代後期の堅穴状造構、弥生時代後期から古墳時代前期の旧河道が発見されている。

11. 笹本遺跡

花水川右岸にあり、高麗山北麓の扇状地に立地する。弥生時代後期の堅穴住居が発見されているほか、弥生時代中期後半と古墳時代前期の土器も出土している。

12. 南原B遺跡

渋田川と鈴川の合流点左岸の砂丘上に立地する。弥生時代中期の堅穴住居、溝、土坑、弥生時代後期から古墳時代前期の堅穴住居、方形周溝墓、溝、土坑が発見されている。隣接する南原C遺跡でも古墳時代前期の堅穴住居や溝が発見されていて、一連の遺跡と考えられる。

13. 豊田本郷遺跡

鈴川左岸の自然堤防上に立地している。古墳時代前期の方形周溝墓、溝が発見されている。

14. 山王駒遺跡

渋田川左岸の自然堤防上に立地している。県道建設に伴って発掘調査され、厚木道遺跡他2遺跡とともに「中原上宿遺跡」として報告されている。弥生時代後期から古墳時代前期の堅穴住居や溝が発見されている。

15. 厚木道遺跡

渋田川左岸の自然堤防上に立地している。弥生時代後期から古墳時代前期の堅穴住居、弥生時代後期の溝（環濠か？）が発見されている。

16. 大原遺跡

表1 遺跡一覧表 (Noは遺跡分布に対応、文献Noは文末の参考文献を参照)

No	遺跡名	所在地	河川	立地	出土遺構の時期			文献No
					弥生中期	弥生後期	古墳前期	
1	久野下馬道上遺跡	小田原市久野	久野川右岸	沖積地		○		1
2	成田上耕地遺跡	小田原市成田	酒匂川左岸	自然堤防		○		2
3	高田南原遺跡	小田原市高田	鶴川右岸	沖積地		○		3
4	中里遺跡	小田原市中里	酒匂川左岸	自然堤防	○	○	4~6	
5	矢代遺跡	小田原市前川	酒匂川左岸	自然堤防		○		7
6	酒匂北中宿遺跡	小田原市酒匂	酒匂川左岸	砂丘		○		8
7	小八幡東畠遺跡	小田原市小八幡	森戸川右岸	砂丘		○		9~11
8	三ツ俣遺跡	小田原市国府津	森戸川右岸	自然堤防		○		12~15
9	沢尻遺跡	平塚市南金目	金目川左岸	自然堤防	○	○		16
10	横岸B遺跡	平塚市万田	花木川右岸	沖積地	○	○		17
11	篠本遺跡	平塚市高根	花木川右岸	砂丘地	○	○		18
12	南原B遺跡	平塚市南原	洪田川左岸	砂丘	○	○		19、20
13	豊田本郷遺跡	平塚市豊田本郷	鈴川左岸	自然堤防		○		21
14	山王船遺跡	平塚市中原	浜田川左岸	砂丘		○		22
15	厚木道遺跡	平塚市中原	浜田川左岸	砂丘		○		22
16	大原遺跡	平塚市大原	浜田川左岸	砂丘	○	○		23、24
17	六ノ城遺跡	平塚市西之宮	相模川右岸	砂丘		○		25
18	坪ノ内遺跡	平塚市西之宮	相模川右岸	砂丘	○			26、27
19	真土大塚山古墳	平塚市真土	浜田川左岸	砂丘		○		69、70
20	田村館跡	平塚市田村	相模川右岸	自然堤防	○			28
21	墨染遺跡	平塚市大持	相模川右岸	自然堤防		○		29
22	城跡遺跡	厚木市城跡	相模川右岸	自然堤防		○		30
23	河原口坊中遺跡	海老名市河原口	相模川左岸	自然堤防	○	○		
24	社家字治山古跡	海老名市社家	相模川左岸	自然堤防		○		31~34
25	中野桜野遺跡	海老名市中野	相模川左岸	自然堤防	○	○		35~37
26	金見川端遺跡	寒川町金見	相模川左岸	自然堤防		○		39
27	宮山中里遺跡	寒川町宮山	相模川左岸	自然堤防		○		38~40
28	七堂伽藍跡	茅ヶ崎市下寺尾	小田川左岸	砂丘		○		41~43
29	上ノ町遺跡	茅ヶ崎市西久保	小田川左岸	自然堤防		○		44、45
30	大屋敷B遺跡	茅ヶ崎市西久保	小田川左岸	自然堤防		○		46
31	小井戸遺跡	茅ヶ崎市円蔵	千ノ川右岸	自然堤防		○		47
32	居村A遺跡	茅ヶ崎市本村	千ノ川左岸	砂丘	○			48
33	僧遺跡	茅ヶ崎市小柏田	千ノ川左岸	砂丘	○			49
34	四園A遺跡	茅ヶ崎市赤羽根	千ノ川右岸	砂丘	○			45
35	藤沢市No.211遺跡	藤沢市大庭	引田川右岸	冲積地		○		50
36	若尾山遺跡	藤沢市朝日町	堀川右岸	砂丘	○			51
37	藤沢市No.265遺跡	藤沢市川名	柏原川左岸	砂丘	○	○		52
38	大源太遺跡	藤沢市片瀬	堀川左岸	砂丘		○		53~55
39	長谷小路周辺遺跡	鎌倉市比ヶ浜	滑川右岸	砂丘	○	○		56~58
40	大食事有周辺遺跡群	鎌倉市雪ノ下	滑川右岸	自然堤防	○	○		59~61
41	池子遺跡群	逗子市池子	田端川右岸	冲積地	○	○		62~66
42	寒山町No.2遺跡	寒山町池内		砂丘		○		67

浜田川左岸の砂丘上に立地している。弥生時代中期後半、後期、古墳時代前期の堅穴住居、弥生時代中期後半の溝などが発見されている。

17. 六ノ城遺跡

相模川右岸の砂丘上に立地している。弥生時代後期と古墳時代前期の堅穴住居が発見されている。

18. 坪ノ内遺跡

相模川右岸の砂丘上に立地している。弥生時代中期後半と古墳時代前期の方形周溝墓が発見されている。

19. 真土大塚山古墳

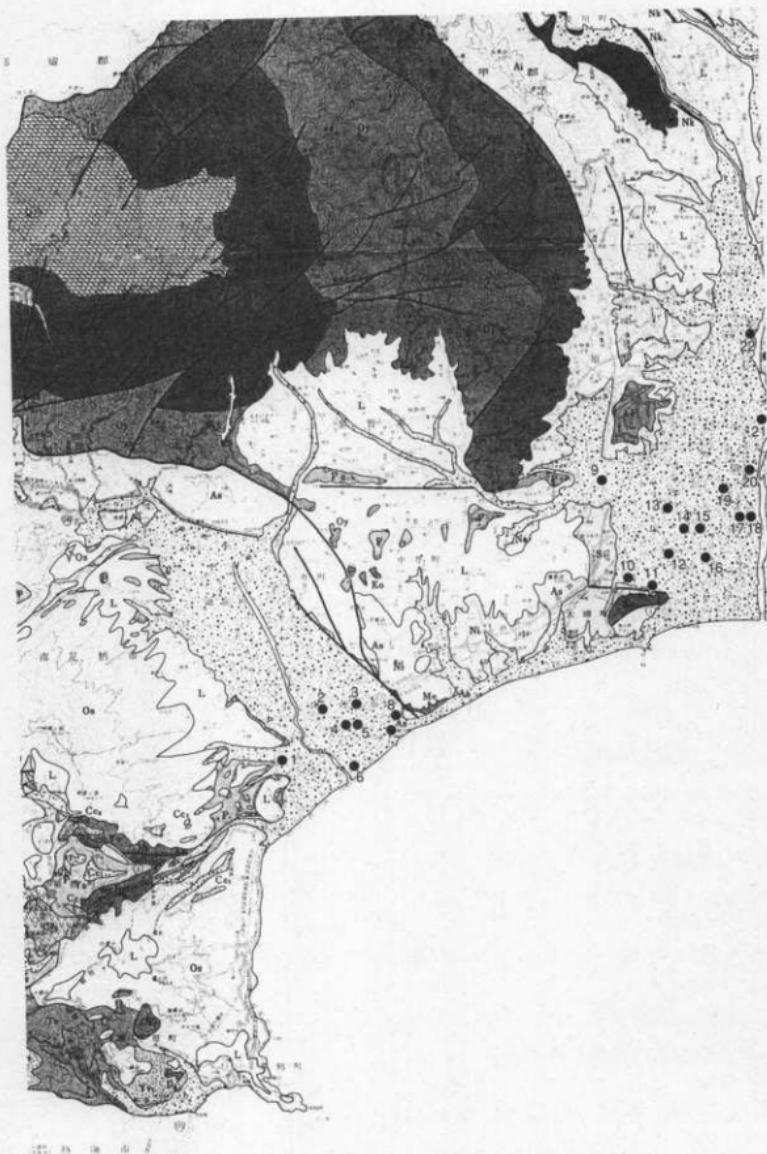
相模川と浜田川の間の砂丘上に立地している。三角縁神獣鏡が出土した古墳時代前期の古墳として知られるが、現在は消滅していて墳形は諸説ある。

20. 田村館跡

相模川右岸の自然堤防上に立地している。弥生時代中期後半の土坑から土器がまとまって出土している。

21. 墨染遺跡

相模川右岸の自然堤防上に立地している。古墳時代前期の円形周溝墓、土坑墓が発見されている。弥生時



第1図 相模湾沿岸の低地道路（弥生時代中期～古墳時代前期）分布図 [1/200,000]

相模湾沿岸の「低地」に立地する弥生時代遺跡



〔『神奈川県史各論編4自然 付図1 神奈川県地質図』(神奈川県1978) を使用〕

代後期の遺物も多数出土し、遺構の存在が推測される。

22. 城際遺跡

相模川右岸の自然堤防上に立地している。弥生時代終末から古墳時代前期の竪穴住居と、古墳時代前期の方形周溝墓が発見されている。

23. 河原口坊中遺跡（註1）

相模川左岸の自然堤防上に立地している。弥生時代中期後半の竪穴住居、後期の竪穴住居、溝などが発見されている。

24. 社家宇治山遺跡

相模川左岸の自然堤防上に立地している。弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居と方形周溝墓が発見されている。居住域と墓域は隣接し、おおよそ南北に分離している。

25. 中野桜野遺跡

相模川左岸の自然堤防上に立地している。弥生時代中期中葉の土坑、中期後半の竪穴住居と方形周溝墓、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居と方形周溝墓が発見されている。居住域と墓域は隣接し、南北に分かれている。

26. 倉見川端遺跡（註2）

相模川左岸の自然堤防上に立地している。弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居が発見されている。

27. 宮山中里遺跡

相模川左岸の自然堤防上に立地している。弥生時代後期の竪穴住居、溝（環濠）、方形周溝墓、土坑等が発見されている。

28. 七堂伽藍跡（註3）

小出川左岸の砂丘上に立地している。弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居、方形周溝墓、河道跡が発見されている。弥生時代後期の木製品（エブリ、梯子等）が出土している。

29. 上ノ町遺跡

小出川左岸の自然堤防上に立地している。弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居が発見されている。

30. 大屋敷B遺跡

小出川左岸の自然堤防上に立地している。古墳時代前期初頭の竪穴住居が発見されている。

31. 小戸井遺跡

千ノ川と小出川の間の自然堤防上に立地している。弥生時代後期（終末期）の竪穴住居が発見されている。

32. 居村A遺跡

千ノ川左岸の砂丘上に立地している。弥生時代中期後半の溝（環濠？）が発見されている。

33. 宿遺跡

千ノ川左岸の砂丘上に立地している。弥生時代中期後半と後期末の竪穴住居が発見されている。

34. 四団A遺跡

千ノ川右岸の砂丘上に立地している。弥生時代後期の竪穴住居が発見されている。

35. 藤沢市No211遺跡

引地川右岸の台地裾の沖積地に立地している。弥生時代後期（終末期）の竪穴住居が発見されている。

36. 若尾山遺跡

相模湾沿岸の「低地」に立地する弥生時代遺跡

境川右岸の砂丘上に立地している。弥生時代中期後半の方形周溝墓、弥生時代後期の竪穴住居、方形周溝墓、古墳時代前期の土器集中（祭祀跡？）が発見されている。

37. 藤沢市No265遺跡

柏尾川左岸の砂丘上に立地している。弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居、竪穴状造構、土器溜まりが発見されている。

38. 大源太遺跡

境川（片瀬川）左岸の砂丘上に立地している。弥生時代中期後半の土坑、弥生時代後期の竪穴住居、方形周溝墓が発見されている。古墳時代前期の包含層から小型鐵製四獸鏡が出土している。

39. 長谷小路周辺遺跡群

滑川右岸の砂丘上に立地している。弥生時代中期後半および中期から古墳時代前期の土坑墓、古墳時代前期の祭祀跡とされる土器集中が発見されている。

40. 大倉幕府周辺遺跡群

滑川右岸の自然堤防上に立地している。弥生時代中期後半から後期の竪穴住居、古墳時代前期の方形周溝墓などが発見されている。

41. 池子遺跡群

田越川右岸の沖積地に立地している。池子棟敷戸遺跡を併せて、池子遺跡群として扱う。弥生時代中期後半から後期前半の竪穴住居、掘立柱建物、方形周溝墓、土坑、溝、旧河道、後期終末から古墳時代前期の竪穴住居、土坑、溝などが発見されている。弥生時代中期後半には谷戸入り口部のNo 1-A 地点を中心に居住域と墓域が分かれていた。弥生時代後期終末から古墳時代前期には、前代に居住域だったところに墓域が営まれるようになるが、居住域は不在となる（第2・3図）。弥生時代中期後半の河道から工具・農具・容器ほかの木製品・未製品が多数出土していて、該期の木器製作遺跡と言える状況である。

42. 葉山町No 2 遺跡

海岸に近い沖積地（砂丘）に立地している。古墳時代前期の竪穴住居が発見されている。

III. 遺跡の分布と動向の概要

足柄平野では、平野の東縁には永坂台地、千代台地、高田台地といった低位台地があって弥生時代から古墳時代前期の遺跡が濃密に分布している。また、平野の南西部にある久野丘陵、八幡山丘陵にも弥生時代から古墳時代前期の遺跡が分布している。これに対して酒匂川はかの河川によって形成された低地部では、近年、砂丘上や自然堤防上の調査が進展し、低地遺跡の調査成果が蓄積されている。酒匂川左岸側に調査例が多く、特に森戸川流域や臨海地域の砂丘上に多い。

相模川以西の相模平野では、相模平野西縁から秦野盆地周辺の丘陵上や台地上に弥生時代から古墳時代前期の遺跡が数多く分布しているが、平塚市域の砂丘地帯を中心にして立地する遺跡の調査も蓄積されている。相模川以東では、相模平野東縁の台地上に数多くの遺跡が分布している。低地部では茅ヶ崎市、藤沢市、鎌倉市（柏尾川流域）などで砂丘上の遺跡が以前から調査されているが、近年の高速道路建設に関わる調査で、相模川沿いの自然堤防上の遺跡が新たに調査され、低地遺跡に関する新知見が増加している。

三浦半島地区では、台地上および丘陵斜面に弥生時代から古墳時代前期の遺跡がみられるが、丘陵が海岸部まで迫り、低地面積が広くないこともあり低地部の遺跡調査例は少ない。

時期別の遺跡動向（第4～6図）を見ると、小田原市中里遺跡で明らかになったように、弥生時代中期中葉には低地へ進出していて、居住域と墓域を営んでいて、農耕集落の開始と共に低地へ進出し、「低地」もすでに居住可能な安定した地形となっていたことが知られる。弥生時代中期後半の宮ノ台式期には、小田原市三ツ俣遺跡や小八幡東畠遺跡など自然堤防や海岸近くの砂丘上にも居住域、墓域が認められ、相模平野でも平塚市の南原B遺跡、大原遺跡、坪内遺跡や茅ヶ崎市の居村A遺跡、宿遺跡、藤沢市の若尾山遺跡などで同様に居住域、墓域が営まれていて、分布範囲は後の時代の遺跡とはほとんど変わらない。三浦半島地区でも鎌倉市の長谷小路周辺遺跡と大倉幕府周辺遺跡群、逗子市池子遺跡群などで弥生時代中期後半の遺跡が認められる。弥生時代中期後半から後期への連続が明らかな遺跡はほとんどないが、後期の遺跡分布は中期後半に比べて一段と増加している。さらに古墳時代前期の遺跡分布は増加傾向にあることが窺え、弥生時代後期終末期から古墳時代初頭という時代区分の上では微妙な時期から始まっている遺跡も多い。

遺跡の内容・構造の種別をみると、弥生時代中期から古墳時代前期までいずれの時期でも、台地上の遺跡と同様に居住域と墓域が形成され、それぞれ周辺地形の中での微高地に占地しているようである。また、同時期の遺構では居住域と墓域は区分され混在することはない。低地遺跡と言われる遺跡においても集落のあり方は基本的に台地上と変わらないと考えられるが、今後具体的な検討を積み重ねる必要がある。また、低地遺跡の調査例が増えたにもかかわらず、生産域の調査事例は増えていない。今後、沖積微高地のみならず後背湿地の調査、生産域（水田跡）の実態把握が課題である。

(池田)

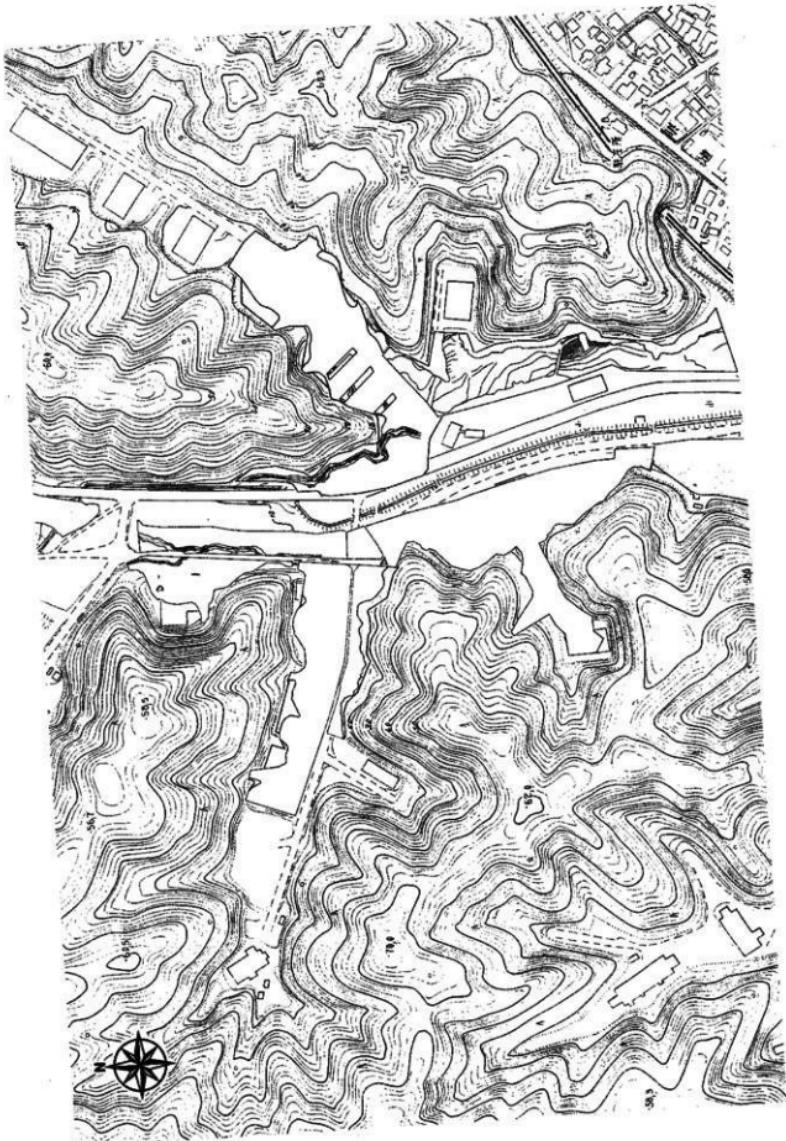
註

- (1) 当財団で平成18年度調査開始・継続中である。調査担当者より概要について提供を受けた。
- (2) 宮山中里遺跡Ⅲ・Ⅳ区として平成16年度調査。平成18年度にも一部調査。平成18年度に分離、新規命名。
- (3)隣接する寒川町No76遺跡を含む。

参考文献

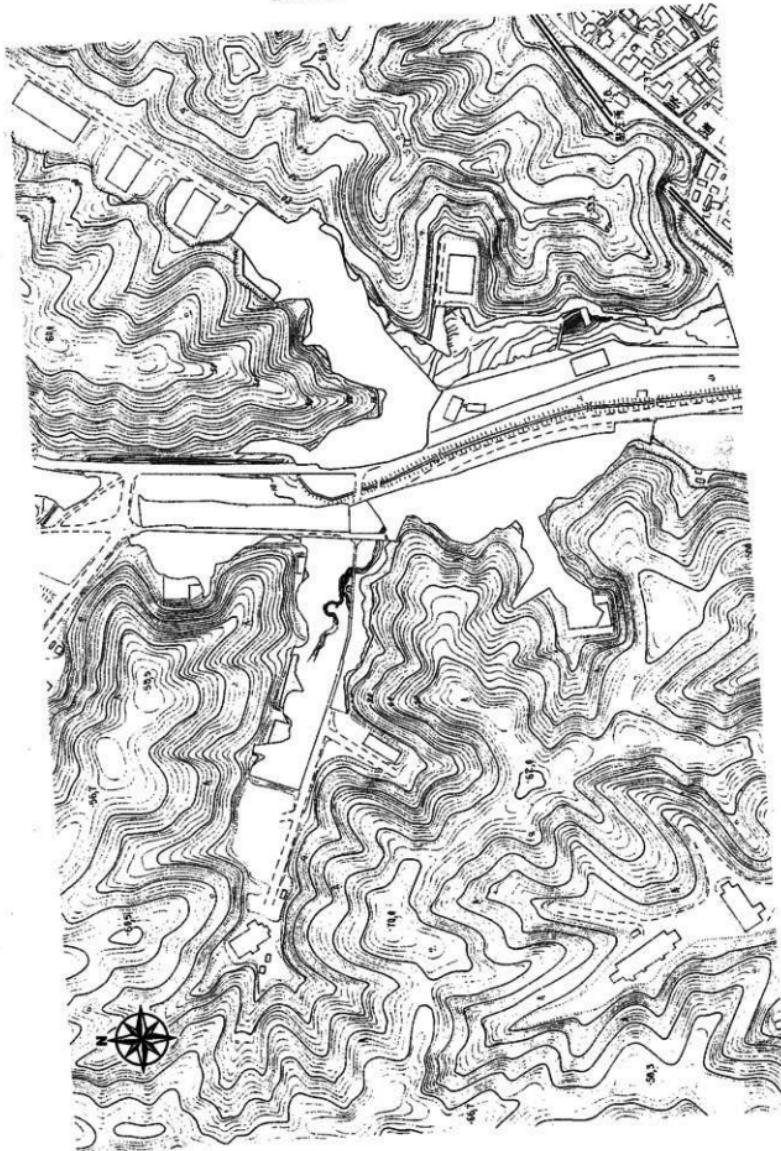
1. 久野下馬道上遺跡発掘調査団2002「久野下馬道上遺跡発掘調査報告書」
2. 天野賛一2006「成田上耕地遺跡」『発掘調査成果発表会・公開セミナー「低地遺跡の考古学」発表要旨』(財)かながわ考古学財団
3. 財団法人かながわ考古学財団2006「高田南原遺跡第Ⅱ地点」
4. 中里遺跡第Ⅲ地点発掘調査団1997「中里遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告書」
5. 戸田哲也1999「小田原市中里遺跡第Ⅰ地点」「第23回待春川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨」神奈川県考古学会
6. 河合英夫2001「新しい古墳の〈かたち〉～小田原市中里遺跡「平地式建物」の事例」「シンポジウム弥生後期のヒトの移動～相模湾から広がる世界～資料集」西相模考古学研究会
7. 財団法人かながわ考古学財団2000「矢代遺跡」
8. 佐々木健策2006「酒匂古中宿遺跡第Ⅰ地点」「平成18年小田原市遺跡調査発表会発表要旨」小田原市教育委員会
9. 王川文化財研究所2003「小八幡東畠遺跡第Ⅰ地点」
10. 王川文化財研究所2004「小八幡東畠遺跡第Ⅱ地点」
11. 佐々木健策2006「小八幡中沢遺跡第Ⅰ地点」「平成18年小田原市遺跡調査発表会発表要旨」小田原市教育委員会
12. 神奈川県立埋蔵文化財センター1986「三ツ俣遺跡（第1分層）」
13. 小田原市教育委員会1980「国府津三ツ俣遺跡」
14. 国府津三ツ俣遺跡調査団1991「国府津三ツ俣遺跡」
15. 財団法人かながわ考古学財団2003「三ツ俣遺跡Ⅳ（H地区）」
16. 金目郵便局建設用地内遺跡発掘調査団1998「伏見遺跡発掘調査報告書」
17. 平塚市No86横岸B遺跡発掘調査団1999「平塚市No86横岸B遺跡発掘調査報告書」
18. 平塚市博物館1979「鎌本遺跡」「久保田遺跡他遺跡詳細分布調査報告書」
19. 平塚市遺跡調査会1998「南原B遺跡第4地点」「山王久保遺跡」平塚市埋蔵文化財シリーズ31
20. 平塚市遺跡調査会1995「南原B遺跡第2地点」「山王B・福井前A遺跡他」平塚市埋蔵文化財シリーズ23
21. 畠田本郷遺跡発掘調査団1985「畠田本郷」

22. 中原上宿遺跡調査団1981「中原上宿」
23. 平塚市遺跡調査会1988「大原遺跡Ⅱ」平塚市埋蔵文化財シリーズ7
24. 平塚市遺跡調査会1989「大原遺跡Ⅲ」平塚市埋蔵文化財シリーズ10
25. 柏木善治「湘南新道開通遺跡」「発掘調査成果発表会・公開セミナー「低地遺跡の考古学」発表要旨」(財)かながわ考古学財団
26. 平塚市教育委員会1989「坪ノ内遺跡」(第3地区)『平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書』2
27. 柏木善治2006「湘南新道開通遺跡(大会原遺跡・坪ノ内遺跡)」「年報12 平成16年度」(財)かながわ考古学財団
28. 田村館跡発掘調査団1995「田村館跡」
29. 平塚市遺跡調査会1992「原糠遺跡第3地点」「天神前・桜塚遺跡他」平塚市埋蔵文化財シリーズ21
30. 渡辺清史2006「城路遺跡」「年報12 平成16年度」(財)かながわ考古学財団
31. 宮坂淳一2004「社家宇治山遺跡」「年報11 平成15年度」(財)かながわ考古学財団
32. 宮坂淳一2006「社家宇治山遺跡」「年報12 平成16年度」(財)かながわ考古学財団
33. 宮坂淳一2006「社家宇治山遺跡発掘調査概要」「海老名の歴史」海老名市史研究第16号
34. 宮坂淳一2006「社家宇治山遺跡」「発掘調査成果発表会・公開セミナー「低地遺跡の考古学」発表要旨」(財)かながわ考古学財団
35. 阿部友寿2004「中野板野遺跡」「年報11 平成15年度」(財)かながわ考古学財団
36. 阿部友寿2006「中野板野遺跡」「年報12 平成16年度」(財)かながわ考古学財団
37. 阿部友寿2006「中野板野遺跡」発掘調査概要「海老名の歴史」海老名市史研究第16号
38. 国 稔2006「中野板野遺跡」「発掘調査成果発表会・公開セミナー「低地遺跡の考古学」発表要旨」(財)かながわ考古学財団
39. 財団法人かながわ考古学財団2004「宮山中里遺跡・宮山台遺跡」
40. 池田 泰2006「宮山中里遺跡」「発掘調査成果発表会・公開セミナー「低地遺跡の考古学」発表要旨」(財)かながわ考古学財団
41. 井辻一徳2002「小出川河川改修事業開通道路群」「年報9 平成13年度」(財)かながわ考古学財団
42. 小川岳人2004「小出川河川改修事業開通道路群」「年報11 平成15年度」(財)かながわ考古学財団
43. 小川岳人2006「小出川河川改修事業開通道路群」「発掘調査成果発表会・公開セミナー「低地遺跡の考古学」発表要旨」(財)かながわ考古学財団
44. 財団法人かながわ考古学財団2003「上ノ町遺跡」
45. 新湘南国埋蔵文化財調査会1985「新湘南国埋蔵文化財調査報告」
46. 藤井秀男1997「西久保・大堂敷B遺跡」「第7回茅ヶ崎市遺跡調査発表会 発表要旨」(財)茅ヶ崎市文化振興財団
47. 茅ヶ崎市教育委員会1997「平成8年度茅ヶ崎の社会教育」
48. 富永富士雄1997「茅ヶ崎・居村A遺跡第3次調査」「第6回茅ヶ崎市遺跡調査発表会 発表要旨」
49. 富永富士雄1997「小和田・宿遺跡」「第7回茅ヶ崎市遺跡調査発表会 発表要旨」(財)茅ヶ崎市文化振興財団
50. 湘南考古学研究所1997「No211遺跡」「藤沢市文化財調査報告書第32集」
51. 藤沢市立大道小学校内遺跡埋蔵文化財発掘調査団1998「若尾山(藤沢市No36)遺跡-藤沢市立大道小学校内地点-発掘調査報告書」
52. 藤沢市教育委員会2001「藤沢市No265遺跡発掘調査報告書」「藤沢市文化財調査報告書第36集」
53. 大源太遺跡発掘調査団1997「藤沢市No11(大源太)遺跡確認調査報告書」
54. 大源太遺跡発掘調査団1997「池原大源太遺跡発掘調査報告書」
55. 青山学院大学大源太遺跡発掘調査団1984「大源太遺跡の発掘調査」
56. 長谷小路周辺遺跡発掘調査団1995「長谷小路周辺遺跡 由比ガ浜三丁目258番1 地点(No236)」
57. 長谷小路周辺遺跡発掘調査団1994「長谷小路周辺遺跡 由比ガ浜三丁目228-229番外(No236)」
58. 長谷小路周辺遺跡発掘調査団2002「長谷小路周辺遺跡(No236)由比ガ浜三丁目1262番2、1251番1・2 地点発掘調査報告書」
59. 鎌倉市教育委員会1998「大倉幕府周辺遺跡群」「鎌倉の埋蔵文化財2」
60. 鎌倉市教育委員会2005「大倉幕府周辺遺跡群」「鎌倉の埋蔵文化財8」
61. 大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団1995「大倉幕府周辺遺跡群北下四丁目620番5 地点発掘調査報告書」
62. 財団法人かながわ考古学財団1997「池子遺跡群V」
63. 財団法人かながわ考古学財団1999「池子遺跡群VI」
64. 財団法人かながわ考古学財団1999「池子遺跡群VII」
65. 財団法人かながわ考古学財団1999「池子遺跡群X」
66. 東国歴史考古学研究所2000「池子残堀戸遺跡(逗子市No100) 発掘調査報告書」
67. 東国歴史考古学研究所1999「葉山町No2 遺跡発掘調査報告書」
68. 茅ヶ崎市教育委員会1996「湘南の低地遺跡 展示図録」
69. 平塚市博物館古市編さん担当1999「平塚市史11上別編考古(1)」
70. 平塚市博物館2002「相武国の古墳—相模川流域の古墳時代—」
71. 財団法人かながわ考古学財団2006「発掘調査成果発表会・公開セミナー「低地遺跡の考古学」発表要旨」





第2図 池子遺跡群遺構配図（弥生時代中期後半）[1/4,000]





第3図 池子遺跡群遺構配置図（弥生時代末～古墳前期初頭）[1/4,000]



第4図 弥生時代中期の低地道路分布図 [1/300,000]



第5図 弥生時代後期の低地遺跡分布図 [1/300,000]



第6図 古墳時代前期の低地遺跡分布図 [1/300,000]

神奈川県内における奈良・平安時代の農具（2）

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

はじめに

奈良・平安時代研究プロジェクトチームは、昨年度から農具を取り上げ、まず実態を把握するため全県的な集成を行った。ただし、木製農具は除き、旧相模国に属する遺跡から出土したものに限った。結果として339点の鉄製品が集成された。内訳は、243点が鎌、57点の穂摘具、39点の鋤鋤先であった。

今年度は、その集成をもとに、穂摘具、鋤鋤、鎌の三器種の考察を試みた。古代農業の生産と技術の在り方や形態の特定と分類、また出土状況から生産用具の使用方法や所有関係等について考察を試みた。古代農具の研究の現状は、研究略史で確認し、チームの考察の方向と内容の判断材料の一助としたが、果たして、どれほど研究の前進に寄与できたであろうか。例えば、在地有力富豪層の鍛錬の掌握といった点は確認できただろうか。穂摘具の57点という数は鉄製農具の約16%であるが、圧倒的な鎌の出現率に比してどのような意味があるのか。諸氏のご賢察を仰ぎたい。

最後に昨年度掲載できなかった横浜市・川崎市の旧武藏国の農具の集成成分及び昨年度の補遺を掲載した。今回の考察の対象からは除かれていることを了解されたい。

また、集成から除いてきた木製品であるが、来年度には集成し、考察も併せて掲載できればと考えている。鉄製品と木製品を合わせて考えなければ、本来農業技術の全体像など見てこないはずであるから。

(西谷俊廣)

例言（旧武藏国の農具集成と諸考察中の因版について）

1. 本集成は2005年9月までに公刊された遺跡調査報告書に基づき、神奈川県内の鉄製農具を集成した。
2. 報告書で鉄製農具と報告されているても、実測図や写真がなかつたり、遺存状態が悪く断片で、プロジェクトチームで鉄製農具と判断しかねる場合は除外した。
3. 集成表の項目内容は次の通りである。
 - (1) 番号：県西部から市町村毎に遺跡毎に並べて一点一番号とした。
 - (2) 器種名：報告書によっては〇状製品など器種名が統一されていないため、本集成では鋤鋤先・鎌・穂摘具と統一して表記した。
 - (3) 遺跡名：調査年度や地点にかかわらず、同一遺跡として扱った。
 - (4) 出土遺構：地区・地点別に報告されている場合は、地区名を表記した後に遺構名を入れた。
 - (5) 出土位置：報告書の記載に従ったが、表現を統一した。
 - (6) 遺存状況：実測図面から判断して「完形」、少し欠けている「ほぼ完形」、残存が1/2より多い「欠損」と残存が1/2より少ない「断片」の四段階で表記した。
 - (7) 法量：鋤鋤先の厚みは耳部が残存している場合は耳部の厚みとした。
 - (8) 遺構時期：報告書に記載がない場合や古墳～～中世と記載された遺物は奈良・平安時代前後の遺物である可能性がある。
4. 因版の縮尺は、鋤鋤先1/4、鎌・穂摘具は1/3である。鋤鋤先の分析箇所の中の因版は、鋤鋤先1/8である。

1. 古代農具の研究略史

日本の原始・古代農業は弥生時代に水稻耕作が普及して以降、幾度かの画期を経て確実に技術的な発展を遂げてきた。なかでも考古学資料としての農具は、弥生～古墳時代に木製から鉄製へ素材が変化し、鉄器へ移行した後も機能的に改良が加えられ、それらが型式的に変遷が迫れることから、古くから研究対象とされてきた。この点については、かつて土井義夫氏が端的に研究史を総括しており（土井1971）、ここでは氏の研究史整理を基にしつつ、最近の研究も含めて大まかに振り返っておくことにしたい。

まず、古代の農具は、1920年代に考古学者の基礎的研究からはじまった。高橋健自、後藤守一、鳥居龍藏らの研究がその代表的なものであるが（高橋1920、後藤1921・1924、鳥居1925、両角1929・1933等）、当時としては発掘資料に限界があったことから、出土した個別資料の分析に終始し、さしたる進展には繋がらなかつた。その後、1940年代になると、主に小野武夫、鈴方貞亮、古島敏雄といった農業史学者達によって、社会経済史的な観点から農具発展の歴史的意義を究明しようとする意欲的な研究が盛んに行われるようになつたが（小野1942・鈴方1943・古島1947等）、それまでの考古学資料の蓄積が乏しいことを反映して、特に原始・古代の農具の理解については極めて具体性の乏しいものであった。その後、1950年代には発掘調査の進展によって農具の出土事例も次第に増加してきたものの、当時の考古学研究者の関心事は主に弥生時代の初期農耕であり、40年代の農業史学者達の研究を発展的に継承することは無く、本格的な研究は1960年代後半以降を待たなければならなかつた。

60年代以降の代表的な研究としては、まず古墳出土の鉄製スキ・クワ・鎌の形態分類を通じて、それらの編年・系譜について言及した都出比呂志氏の論考があげられる（都出1967）。都出氏は、開墾土木的機能の強い鉄製打ちグワと収穫具や草刈用具としての直刃の鉄鎌が出現する弥生時代中期末、そして鉄製打ちグワに代わって鉄製U字形スキ・クワが出現し、耕作具にも鉄器化が進んだ5世紀初頭～中葉に農具鉄器化の二つの画期を見いだした。さらに水稻農耕の開始期から8世紀までの農業技術発展段階を3つに区分して捉え、このうち、特に6～7世紀に比定した「第3段階」は、古代の耕地拡大と立地条件を検討した八賀晋氏の研究成果（八賀1967）を踏まえながら、純低湿地農耕から乾田・畠も含む農耕への飛躍が見られた大きな変革期として位置づけ、さらに農具の所有についても「第2段階」（3～5世紀）以前の農業共同体の集団的所有ないしは首長への一極集中から、世帯共同体の有力者が所有するようになったとの推論を述べている。

一方、文献史学の立場から原島礼二氏は、直接生産者たる農民の住まいである堅穴住居から出土する鉄製農具について初めて着目し、五領・和泉・矢倉台・鬼高・真間・国分の各時期毎の鉄製品出土率を求めるこことによって農工具の所有関係の推移を読み取るという、極めて意欲的な研究成果を公表した。その中で、特に真間～国分期においては鉄製品の出土率が飛躍的に増加することから、農工具の所有は単位集団から堅穴住居単位に移行するものとし、そこから農民経営の発展過程を説明しようとした。しかし、この原島氏の研究に対しては、いわゆる農具と工具を混同して鉄製品を分析している点で資料操作上の問題が指摘され（宮原1970）、さらに所有関係を論じる上で、鉄器が遺存する偶然性を踏まえない統計処理の有効性についても疑義が示されるなど（都出1969）、批判が相次いだ。

こうしたなかで土井義夫氏は、改めて関東地方の堅穴住居出土の鉄製農具について形態分類・編年を行い、開墾用具のスキ・クワと収穫具の鎌を区分して検討した。その結果、関東地方でU字形スキ・クワ先が普及期する5世紀末、さらに広汎な根刈りの普及を示す曲羽鎌の出現とスキ先としての効果を發揮するよりU字

形に近い形状のスキ・クワ先が普及する8～9世紀の交期が、農具の機能的発展として画期があることを指摘した（土井前掲）。また、先の原島氏による統計処理から導き出された出土鉄製農具の増加率は、鎌でこそ認められるもののスキ・クワ先では大きな変化は無く、8・9世紀に至っても古代東国的一般農民は依然として開墾・土木用具の私的所有を実現しえず、鉄製農具を集中的に所有したのは有力家父長層であるとの見通しを述べた。その後も、律令官人への下賜品としての性格を有する鉄鎌を検討した伊達祥子氏は、天平以前と以後で鎌の流通に関与する主体が国家から富豪層に移行したことを見延べ（伊達1974）、また高橋一夫氏は国分期に増加する製鉄遺跡・小鎌冶造構を背景に富豪層が鉄器を集中的に所有したことを示唆するなど（高橋1976）、都出・原島論文に呼応した研究が1970年代に活況を呈し、ここに古代農具研究が一つの大きな到達点に達したことを評価出来る。さらに、都出氏が原島説批判を行った遺物の遺存の偶然性と資料操作の限界性を打開する一つの策として土井氏は、鉄製農具を取り扱う上で主に統計的な処理で相対的な差異を問題にすることしか出来ない原因が、時代を問わず鉄器の出土状態の記述が無いことにも触れ、個々の遺物の出土状況を記録化する必要性を強く訴えた（土井1976）。

しかし、その後の研究の趨勢としては、発掘調査によって増加した資料の細分化、精密な土器編年研究に對比した農具の時代的な変遷解明に主眼が注がれることはあったが（鶴間1985等）、農具の所有や古代の営農形態・労働編成の問題にまで踏み込んだ研究となると、70年代半ば以降はすっかり停滞してしまっている感は否めない。その後1990年代以降の研究としては、農具の出土状況に関して松村恵司氏が、焼失家屋における住居魔絶時に置き去りにされた出土事例をもって検討を加えている（松村1991）。焼失家屋というレアなケースであり、事例数も9例とごく限られた分析ではあるが、スキ・クワの複数出土例が実態として認められず、所有は住居址の小グループ単位（世帯共同体）毎で、農具の管理は家父長を想定する見解を呈示した。また、古庄浩明氏は南関東地方の6～10世紀の鉄製農工具を集成し、千葉・埼玉・神奈川県内の主要な4遺跡をケーススタディーとして時期毎の鉄器出土状況を分析した（古庄1994）。その結果、鉄製農工具の所有形態については、集落を構成する個別住居址（一世帯）、小群（住居址2～6軒で構成される世帯共同体）、大群（複数の小群を束ねて構成される家父長制の世帯共同体）と区別したなかで、消費材の加工に用いられた刀子は各世帯・収穫具の鎌は世帯共同体、スキ・クワは地方豪族層によって掌握されていたとの見通しを述べている。また、同年には『古代における農具の変遷』資料集が編纂され（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1994）、全国的に出土農耕具の集成が行われた。その中で神奈川県下は谷口肇氏が担当し、弥生～奈良・平安時代を通じて農耕具の様相をまとめられたが、後述するようにこれまで資料的に少なく、等閑視されがちであった古代の穀類具が予想以上に出土例が多いことを明らかにした（谷口1994）。今後、県下の古代農具を考察する上での、一つの重要な視点になるものと思われる。

最後に、奈良・平安時代の農具は、『和名類聚抄』に草・鋤・鍬・鋤・鉢・馬耙・櫛・机・鍬・連枷等が確認され、多様な農具組成が存在した事は判明しており、さらに11世紀の史料『新猿楽記』等に見られる大名田堵の農業經營を伝える記事からは、律令国家の在地支配が破綻した9世紀以降、いわゆる「富豪の輩」と呼ばれる在地豪族層が農具を一括所有していたことを推測させるが、在地富豪層の屋敷と比定されるような遺跡から農具が多量出土する事例に恵まれず、考古学的な裏付けは依然として困難が伴っている状況といえよう。また、従前の農具研究は、いずれも弥生時代から奈良・平安時代のいわゆる原始・古代農業に視点が終始し、その後の中世への移行状況にまで踏み込んだ研究も見られない。今後は古代～中世農具の様相に対しても視点を注いでいく必要があるだろう。

（依田亮一）

2. 神奈川県出土の鍔鋒先について

鍔鋒先としたものは耕起具の一部である。本来、機能にそれぞれ差があるが今回鉄製の先端部だけでは分別が困難なので鍔・鋒を区別せず鍔鋒先とした。

鍔鋒先の形態及び機能分類については都出比呂志氏、土井義夫氏、山口直樹氏、松井和幸氏によって行われている。非常に簡単ではあるが以下の通りである。

都出氏は鍔鋒先を小型品と大型品に分け、小型品をミニチュアとし、大型品をA類、B類、C類の3類に分けた。A・B類はU字形の刃先を持つものとし、機能は鋒先とした。C類は四字形を呈するもので、鍔先としている（都出比呂志1967）。

土井氏はa類、b類の2類に分けた。a類は刃部が直線状ないしは緩い曲線を呈するものとし、これは都出氏のC類に相当する。またb類は刃部が大きく曲線を描くものとし、これは都出氏のA類に相当する。機能面では前者を鋒先、後者を鋒先（小型品は鍔先）としている（土井義夫1971）。

山口氏は都出・土井両氏の分類をふまえ、形状をU字形と四字形の間に中間形をもうけ3形態とし、大型品を1類、小型品を2類とした上で、刃先の形状が鋒・鍔を決定する絶対条件にならないとした（山口直樹1978）。

松井氏は土井氏の2分類に従いA類、B類とした。A類は土井氏のb類に、B類は同じくa類にあたる。さらにA類を「刃先が長く、先端部が直線気味のもの」・「本来のU字形を呈していて、刃先部の幅が耳部の幅と変わらないもの」・「刃先部はU字形であるが、その長さがかなり長く出ているもの」の3類に細分している（松井和幸1985）。

神奈川県下で鍔鋒先は可能性のあるものを含めると44点出土している。その出土は量の多少はあるがほぼ県下全域から出土している。どちらかというと旧相模国に多い。単純に今日の行政区画で比較はできないが、その中でも海老名市は本郷遺跡を中心として11点が出土しており県下の25%に相当する。ついで秦野市の8点、平塚市と厚木市の各5点ずつの出土である。それぞれ全体の18%と11%を占める。

その出土状況であるが、ピットを含め遺構からの出土点数は32点あり全体の72%をしめる。そのうち住居址からの出土は27点を数え遺構全体の81%にあたる。そのほとんどが住居址からの出土ということになる。

共伴遺物等から時期が推定できるものは多くはないが、奈良時代とされるものは5点ある。確実に平安時代に属するものは20点あり、全体の約45%を占める。

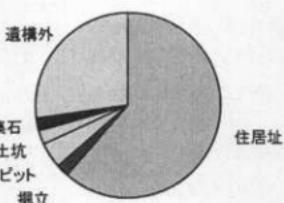
以上の点から鍔鋒の出土状況を見てみると、地域では海老名市が、遺構では住居址が多く、時期は平安時代になってからが群を抜いて多くなる傾向が見られる。

（渡辺清史）

*第1図は前回集成した中で、時期が明確なものを大型品と小型品に分けた。



市町村別出土図



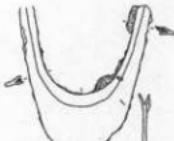
遺構別出土図

大型品

奈良時代

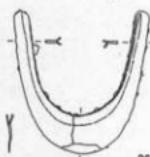


150

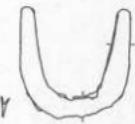


298

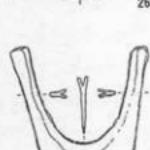
平安時代



316



268



269



174

小型品



9



187



27



28



232



179

第1図 神奈川県の銀器先出土状況グラフと形態

3. 相模の鎌について

<出土遺跡や出土状況>

相模における鎌は、274点出土しており鉄製農具全体の約72%を占めている。奈良・平安時代の鉄製農具の中でも収穫具としての鎌が主たるものである。ここでは鎌の出土状況、形態について触れてみたい。出土状況は東部・西部特に偏りなく、一般集落に普遍的に見られる。出土のはほとんどが堅穴住居からの出土であり、鎌274点のうち197点を数え、他に掘立柱建物5点、溝10点、土坑・ピット・井戸の出土例が見られる。このうち遺存状態が完形・ほぼ完形を合わせると67点が数えられる。時期が明確に判別できるものを見ると、7世紀後半から8世紀前半にかかるものが26点、8世紀代では50点と当該期の社会に急速に増加し、その数は9世紀代では42点と変わることなく普及していたものと思われる。しかし10世紀以降では26点と減少傾向を示している。

次に、出土状況をみていきたい。堅穴住居から出土したもののうち出土位置を見ると、73点が覆土中から出土し、ついで床面直上からの出土が32点、床下からの出土が4点、窓内からの出土が4点である。また、鎌を出土した全104遺跡のうち45遺跡で複数の鎌が出土し、このうち同じ堅穴住居内から複数の鎌が出土した例が17軒、鎌と鋤鋏先が出土した例3軒、鎌と穂摘具が出土した例が6軒、掘立柱建物から鎌と穂摘具が出土した例が1軒を数えた。1軒の堅穴住居から多量の鎌が出土した例としては厚木市鳶尾遺跡第43号堅穴住居覆土中より1点をのぞき断片資料ではあるが、全5点が出土している。遺構の時期は9世紀前半に比定されている。秦野市草山遺跡の堅穴住居SI 48では中央やや北寄りの位置で、床面から約5cm浮いた地点でほぼ完形の鎌が4点びったりそろった状態で出土している。この4点はほぼ同じ規格を呈し、法量全長18.8~20.2cm・幅4.1~4.6cm・厚み0.25cmを測る。いずれも刃も柄もつけられていない使用前の段階のもので、4点を一まとめにして保管されていたものと考えられ、鎌の入手状況や複数所有を推測することができる。遺構の時期は8世紀後半に比定される。草山遺跡では鉄製農具が20点出土し、遺跡内の分布は特定の場所(II地区)に偏在して出土する。そのうち鎌は11点出土しているが、複数の鎌および穂摘具との組み合わせで出土しているが、堅穴住居SI 100ではそれぞれ一部を欠損する2点の鎌が出土しており、遺構の時期は9世紀前半と考えられている。また9世紀前半に比定される堅穴住居SI 51からはほぼ完形の鎌1点と穂摘具2点のセットで出土し、鎌の法量は全長(17.0)cm・幅4.2cm・厚み0.4cmを測り、刃部は著しく磨耗している。

堅穴住居から複数枚(2点)出土した例としては、ほかに厚木市峯ヶ谷戸遺跡37号住居よりほぼ完形の2点が出土している。法量はそれぞれ全長(16.6)cm・幅2.6cm・厚み0.25cm、全長15.6cm・幅2.8cm・厚み0.25cmを測り、10世紀前半に比定されている。城山町風間遺跡第4地区第1号住居では焼失家屋と考えられる住居址床面直上よりほぼ完形の鎌2点と鋤鋏先1点が出土している。このうちの鎌1点は柄と思われる炭化丸材が装着部に接続した状態で出土している。法量はそれぞれ全長(15.8)cm・幅3.7cm・厚み0.3cm、全長12.7cm・幅2.5cm・厚み0.3cmを測り、10世紀後半に比定されている。また鋤鋏先直上からは土器器坏が正位で出土しており、何らかの祭祀があった可能性が指摘されている。相模原市当麻遺跡第1地点9号住居では遺構の時期が8世紀前半に比定され、一部を欠損する鎌2点、中村遺跡B地区1号住居でも2点の鎌が出土し、このうちの1点は研ぎ減りの少ないやや大型の完形品で法量は全長20.2cm・幅3.5cm・厚み0.4cmを測る。綾瀬市宮久保遺跡では8世紀後半に比定される住居SI 63床面直上、また10世紀前半に比定されるSI 124床面

直上及び掘り方からそれぞれ鋸2点ずつが出土している。海老名市上浜田遺跡の8世紀前半と考えられる住居SI 90での出土例では、そのうちの1点は籠左袖より完形で出土し、法量全長16.8cm・幅3.4cm・厚み0.4cmを測る。本郷遺跡KA地区60住居でも完形の2点が出土している。法量はそれぞれ全長17.1cm・幅3.0cm・厚み0.2cm、全長（17.2）cm・幅3.2cm・厚み0.2cmを測り、10世紀前半に比定されている。このほか藤沢市若尾山遺跡第25号住居、横須賀市上吉井南遺跡第4号住居、横浜市宮之前南遺跡1号住居、川崎市新作小高台遺跡第82号住居、亀の子山遺跡の8世紀前半に比定される第4号住居があげられる。このうち亀の子山遺跡の鋸は完形のものと一部欠損するもので法量はそれぞれ全長12.6cm・幅3.0cm・厚み0.4cm、全長（11.0）cm・幅4.0cm・厚み0.5cmを測る。また海老名市大谷向原遺跡では出土している鋸20点のうち8世紀前半に比定されているSI 62・64・91号住居、9世紀前半のSI 7号・22号住居からそれぞれ2点ずつの出土し、SI 22号住居から出土した2点は同じ規格を呈し完形で法量はそれぞれ全長18.5cm・幅2.7cm・厚み0.25cm、全長18.6cm・幅3.3cm・厚み0.15cmを測る。SI 62・64号住居は約5mの位置に主軸方位をほぼ同じくして近接し、平面規模も6.5×5.9m、6.5×6.3mと大型を呈す。64号住居は鋸のほか穂摘具1点も出土している。以上のことを考えると、鋸の所有形態は共同体の中の特定の穴式住居単位にあることが推測され、複数所有が推測される。また、他の鉄製農耕具と重複して出土した例は、穂摘具と鋸のセットで出土した例として先にあげた草山遺跡SI 51・大谷向原SI 64号住居のほかに小田原市三ツ俣遺跡第6号掘立柱建物、綾瀬市宮久保遺跡SI 56号住居、横浜市宮之前南第1号住居があげられる。セット関係での出土時期は8世紀前半から9世紀にみられる。このことから相模においては、穂刈りから根刈りへと移行する過渡期においては鋸と穂摘具とが依然併用されていた可能性も考えられる。また鋸と鍔鋤先のセットで出土している例としては、先にあげた風間遺跡第4地区1号住居のほか相模原市相原田ノ上遺跡、川崎市小高台第82号住居があげられる。出土時期は風間遺跡、田ノ上遺跡は10世紀以降に比定され、鋸の出土量が減少傾向にある時期にあって、所有形態が共同体の中でより限定された住居単位に移行されたことが考えられる。

(宮井 香)

<機能と形態>

鉄製農具の機能と形態についてはすでに社会構造・農業生産・農業技術全体の中で検討されてきた。だが奈良・平安時代に限定した研究は少ない。それは前後の時代の農業経営と切り離して考えることが難しいからであろう。都出比呂志氏はA類（直刃鋸）・B類（曲刃鋸）・C類（茎付鋸）の3つに分類し、A・B両類とも木柄直角のものは稻の収穫鋸、鈍角のものは草刈りや木の下枝払いの鋸としている。鶴間昭正は武藏国出土の鉄鋸を刃部の形状や大きさ、装着角度から6類20種に形式分類し、各類の消長をグラフ化した。松井和幸は刃渡りや柄の長さに重点を置き小形（全長10~12cm）・中形（全長12~18cm）・大形（全長20cm程度以上）に分け、それぞれの用途を穗首収穫用の穂きり鋸・稻の根刈り用切鋸・除伐用大鋸（鉈鋸）に分類している。鋸のすべてが農具とは限らないことは現在の用法をみても明らかである。器種の多くはない時代は厳密な大きさでの用途分けはなされていなかった可能性が高い。

今回集成了した資料ではどうであろうか。刃部は研ぎ減りの顕著な個体が多く、また、基部のみ、刃部のみが出土した個体が多くある。鋸の残存率は完形・ほぼ完形は67点、242点の約28%と少ないため、大きさや形態を知る資料には乏しい。掲載した図版では刃部が下向きに、木柄装着部がほぼ垂直になるように掲載している。刃部を下向きに置いた場合、木柄装着部が左側にある、いわゆる左鋸が8点、茎付の鋸が3点出土している。鋸の全長が判明している個体のうち最小は8.0cm、最大は22.6cmであり、その差は約3倍あまりあ

る。この全長の差だけでも同じ用途と考へることには違和感を覚える。また、ほぼ同じ長さの鎌でも装着角度に違いがみられる。特に17cmを越える比較的大型の鎌の装着角度は個体差が大きい傾向が伺える。装着部分の折り返しも、身幅全体を折り返す個体が多いが、上部を三角形に折り返し柄に装着するタイプがある。この装着方法ではより角度が鈍角になり、大型の鎌にみられ、小形のものにはみられない傾向である。検出遺構の時期が判明し、尚かつ全長の判明している鎌で形状の変化を概観してみると、8世紀代では10.8cmの小型の製品が含まれるが、9世紀代では15cm以上、10世紀以降では16cm以上と大型化傾向にあるようである。つまり角度が鈍角になる鎌が多く含み、用途と形状の変化に関連性を見いだせるのは、より時代が下ってからと言ふことになろう。

(加藤久美)

4. 相模の穂摘具について

相模出土の古代の穂摘具については計59点である（補遺を含む）。以下出土状況、形態について記したい。

〈出土状況〉

出土遺跡は相模東部・西部特に偏りなく、一般集落に普遍的に見られる。第1表に主な古代集落と堅穴住居100軒あたりの穂摘具の出土数を提示した。やや乱暴に概数を出しているが、100軒あたり平均1.6点出土している。堅穴住居100軒以上の集落にはたいてい1・2点の出土があり、まれに上浜田遺跡のように無い遺跡もあるが、宮久保遺跡のように堅穴住居150軒で9点出土するケースもある。多めの遺跡として秦野市草山遺跡、綾瀬市宮久保遺跡、海老名市本郷遺跡があげられる。いずれも台地上の大集落で、地域の拠点集落的な遺跡である。国府域である平塚市の砂丘部でも散発的に出土例が確認されるが、土器等の出土量が膨大なのと比べ、やや少なめの印象がある。国府域の100軒あたりの出土数は1点前後で、農村部より低めである。やはり農具として使われているため、稻作・畑作の拠点集落に集中し、消費財の集中している国府域でも保有は少なく、貴重品という認識はないようである。

同じ収穫道具である鎌（一般草刈りにも用いるが）と比較して出土数はどうであろうか。また第1表をみると右列に鎌の主な集落での堅穴住居100軒あたりの出土数を提示している。集落により格差はあるが平均して6.2点の出土がある。つまり穂摘具より鎌の方が一般的であり、穂摘具の4倍ほど出土例があることになる。穂刈りより根刈りが一般的だといえるが、穂刈り→根刈りへと着実に変化するとはいがたい。後で示すように古代を通じて穂摘具の数が一定量みられるからである。

寺沢薰氏は古代の文献から奈良時代、稻穂状態で保管する頸倉・頸屋が正倉の31%を占め、意外に高率であることを示した（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1994 寺沢薰）。しかも地方にいくほど頸（稻穂）での貯蔵はさらに高率になるという。さらに平安時代末まで頸による収穫が続いているとも指摘している。穂摘具と鎌の割合が相模では1:4になると先に述べたが、それが収穫形態の比率と単純なものではないものの、頸の収穫が一定数継続されることには間違いないようである。また穂摘具が雜穀に使われたという考え方もあり、今後の検討が必要であろう。

出土のほとんどが堅穴住居出土で、他に掘立柱建物、井戸、土坑、溝の出土例などが散見される。堅穴住居では覆土に浮いた状況が大半で床面直上、かまど出土は少ない。114の平塚市中原上宿遺跡の例のように堅穴住居の床下からである例があるが、唯一の事例である。

〈形態〉

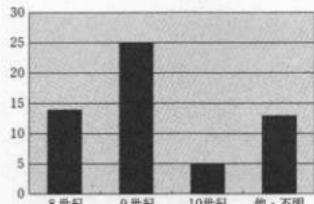
形態は通常、木部挿入式と釘止め式があるとされる（千葉県文化財センター2002 大谷弘幸）。形が残っているもので比較すると今回集成したものではほとんどが釘止め式である。

刃部は大半が細長い半月型で幅（刃部に直行した長さ）は1.5～2.3cm、長さは9～13cmの範囲に収まり、幅2cm前後、長さ10・11cm前後のものが大半と言える。わりと定型的なものである。刃部全体が軽く湾曲しているものもあるが少なめである。釘止めは両端に2カ所と決まっている。全体的に木質が遺存している例はほとんどなく、釘止め式の釘も多くの欠損している。

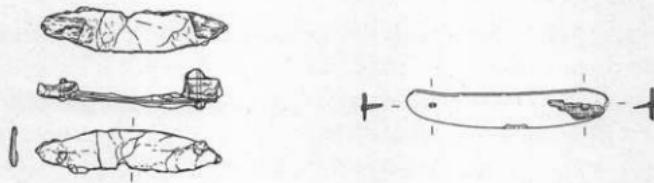
時期的に検討すると第2図のようになる。8世紀から10世紀まで継続して使われているが、9世紀にかなり多めになる。10世紀中頃から古代集落自体が少なくなるので、10世紀に急減したというは少し飛躍すぎであろう。穂摘具はかつては古代に次第に消滅すると考えられていたが、平安時代にも継続的に見られ、少なくとも律令期前後は消滅傾向は見られない。（富永樹之）

相模の主な集落	豊穴数・掘立数	豊穴100軒あたりの穂摘具数	豊穴100軒あたりの錆数
三ツ俣	豊70・掘15	2.9	1.4
天神谷戸	豊90・掘3	—	3.3
向原	豊184・掘161	1.1	7.6
草山	豊193・掘201	3.1	5.6
下大根峯	豊111・掘81	0.9	5.4
西大竹尾尻	豊268・掘115	1.5	2.6
宮ヶ瀬	豊63・掘7	—	—
鳩尾	豊169・掘117	0.6	4.1
峯ヶ谷戸	豊47・掘36	—	6.4
本郷	豊300・掘50	3	6
上浜田	豊116・掘16	—	2.6
大谷向原	豊150・掘54	0.7	14
宮久保	豊150・掘59	6	6.7
由比ヶ浜集団墓地	豊42・掘2	2.3	21
相模国府域	豊1020掘205(概数)	1	3.8
平均		1.6	6.2

第1表 相模の主な古代集落の豊穴住居100軒あたりの穂摘具数・錆数



第2図 相模の時期別の穂摘具数



第3図 釘の良好な遺存例 左 本郷中谷津遺跡 右 本郷遺跡 (前号は誤植で番号224→262)

5. まとめ

今回、奈良・平安時代プロジェクトチームは、神奈川県内における奈良・平安時代の農具を研究テーマとして設定し、2年にわたり集成・分析を行った。

考古学資料としての農具には鉄製品と木製品があるが、資料的に恵まれている鉄製農具を組上にあげた。対象とした器種は鋤鋏先、鎌、穂摘具である。平成17年度は、横浜市と川崎市を除いた、ほぼ相模国内の鉄製農具の集成・資料化を行い、339点を集成した。平成18年度は残る横浜市と川崎市分の34点と前年度の補遺分9点を加え、計382点を資料化した。このデータを基に、神奈川県内の状況について器種ごとに分析を行い、併せてこれまでの研究動向についても回顧した。

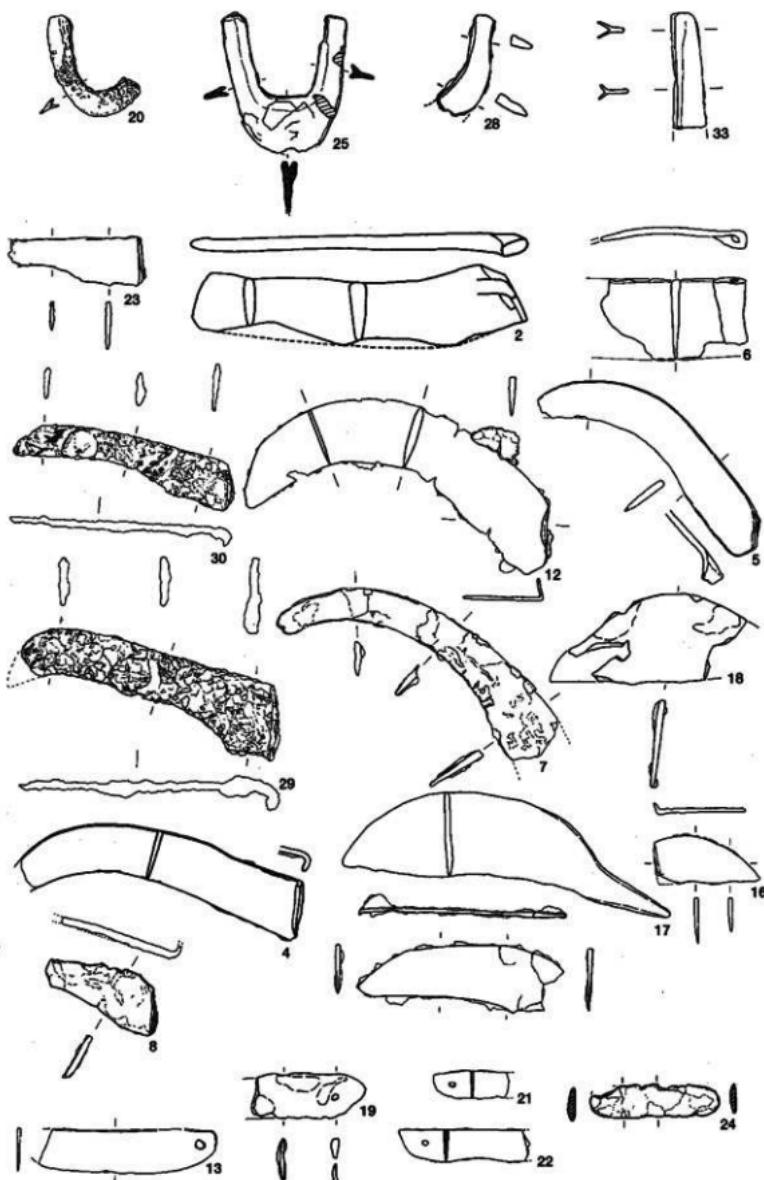
鉄製農具研究の歴史は古く1920年代から基礎研究が始まったものの、出土数の少なさ、形態変化の緩やかさ、素材のもつ特性というか宿命（遺存の偶然性、再生性、可変性）等々の要因が重なり、土器研究ほどの盛り上がりはないが、光彩を放つ研究も見受けられる。それらの論考は、形態分類、編年、農業技術の発展段階さらには所有関係に及ぶが、とりわけ所有関係の解明に、多くの労力が費やされている。しかし前述したように資料の限界性により充分な解明に至っていないのが実状である。今回の作業においても所有関係について踏み込んだ検討は出来なかったが、事例の多い鎌は、竪穴住居からの複数出土が異例ではなく、一竪穴住居に集中する様子を窺わせた。これが所有関係を示している可能性もあるが、竪穴住居の集落内における社会性、出土状況に共通性が認められるのかどうかの検証作業が求められる。そういった意味で、単位建物群の把握などの集落論の高揚、さらには土井氏が問題提起した出土状況の記録化により、農具が出土竪穴住居に帰属するかどうかの作業が必要である。

鋤鋏先、鎌、穂摘具はこれまで一括りされ同質の農具として議論してきた。しかしながら、鎌の中のある種のものについては農業以外の場でも使用されたことが推測されている。また、鋤鋏先についても農具として使用されたのはもちろんあるが、土地の造成、あるいは竪穴住居や掘立柱建物といった建物建設に際して基礎部分の掘削にも使用されたことは、本来的な機能からして充分に考えられるところである。鎌倉市今小路西遺跡の古代Ⅰ期北側掘立柱建物の154ピットから鉄製鋤先ではないが、それを装着する木質部が出土していることは、鉄製鋤鋏先が土木作業で使用されたことを意味している。鎌、鉄製鋤鋏先を農具として検討する場合は、そのところを踏まえた議論が望まれる。

一方、穂摘具については、穂類の穂刈りに用いられたとする点では、概ね理解の一致をみているようであるが、具体的に穂刈りの対象が、稻なのか、或いは粟・稗・きびといった雑穀類なのかははっきりしない。或いは両者に使用されたことも考えられる。稻の穂刈りに関しては、稻作技術の進展の度合いに絡めて論じられている。雑穀類の穂刈りに関しては、焼畑栽培の穂刈りに使用されたとの指摘も、民俗例からなされており、更なる議論が必要である。

今回の研究活動が木製農具を主に置き鉄製農具だけを対象にしたように、農具の研究は、木製、鉄製それぞれ材質別になされる嫌いがある。そのことが研究の限界性、停滞の原因になっているともいえる。今後は鉄製、木製農具を併せて両者による総合的な研究を行うことで、農業技術の発展段階、或いは農具の所有関係といった農具研究の古くて新しい研究課題を解明できる近道といえる。また、農業技術全般の発展段階に言及するには、前後の時代を含めた中での議論をしないと、なかなか見通すことは難しい。

（大上周三）



第4図 横浜・川崎市(旧武藏国)の鉄筋先・様・穂摘具

【主な引用・参考文献】

- 田中作次郎 1913「本邦の古代に於ける須岐、久波及び加良須岐の區別に就きて（一）・（二）」『考古学雑誌』4-5
 日本考古学会
- 広部達三 1919「農具論」
 後藤守一 1921「上代に於ける鋤」『考古学雑誌』11-1
 後藤守一 1924「上古の工芸」『考古学講座』24 雄山閣
 両角守一 1929「上代に於ける鋤」「人類学雑誌」44-12
 木村靖二 1932「原始日本生産史論」白鶴社
 両角守一 1933「再び上代に於ける鋤に就いて」『考古学』創刊号～日本原始農業～ 東京考古学会
 木村靖二 1936「日本農具発達史」
 鋒方貞亮 1943「本邦古代の農具に関する諸問題」『歴史学研究』109-110
 小野武夫 1942「日本農業起源論」日本評論社
 乙益重慶 1942「上代に於ける農具の意義」「日本文化」76 日本国文化協会
 古島敏雄 1947「日本農業技術史」時潮社
 宮本肇太郎 1953「本邦在来録の調査研究資料Ⅰ 錄図集」『民族学博物館研究叢書』No.15
 岡崎一敬 1956「日本における初期鉄製品の問題」『考古学雑誌』42-1
 八幡一郎 1957「日本の古代鐵」『民族学研究』21-4
 西谷真治 1959「農民の生活－鉄製農工具の発達」「世界考古学大系3日本」小学館
 白木原和美 1960「クワやスキについての研究ノート」「歴史評論」118
 原島礼二 1961「八世紀の鉄製農具をめぐる諸問題」「歴史評論」131-132 校倉書房
 原島礼二 1965「7世紀における農業經營の實質」「歴史評論」177-179-181 校倉書房
 原島礼二 1965「日本古代國家成立期の労働形態」「日本史研究」76
 鋒方貞亮 1965「農具の歴史」至文堂
 木下忠 1966「農具」「日本の考古学」（弥生時代）河出書房新社
 和島誠一・金井坂良一 1966「葦落と共同体」「日本の考古学」河出書房
 門脇徳二 1967「農業技術と當農形態」「日本の考古学」VI 河出書房新社
 都出比呂志 1967「農具鉄器化の二つの画期」「考古学研究」13-3
 原島礼二 1968「日本古代社会の基礎構造」未來社
 松本正信・加藤史郎 1968「手斧鍛考」「考古学研究」15-1
 都出比呂志 1969「審評原島礼二著「日本古代社会の基礎構造」「日本史研究」107
 八賀晋 1967「古代における水田開発」「日本史研究」96
 松本正信 1969「U字形鍬（鋤）先論」「考古学研究」15-4 考古学研究会
 宮原武夫 1970「審評原島礼二著「日本古代社会の基礎構造」「歴史学研究」364
 黒崎直 1970「木製農耕具の性格と弥生社会の動向」「考古学研究」63
 土井義夫 1971「関東地方における住居址出土の鉄製農具について」「物質文化」18
 伊達祥子 1974「律令制社会における鉄鋤の生産と流通について」「奈良史苑」20
 門脇貞二 1974「民衆史の起点」「日本民衆の歴史」1 三省堂
 森浩一 1974「シンボジウム原始古代農業の農耕をめぐって」「古代学研究」74
 寺沢知子 1974「手鐙についての報告」「古代学研究」74
 近藤義郎 1974「農具のはじまり」「世界考古学大系」2 平凡社
 町田章 1975「木工技術の展開」「古代史発掘」4 講談社
 木下正史 1975「古代脱穀具の系譜」「日本文化史学への提言」弘文堂
 横木修 1976「木製農耕具の意義」「考古学研究」88 考古学研究会
 土井義夫 1976「鉄製農工具研究ノート」「季刊どるめん」10 J I C C 出版局
 木下忠 1976「弥生時代の農耕具と民俗資料」「季刊どるめん」J I C C 出版局
 高橋一夫 1976「鉄鋤遺跡と鉄製農具」「考古学研究」22-3
 黒崎直 1976「古墳時代の農耕具」「研究論集」III 奈良国立文化財研究所
 犬沼二郎・堀尾尚志 1976「農具」法政大学出版局
 山口直樹 1978「高東地方土師時代後・晩I・晩II期における農具について」「駿台史学」45
 寺沢知子 1979「鉄製農工具断章の意義」「櫛原考古学研究所論集」第4
 町田章 1979「木器の製作と役割」「日本考古学を学ぶ」2 有斐閣
 犬沼二郎 1980「日本の古代農業革命」筑摩書房
 町田章 1981「古墳時代の農耕具の問題点」「平城宮発掘調査報告」X 奈良国立文化財研究所
 奈良国立文化財研究所 1983「木器集成図録近畿最原始編」
 木下忠 1985「日本農耕技術の起源と伝統」雄山閣
 鰐間正昭 1985「武藏国における鉄鋤の型式分類とその縦年の予察」「法政考古学」10

- 岩崎卓也 1985「鉄製鋤・鋤先の周辺」「日本史の黎明」六興出版（後、同2000『古墳時代史論（下巻）』雄山閣に再録）
- 松浦有一郎 1985「四字形金属製農具について」「日本史の黎明」六興出版
- 松井和章 1985「日本古代の鉄製鋤・鋤先」「考古学雑誌』72-3
- 松井和章 1985「鉄鋤」「弥生文化の研究」5 雄山閣
- 寺沢知子 1985「鉄製穀具」「弥生文化の研究」5 雄山閣
- 黒崎 直 1985「くわとすき」「弥生文化の研究」5 雄山閣
- 奈良国立文化財研究所 1985『木器集成図録近畿古代編』
- 甘粕 健 1986「経論－生産力発展の諸段階」「岩波講座日本考古学3 生産と流通」岩波書店
- 寺沢 黒 1986「稻作技術と弥生の農業」「日本の古代」4 中央公論社
- 山田昌久 1986「くわとすきの来た道」「新保連跡」I 群馬県教育委員会
- 金子裕之 1986「木工生産」「日本歴史考古学を学ぶ」(下) 有斐閣
- 広地利明 1987「稈の系譜と稻作」「稻のアジア史」1 小学館
- 潮田鉄雄 1987「田下駄の変遷」「物質文化 物質文化研究会
- 黒崎 直 1988「西日本に於ける弥生時代農具の変遷と展開」「日本における稻作農耕の起源と展開」日本考古学協会
- 中田 英 1989「[左隸]について」「國學院大學考古學資料館紀要」5 國學院大學考古學資料館
- 都出比呂志 1989「日本農耕社会の成立過程」岩波書店
- 松崎元衡 1990「丘陵地における古代鉄器生産の諸問題－多摩ニュータウン遺跡群の検討－」「東京都埋蔵文化財センター 研究論集」Ⅳ
- 松崎元衡 1990「多摩丘陵の鉄製鋤と鉄器」「武士の発生馬と鉄」東京都埋蔵文化財センター
- 河野通明 1990「馬銚の伝来－古墳時代の日本と江南」「列島の文化史」日本エディタースクール出版部
- 松村恵司 1991「古代聚落と鉄器所有」「日本村落史講座4 政治I 原始・古代・中世」雄山閣
- 上原真人 1991「農具の変遷一鍬と鎌－」「季刊考古学」第37号 雄山閣
- 黒崎 直 1991「農具」「古墳時代の研究」4 雄山閣
- 古瀬清秀 1991「農工具」「古墳時代の研究」8 雄山閣
- 中井 純 1991「木製農耕具－畜耕關係を中心に－」「考古学ジャーナル」335 ニューサイエンス社
- 木下正史 1993「耕地と農耕具」「新版古代の日本1 0古代資料研究の方法」角川書店
- 坂塚武司 1993「古墳時代から古代の武藏・相模国を中心とした工具・農具の変遷」「法政考古学」第20集記念論文集 法政考古学会
- 中山正典 1994「静岡県における弥生時代・古墳時代の木製農耕具」「滋名遺跡」(遺物編 I) 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 樋口 昇 1994「耕作のための道具－ナスピ形農耕具を中心に－」「季刊考古学」第47号 雄山閣
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994「古代における農具の変遷－稻作技術史を農具から見る－」
- 上原真人「西日本の農具の変遷」・山田昌久「農具の形態と機能－文献資料との接点－」
- 中山正典「農具の形態と機能－民具資料との接点－」・樋上 昇「木製農耕具の地域色－ナスピ型鍬を中心にして－」
- 松井和章「鉄製農具の変遷」・寺沢 黒「種刈りから根刈りへ」
- 河野通明「牛馬耕の導入と展開－馬鍬・犁・首木・駒－」・谷口 雄「神奈川県の概要」
- 古庄浩明 1994「古代に於ける鉄製農工具の所有形態－6世紀から10世紀の南関東を中心として－」「考古学雑誌」第79巻第3号
- 河野通明 1994「日本農耕具史の基礎的研究」日本史研究叢刊4 和泉書院
- 黒崎 直 1995「農耕具研究の諸課題」「農業考古学－考古学研究会40周年記念論文集」考古学研究会
- 黒崎 直 1996「古代の農具」「日本の美術」No357 至文堂
- 大谷弘幸 1996「徳積み具の変遷と稻の種首刈り」「研究連結誌」46 千葉県文化財センター
- 大村 直 1997「鉄製農耕具の組成化」「史館」28 史館同人
- 大村 直 1997「南関東地方における鉄器の普及過程」「東日本における鉄器文化の受容と展開」
- 第4回鉄器文化研究集会発表要旨集
- 奥野義雄 1997「古代の農耕にみる労働手段の農耕具とその所有をめぐって」「文化時学報」第15集奈良大学文化財学科
- 樋上 昇 2000「木製農耕具」ははたして「農耕具」なのか?「考古学研究」47-3
- 廣瀬英典 2001「古代木製農具の変遷に関する一考察」「MieHistory」三重歴史文化研究会
- 千葉県文化財センター 2002「房総における原始古代の農耕」「研究紀要」13

神奈川県内の「やぐら」集成（5）

—「やぐら」出土遺物の分析—

中世研究プロジェクトチーム

はじめに

本プロジェクトでは一昨年に「やぐら」から出土した石塔類のデータ集成を行い、昨年は「やぐら」から出土した土器・陶磁器類のデータ集成を行った。本年からはその集成に基づき、これら出土遺物の分析を行うこととする。「やぐら」から出土する遺物は多岐にわたるが、分析はまず土器・陶磁器類から始め、金属製品や木製品、石塔類と進めていきたい。

これまでの集成同様、分析に当たっては原則として、発掘調査が行われ、かつ報告書が公刊されている遺跡を対象とする。ゆえに、以下に記載する出土傾向や数値はあくまでも現時点でのものであることをご了解願いたい。

土器・陶磁器類は貿易陶磁器（青磁・白磁・青白磁・その他）、国産陶器（瀬戸・常滑・美濃・備前・山茶碗系陶器・瓦質器）、土器（かわらけ、かわらけ質陶器）など、おおまかな分類に基づいて出土様相の考察を進める。また、蔵骨器としての使用など、種別ごとに見ていてはとらえられない出土様相の分析も適宜加えてみる。

なお、昨年の集成に基づき、土器・陶磁器類が出土した遺跡数は76、出土遺構数は247であり、この数値を基準とする。しかし「出土遺構」にはやぐらの前面や区画遺構、やぐら内外の各遺構面をも含んでいる。このため、出土遺構数がすなわち土器・陶磁器類が出土した「やぐら」の数とはなっていない。（鈴木）

船載陶磁器・国産陶磁器

船載陶磁器、国産陶磁器が出土するやぐらは58遺跡172遺構である。遺物総点数は船載陶磁器179点（6%）、国産陶磁器2895点（94%）となる（第1～3表）。以下船載陶磁器、国産陶磁器の順に器種構成を検討する。
船載陶磁器〔第1・2表〕

船載陶磁器が出土するのは26遺跡56遺構であり、全遺構数の約23%にあたる。出土点数179点の内訳は青磁94点（52%）、白磁56点（32%）、青白磁19点（11%）、その他10点（6%）である。

青磁

青磁が出土するのは21遺跡38遺構であり、全遺構数の15%である。器種としては碗・杯・皿・鉢・盤・壺・壺・瓶・香炉などが出土している。最も多い器種は碗で34点、以下皿27点、壺6点の順に続く。碗は蓮弁文碗が最も多く16点で、この他僅かではあるが鎌倉弁文碗、雷帯文碗、束口碗なども出土している。皿は27点で、僅かではあるが蓮弁文皿、棱花皿、折縁皿なども出土している。壺は6点中3点が酒会壺、2点がその蓋であり、酒会壺が非常に多いといえる。この他の遺物としては、仏華瓶、香炉、硯滴、人物像燭台などが出土している。

白磁

白磁が出土する遺跡は17遺跡26遺構であり、全遺構数の約11%となる。器種としては碗・杯・皿・鉢・

壺・瓶・水注などが出土している。最も多いものは皿で32点、次いで碗・壺が各7点となる。皿32点中5点が口元皿となる。壺は7点の出土が見られるが、その内6点が四耳壺である。この他八角壺・仏華瓶・水注・入子などが出土している。

青白磁

青白磁が出土する遺跡は9遺跡15遺構であり、全遺構数の6%にあたる。器種としては碗・皿・壺・瓶・水注・香炉などが出土している。最も多い器種は瓶で7点、次いで皿4点と続く。瓶は7点中6点が梅瓶となり、青白磁19点中6点と約1/3を占める。残りの1点は仏華瓶となる。

その他

器種別では壺4点、瓶2点、その他（花盆・器台・壺）が4点となる。鉄軸・黒軸・褐軸製品が出土し、磁州窯鉄軸瓶子、均窯鉄軸花盆なども含まれる。

舶載陶磁器は青磁が最も多く約半数を占め、また白磁・青白磁も出土している。各磁器で器種構成の差が見られ、青磁は碗・白磁は皿・青白磁は瓶が最も多い。青磁・白磁ではやはり碗・皿が多くやぐらでも他の中世遺跡と同様に碗・皿といった食器が主体となっているようである。しかし、青磁酒壺・白磁四耳壺・青白磁梅瓶・青磁・白磁仏華瓶・白磁・青白磁水注といった壺・瓶類が一定量出土していることは注目される。また鉢・香炉・燭台・硯滴といった器種も少量ながら出土している点も特筆されよう。舶載陶磁器の出土地域を見てみると、その全てが鎌倉四境七口及びその隣接地域に限られるといった特徴が見られる。

国産陶磁器〔第1・3表〕

国産陶磁器の出土は58遺跡169遺構からであり、全遺構数の68%となる。2895点の内訳は瀬戸273点（9%）、常滑2418点（85%）、渥美29点（1%）、備前13点（0.4%）、山茶碗10点（0.3%）、瓦質器140点（5%）その他12点（0.4%）であり、常滑が8割5分を占める。

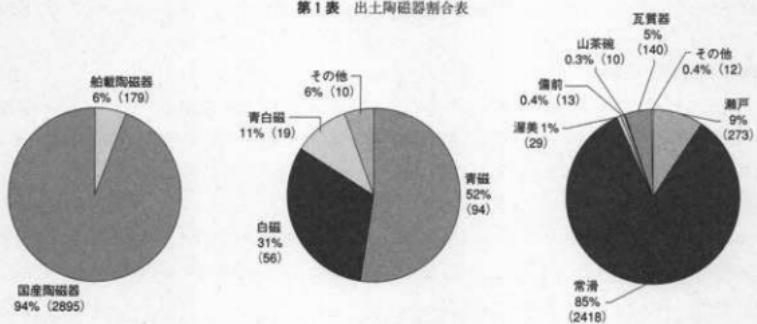
瀬戸窯

瀬戸が出土する遺跡は43遺跡110遺構であり、全遺構数の45%となる。遺物の器種は碗・皿・鉢・盤・壺・壺・瓶・水注・香炉・入子などがあり、最も多い器種は皿で88点、次いで鉢41点、碗35点、瓶31点、壺26点となる。碗は天目茶碗が15点と碗の43%を占める。次いで平碗が10点、また僅かだが灰釉端反碗も出土している。皿では折縁皿が最も多く25点、次いで鉢皿が22点である。10点前後の器種としては直縁大皿・折縁深皿などが見られる。僅かではあるが綠釉小皿なども出土している。鉢は灰釉鉢が12点と多く、僅かだが鐵釉鉢も見られる。また擂鉢も15点と多く出土している。この他には折縁鉢・小鉢・片口鉢などが出土し、僅かだが碗形鉢も出土している。壺は壺・小壺・広口壺・四耳壺などが見られ、灰釉製品のはか僅かだが鐵釉製品も見られる。また1点ではあるが灰釉三耳壺・広口有耳壺も出土している。瓶としたものには瓶子・仏華瓶を含め、瓶子15点、仏華瓶13点、瓶3点となる。瓶子は灰釉製品が最も多く、他少數だが鐵釉・柿釉製品が見られる。また灰釉割花文瓶子・灰釉菊花文瓶子・灰釉巴文瓶子が僅かだが出土している。仏華瓶は鐵釉製品が6点と最も多い。水注・香炉・入子は各6点、8点、5点となり、香炉は筒形香炉・袴腰形香炉も見られる。その他では筒形容器・茶入れ・合子・柄付片口・行平・蓋・燭台などが各1~3点出土している。常滑窯

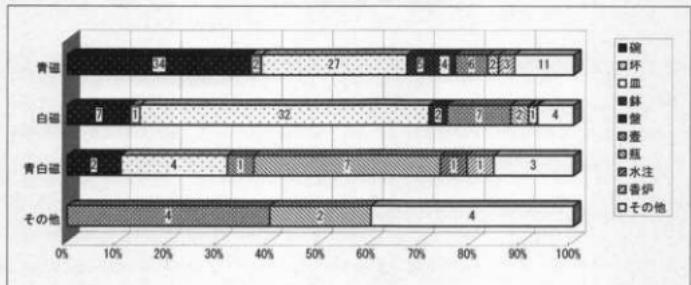
常滑が出土する遺跡は49遺跡120遺構で、全遺構の49%にあたる。器種構成としては鉢・壺・壺などがあり、そのうち壺が2198点で91%と大部分を占める。残りは鉢90点、壺129点、その他1点となる。鉢は片口

神奈川県内の「やぐら」集成 (5)

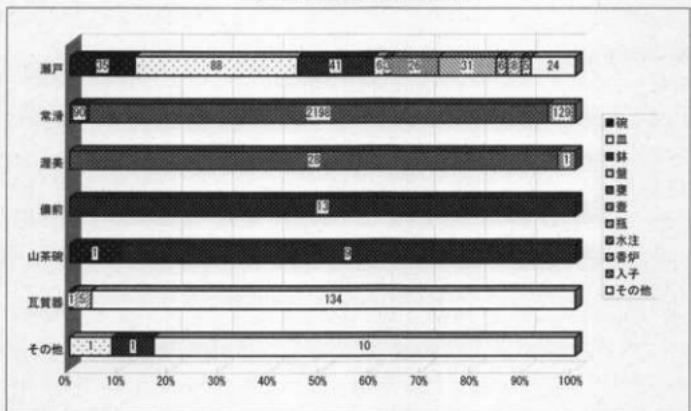
第1表 出土陶器割合表



第2表 船載陶磁器 器種別割合表



第3表 国産陶磁器 器種別割合表



鉢が66点と7割強を占め、他こね鉢・擂鉢が少数出土している。壺は少數ではあるが小形壺、広口壺、玉縁口縁壺、鶴口壺が出土している。

渥美窯、備前窯、山茶碗

渥美が出土する遺跡は3遺跡3遺構、備前が出土する遺跡は8遺跡11遺構、山茶碗が出土する遺構は10遺跡11遺構であり、全体の遺構の1~5%に過ぎない。渥美的器種は壺・壺の出土があり、29点中28点が壺である。備前は13点すべてが擂鉢である。山茶碗は壺1点、鉢9点となり、鉢は7点が片口鉢である。

瓦質器

瓦質器は29遺跡55遺構から出土し、全遺構の22%にあたる。瓦質器140点のうち55点は火鉢であり最も多い器種である。次いで土釜7点、手焼り7点、香炉5点の順となる。他少數ではあるが花瓶、土鍋、土風呂、灯明皿・台、燭台脚、三宝、獸足などが出土している。

その他

その他としては龜山窯製品が3点、志野鉄絵皿、東播系片口鉢が各1点出土している。また伊勢系土鍋、羽釜などの土製鍋・釜が7点出土している。

国産陶磁器の85%は常滑窯の製品となった。次いで瀬戸9%、瓦質器5%となり瓦質器の割合が多いといえよう。瀬戸は器種が非常に豊富である。出土量は壺・皿・鉢といった食膳具・調理具が6割弱を占めるものの、壺・瓶・水注などの貯蔵具も一定量出土している。また仏華瓶、香炉、燭台などの仏供具も少量ながら出土し、貯蔵具・仏供具などが4割強という多さは注目すべき点である。常滑は主体が壺であるといった状況は他の中世遺構と同様といえるであろう。渥美、備前、山茶碗も少量ながら出土している。瓦質器の主体は火鉢であるが、土釜・手焼り・香炉をはじめ器種が豊富といえる。瀬戸の仏供具とともにやぐらの性質を考える上で重要といえるだろう。国産陶磁器は遺構の68%から出土しているが、大部分は前述の鎌倉及びその隣接地域に含まれる。舶載陶磁器の状況を加えると、舶載・国産陶磁器は鎌倉及びその隣接地域のやぐらからの出土が大部分といえる状況である。

出土事例 新善光寺跡内やぐら（原・福田1988、長谷川・大坂1999）

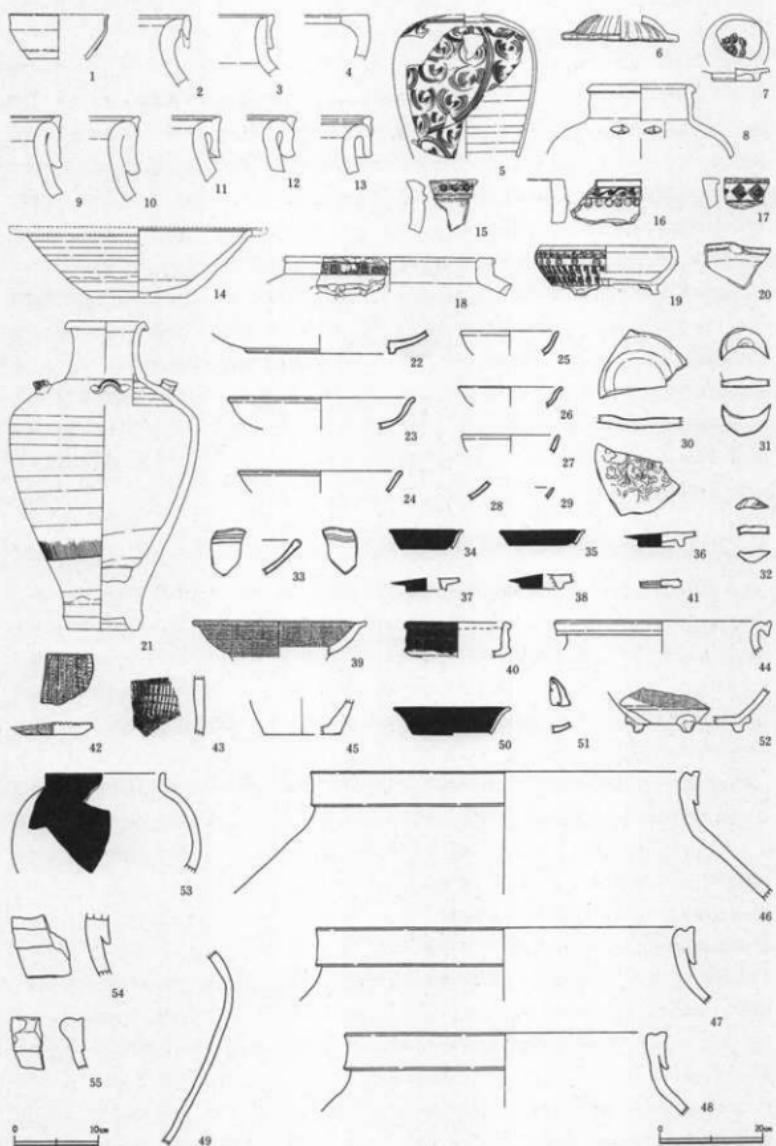
出土事例として比較的出土遺物豊富な新善光寺跡内やぐらの例を見てみたい。

1号やぐら：玄室部・羨道部からなり、玄室部からはやぐら廃絶後とされる土坑墓7基、床面から4条の溝が検出されている。遺物は上層遺構に伴う近世遺物以外出土していない。

2号やぐら（第1図1~18）：玄室部・羨道部・前室部・前庭部からなり、玄室部上層からは土坑墓、床面からは周溝が検出された。羨道部からは屏施設と思われる柱穴、前室部・前庭部床面には踏石が検出されている。遺物は玄室部から瀬戸天目茶碗、常滑壺、瓦質器、かわらけが、前庭部からは青白磁梅瓶、青磁酒会壺蓋、青磁碗、黒釉壺、瀬戸折縁皿、常滑壺、瓦質手焼り・土風呂、かわらけ、瓦が出土している。遺物から14世紀後葉から15世紀前葉の年代が考えられている。

第1号やぐら（第1図22~49）：玄室の壁面から龕状の施設、床面から後世とも考えられるピットが9基、溝状遺構が検出された。遺物は青磁折縁皿・蓮弁文碗・皿・盤、白磁碗・皿・青白磁皿、瀬戸灰釉折縁深皿・灰釉平碗・灰釉卸皿・鉄釉香炉、常滑壺・壺・かわらけ、石塔類が出土している。遺物から13世紀中頃から15世紀中頃が考えられている。

第2号やぐら（第1図50~55）：玄室の壁面から龕状の掘り込み、床面から周溝が検出された。遺物は白



第1図 新善光寺跡内やぐら出土陶磁器 [1~45・50~55 S=1/6、46~49 S=1/8]

磁碗、青白磁皿、瀬戸灰釉折縁深皿・鉄釉広口壺、常滑壺、かわらけ、石塔類が出土している。遺物から14世紀前半・15世紀前半が考えられている。

コ字区画造構（第1図19～21）：1号やぐらと2号やぐらの中央に位置し、崖面をコ字状に削り込んで造成された区画で、上・中・下段3時期に分けられる造構である。上段造構からは瓦質香炉、かわらけ、石塔類が、中段造構からはかわらけが出土している。下段造構からは火葬墓が2基、布掘り状の横状造構が検出された。このうち火葬墓1基は写経石敷きで玉垣状の造構と白磁四耳壺を伴う納骨穴が確認された。下段ではこの白磁四耳壺以外に常滑片口鉢、かわらけ、瓦、石塔類が出土している。遺物から中段が14世紀後葉、下段が14世紀前半から中葉が考えられている。

調査者はコ字区画造構の火葬墓の被葬者はそれ相応の経済的基盤と身分をもつ者とし、隣接するやぐらも新善光寺に関連する経済的、社会的に高い人物に間わりがあると推測している。遺物を見ると、船載陶磁器の碗・皿のほか青磁酒会壺蓋、青白磁梅瓶、黒釉壺といった貯蔵具、国産陶磁器の貯蔵具、仏供具など豊富な器種が出土しており、調査者の推測を裏付けるものであろう。コ字区画造構、4基のやぐらからの出土遺物は14世紀中頃から15世紀前半のものが主体となっている。コ字区画造構がやや先行する可能性はあるが、コ字区画造構とやぐらは主と従の関係である（田代2004）ということを考慮に入れると、おそらくほぼ同時期に造営され使用されたのではないか。やぐらの造営・使用を考えるにあたり、やぐら及び周辺の造構を含めた旧境内を意識して考える必要があるのだろう。

(松葉)

土器（かわらけ）

土器・陶磁器類が出土した247造構中、かわらけが出土した造構は224を数える。割合にして90%強であり、土器・陶磁器が出土するやぐらではほぼ例外なくかわらけが出土していると言って良い。また、かわらけのみが出土した造構数は55造構を数え、土器・陶磁器が出土した造構のうち22%を占めている。地域的な偏りも見られない。逆に、かわらけが出土せず、その他の陶磁器類のみが出土した造構は22造構（9%）に止まる。つまり、後後に物置等に利用されて内部が一掃されることなく、中世以来の堆積土が残ったやぐらでは、かわらけがほぼ普遍的に出土していることになる。

出土状況については様々であり、小破片が散乱して出土する場合や、完形に近いものがある程度まとまって出土する場合がある。また出土する位置は、やぐらの床面に散乱して出土する場合と、やぐら内に掘られたピット、土坑などから出土する場合がある。過去の調査例におけるすべての出土状況を網羅することは不可能だが、以下に特徴的な出土様態を示す例を挙げる。

a) 年代幅がないかわらけが多量に出土する例

1) 杉本城跡内やぐら（鎌倉市二階堂）・2号竈（椎1991）

玄室床面に堆積する木炭層上から、実測可能個体411点が出土している。木炭層の下には玉砂利層があり、かわらけは床面から20～40cm浮いて出土している。出土層位は限定されている。完形および完形に近いものが多く、また、かわらけ以外の遺物がほとんど見られないのも特徴である。年代は14世紀の中葉～後半を主体としている。

このように時期が限定される完形のかわらけが大量に出土する例はあまりない。完形が多いことから、前面で一度廃棄されたものが二次的に玄室内にもたらされたとも考え難い。出土状況は「かわらけ溜まり」状であり、やぐらでの継続的な供養行為による結果というより、一括廃棄に近い。玄室内で一度に使用された

ものと考えられるが、やぐらの前面空間で酒宴などに伴って使用されたかわらけが、やぐら内に廃棄された可能性も否定はできない。かわらけの使用が葬送・供養など、なんらかの宗教的な行為と結びついている可能性は高いと思われるが、かわらけを一括廃棄した時のやぐらの性格が異なれば、必ずしも宗教的な行為と限定することはできないだろう。

西御門東やぐら群の9号やぐらでも似たような出土例があるが、こちらは天井を失ったやぐらが埋没する過程で、かわらけ以外の遺物も含む大量の遺物が廃棄されている（鈴木他2005）。やぐらがやぐらとしての機能を失った後の遺物の堆積であり、杉本城例とは性格が異なるものと考えられる。

2) 山王堂東谷やぐら群（鎌倉市大町三丁目）・1号やぐら（池田・宍戸2001）

647点のかわらけが瀬戸灰釉四耳壺、仏華瓶、絆石などと併せて出土している。床面には切石基壇があり、その上に玉砂利（絆石含む）層が見られる。かわらけは玄室および前庭の覆土上層から基壇面まで、途切れることなく出土している。小型のかわらけが圧倒的に多いのが特徴であり、年代は13世紀末～14世紀前半に比定される。

本例の場合、かわらけ自体の出土状況は杉本城例に似るが、焼骨や骨臓器、絆石など、明らかに葬送・供養に伴う遺物が多く出土しており、かわらけもそれらの行為に伴っていると考えてよい。床面に切石基壇があることから、やぐらは納骨堂もしくは仏堂といった性格を持っていたと考えられる。また、周辺の地形ややぐらの分布から見て、一帯は寺院であり、その中でやぐらが機能していた可能性が高い。現時点では中世前期まで遡り得る調査例は数が少なく、あくまで可能性だが、鎌倉時代末期～南北朝前期のやぐらのあり方、性格を現しているとも考えられる。

b) 年代幅のあるかわらけが多量に出土する例

3) 新善光寺跡内やぐら（鎌倉市材木座）・コ字区画造構（原・福田他1988）

2基のやぐらに挟まれた「コ字区画造構」から計63点（図示個体数）のかわらけが出土している。いわゆるやぐらとは形態をやや異なる造構であるが、斜面を方形に削り込んだやぐらと似た構造を持つ。堆積土の量に対し、かわらけ自体の出土量はそれほど多くはないが、下段・中段・上段という造構内のそれぞれの造構面において、他の陶磁器類と併せて継続的にかわらけが出土している。年代は14世紀後半から15世紀、一部16世紀初頭までと考えられる。

4) 天王寺跡やぐら（鎌倉市二階堂）・1号窟（田代他1996）

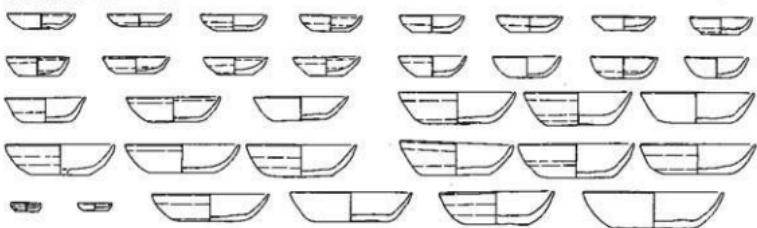
玄室内の堆積土上層から下層にかけて、計295点が出土している。全体的に破片での出土が多いが、床面のピットから出土した46点は完形率が高い。「廿」「九」「十一」と墨書きされたかわらけも出土している。上層は15～16世紀の製品も見られるが、ピットなどから出土したものは14世紀後半代と考えられる。

5) 紅葉ヶ谷南やぐら群（鎌倉市二階堂）・1号やぐら（鈴木2000a）

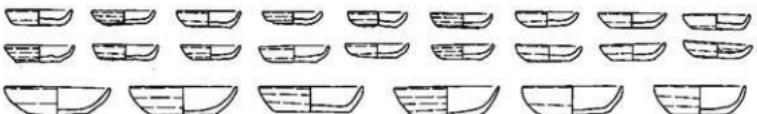
やぐらをほぼ埋め尽くした堆積土中から、大量の人骨と併せて765点のかわらけが出土している。床面近くから13世紀末頃、上層では15世紀後半代のかわらけが出土している。上層からは武藏形と呼ばれる、体部が屈曲する特徴的な形態を持つかわらけが出土している。

これらの例は、厚い覆土中から多量のかわらけが出土している。a類ほど一括性ではなく、また、完形率も低いのが特徴である。一度に用いられるかわらけの数量は必ずしも多くはないと思われ、やぐらでの葬送・供養行為が、構築当初の14世紀頃から、機能が失われる15・16世紀まで、ある程度継続的に行われた結果と考えられる。しかし、中にはかわらけ以外の生活遺物が出土する例もあり、必ずしもすべてが、やぐら内で

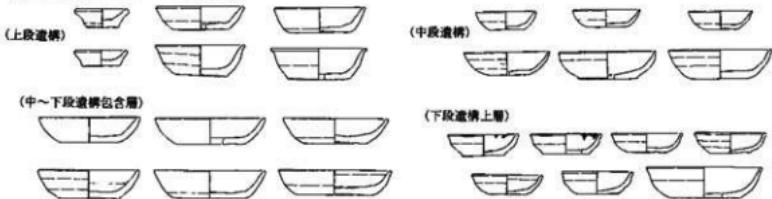
杉本城跡内やぐら・2号窟



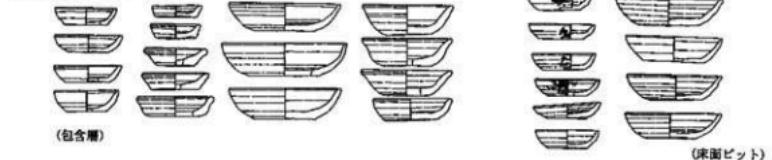
山王堂東谷やぐら群・1号やぐら



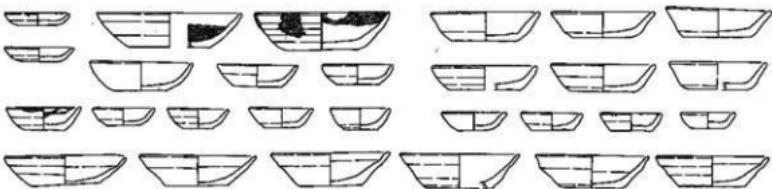
新善光寺跡内やぐら・コ字区画造構



天王寺跡内やぐら・1号窟



紅葉ヶ谷南やぐら群・1号やぐら



第2図 やぐら内出土かわらけ (1) [S=1/6]

の行為によってもたらされたとも言えない。やぐら周辺の環境、特に前面の性格の変遷も視野に入れ、やぐら内の遺物の様態を考える必要がある。

c) 15~16世紀代のかわらけがまとまって出土する例

6) 笹目遺跡内やぐら（鎌倉市笹目町）・2号窟（原・田代1990）

奥壁側の下層堆積土面上に設置された五輪塔の周辺、およびその下層、床面上から106点（図示個体数）のかわらけが出土している。床面から浮いた状況で、年代は16世紀代と考えられている。

7) 六浦大道やぐら群（横浜市金沢区大道）・1号やぐら（鹿島・鈴木1997）

98点（図示個体）のかわらけが出土している。2次集積された多数の石塔類と共に出土しており、かわらけも本来このやぐらに伴わない可能性がある。みな器壁がやや厚く、直線的に体部が立ち上がり、口縁が外反するタイプのかわらけが大半である。しかし、体部が直立傾向のものと、外に広がる傾向のものがあり、年代の幅、生産者のばらつきがあると推定されている。

六浦大道例は二次堆積なので注意が必要だが、戦国期の、16世紀も末に近い時期のかわらけがまとまって出土する事例である。両者とも石塔を伴っているが、石塔自体はかわらけの年代より古い様相を持つ。しかし、石塔と同年代のかわらけはあまり出土していない。中世のある時期から墓地、葬送の地であった場所が、近世も近くなった時に再び供養の場となった例と考えられる。人骨が伴う例もあり、中にはやぐらが構築された中世よりも、供養の場として強く意識され直された例ととらえることもできよう。

d) 納骨穴に伴う例

8) 上行寺東やぐら群（横浜市金沢区瀬戸）・22号やぐら（小林2002）

中世の大墓地として知られる遺跡であるが、かわらけ自体の出土量はそれほど多くはない。全体ではもちろん多量はあるが、個々のやぐらを見ると、最も多いのが阿弥陀仏のレリーフを持つ22号やぐらである。48点（図示個体数）のかわらけが出土しており、このうち34点が、阿弥陀仏の前面に掘られた納骨穴から出土している。

9) 長坂宮ノ前やぐら群（横須賀市長坂）・第1号やぐら（宮坂・鈴木2003）

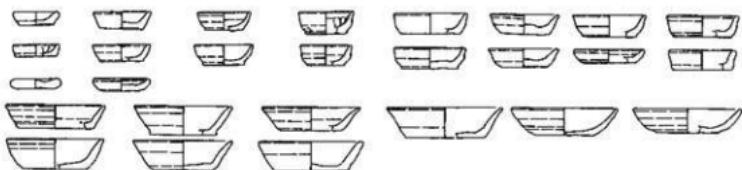
横方向に長い特徴的な形態を持つやぐら床面に穿たれたピットから、16世紀代のかわらけが3点、合わせて口となって出土している。中には火葬骨が納められており、現在まで唯一の、かわらけを納骨器としたことが明らかな出土例である。

10) 大倉幕府北やぐら群（鎌倉市西御門二丁目）・5号やぐら（鈴木他2004）

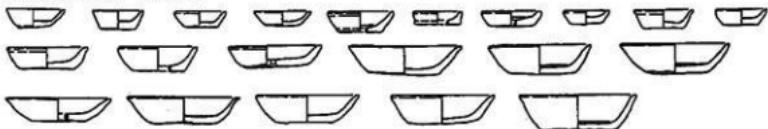
横穴墓を改変した前庭部を、4基（2~5号）のやぐらが取り囲み、この全体から235点のかわらけが出土している。このうち、盒状の小規模な4号やぐら床面に穿たれたピットから、小型のかわらけ複数と焼骨片が出土した。長坂宮ノ前やぐら群の例ほど確定的な出土状況ではないが、かわらけを納骨器として用いたものと推定される。また、やぐらが面する前庭には焼繭、炭化物、焼骨が見られる方形土坑が穿たれている。ここからも同時期のかわらけが出土しており、遺体を茶毬に付し、その遺骨の一部をすぐ側のやぐらに納めたと推定される。

以上の例は明らかに葬送に伴うかわらけの使用例ととらえうる。上行寺東例は複数回の埋葬とも考えられるが、後二例はある特定個人の葬送のために使用されたものと考えられる。しかし、このような出土例はごくわずかであり、調査されたやぐらから考え得るかわらけの使用形態としては、例外的な数に止まる。また、土坑やピットなどから完形に近いかわらけがまとまって出土するものの、人骨が伴わない例もある（鈴木2

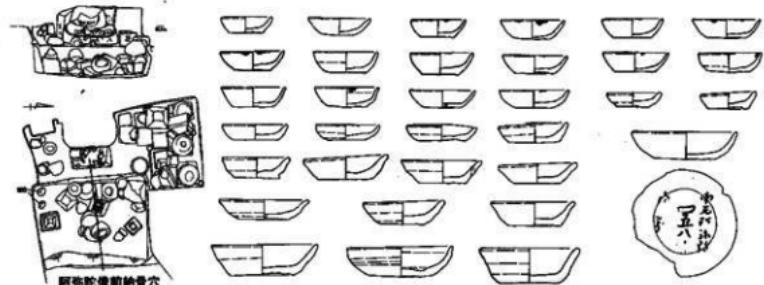
笠目造跡内やぐら・2号窓



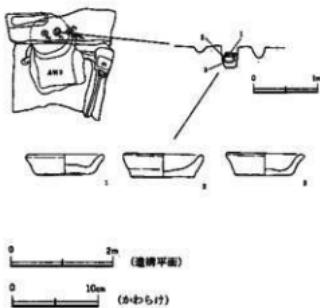
六浦大道やぐら群・1号やぐら



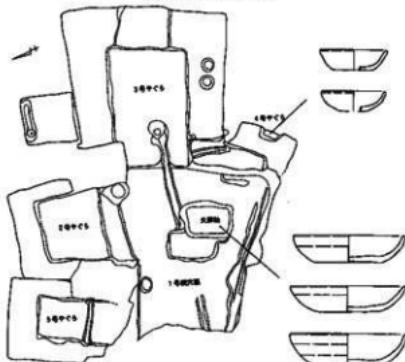
上行寺東やぐら群・22号やぐら



長板宮ノ前やぐら群・第1号やぐら



大倉墓府北やぐら群



第3図 やぐら内出土かわらけ (2) [S=1/6・1/80・1/100]

000bなど）。何らかの儀礼的な使用が推測されるが、その詳細は今後の課題と言えよう。

特徴的なごくわずかな例を挙げたが、やぐら内から出土するかわらけの様態は一様ではない。やぐら内外での葬送・供養行為に伴って使用されたものも多いと考えられるが、調査の成果としてそれが明らかになつた例はごく少ない。ある程度用途を推定できるのはd類としたものであるが、これなどはかわらけと人骨、それらを納める掘り込みなどがあつて初めて断定できるものである。やぐらの内部から出土するかわらけは、特殊な例をのぞきやぐら内での行為に伴つて使用された可能性が高いと考えられるが、その行為を「葬送儀礼に伴う」と単純に一括りにできるほど、明確な出土様態を示すものはまだまだ限られているのが現状である。例えばかわらけのみがあり、人骨を伴わない場合をどうとらえるか。また、焼土、炭化物がある場合とない場合はどういう違いがあるのか。出土状況をより細かく分析し、やぐらから出土するかわらけの意味を明らかにする必要があつる。また、やぐらだけではなく、周辺の状況にまで視野を広げてやぐらの性格や機能を考え直す必要がある。その上で、かわらけの使用の状況や性格も改めて問いかねばならないだろう。

（鈴木）

藏骨器

やぐら内から発見される人骨の多くが、石塔内や玄室の床面に穿たれた納骨穴から発見されている。また、納骨穴から発見された物も多くの場合藏骨器に納められている場合が多い。「舶載陶磁器・国産陶磁器」で述べたように、やぐら内からは多量の瀬戸窯や常滑窯の製品が出土しており、藏骨器として使用されたと考えられる物が多い。しかし、大部分の遺物は破片で実際に藏骨器として使用されたか不明確の物が多い。以下、確実に藏骨器として使用された遺物について見てみたい。

藏骨器が発見されているやぐらはの代表的な物は以下のやぐらがあげられる。

1) 多宝律寺遺跡：1号やぐらからは、奥壁に接して設けられた壇に穿たれた6穴の納骨穴のうち第2納骨穴上で瀬戸窯黒釉瓶が、壇上に置かれた五輪塔の前から瀬戸窯灰釉合子の計2点が発見された。4号やぐらからは、五輪塔下の納骨穴内より山茶碗で蓋をされた舶載黒褐釉壺、床面中央に穿たれた納骨穴内から常滑窯の計2点が発見された。5号やぐらからは、奥壁前に置かれた五輪塔下の納骨穴内より常滑窯壺が5点発見された。6号やぐらからは、左側壁に穿たれた龜状施設内に置かれた五輪塔直下の納骨穴から瀬戸窯瓶子が5点発見された。10号やぐらからは、玄室奥壁中央付近の納骨穴から河原石で蓋をされた舶載黒褐釉壺が、左側壁寄りに置かれた五輪塔下の納骨穴内より常滑窯壺が2点が、玄室入り口近くの基壇の下より瀬戸窯黒釉瓶子の計4点発見された。11号やぐらからは、奥壁前に置かれた五輪塔下の納骨穴内より常滑窯壺が、奥壁左隅から瀬戸窯小壺、玄室床面右隅の納骨穴から常滑窯が計3点発見された。19号やぐらの玄室床面に穿たれた納骨穴内から古瀬戸灰釉四耳壺が1点が発見された。（赤星直忠1959・学習院大学総合会史学部1966・多宝律寺遺跡発掘調査団1976・1977）

2) 新善光寺内やぐら：「コ」字形区画遺構の方形に積まれた玉石の下部の岩盤面に穿たれた納骨穴内から白磁四耳壺が1点が発見された。（新善光寺跡内やぐら調査団1988）

3) 佐助ヶ谷遺跡内やぐら：2号窟の羨道部龜状施設内から白磁水柱、瀬戸四耳壺、常滑窯壺・壺が7点が発見された。（総1991a）

4) 松谷寺跡内やぐら：1号窟床面に穿たれた4穴の納骨穴のうちの1号納骨穴内から常滑窯玉縁口縁壺が1点が発見された。また、11号窟玄室の中央に穿たれた納骨穴内からは、常滑窯玉縁口縁壺が1点が発見

された。(田代他1998)

5) 潤戸町やぐら群：第5号やぐらの玄室床面の奥壁近くに穿たれている第1号土坑内から常滑窯大壺が1点が発見された。(長谷川2000)

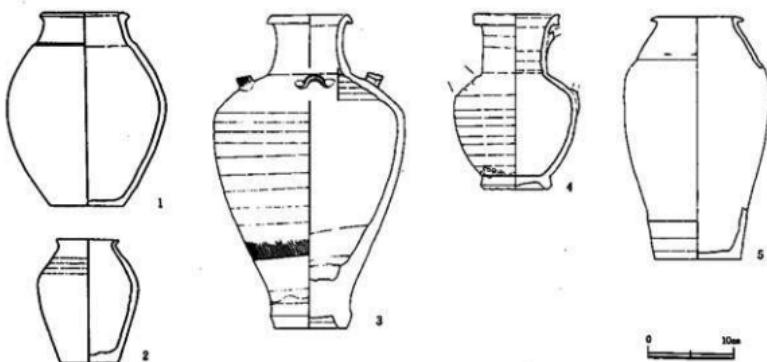
6) 弁ヶ谷東やぐら群：第1号やぐらの玄室床面のほぼ中央の奥寄りの埋葬遺構から、常滑窯大壺が1点が発見された。(鈴木2000c)

7) 山王堂東谷やぐら群：1号やぐら玄室の中央に作られた切石を長方形に配列した、基壇右奥隅から瀬戸灰釉四耳壺が1点が発見された。(池田2001)

8) 上行寺東やぐら群遺跡：上段の遺構群では、19号やぐらの奥龕の覆土中から、古瀬戸灰釉巴文瓶子が1点が発見された。20号やぐらからは、西側側壁に接して床面に置かれた、口縁部を欠損した常滑窯玉縁口縁壺が1点が発見された。22号やぐらからは、阿弥陀如来座像前の納骨穴から古瀬戸灰釉割花文瓶子の肩部破片と常滑窯玉縁口縁壺、玄室上壇右側副室南西隅から常滑窯玉縁口縁壺、副室北側五輪塔の間から常滑窯玉縁口縁壺が計4点が発見された。24号やぐらからは、底部を欠損した常滑窯玉縁口縁壺が1点が発見された。中段の遺構群では、17号やぐらから、玄室床面に並列された五輪塔の間から古瀬戸灰釉三耳壺が1点が発見された。43号やぐらからは、玄室中央やや北寄りの火葬骨中から古瀬戸灰釉水注が1点、奥壁中央やや西寄りの床面に穿たれた納骨穴から古瀬戸灰釉菊花文瓶子1点の計2点が発見された。下段の遺構では、34号やぐらからは、玄室床面中央部部分から散乱した状態で古瀬戸灰釉印花割花文瓶子・灰釉広口壺、常滑窯鳶口壺、広口壺・玉縁口縁壺、中国製雜釉壺等7点が発見された。37号やぐらからは、やぐら廃絶後に内部の五輪塔や陶器類は動かされており、覆土中層から常滑窯鳶口壺・壺が3点が発見された。(上行寺東やぐら群遺跡発掘調査報告書2002)

9) 葉王寺やぐら群：1号やぐら玄室床面に穿たれた長径約1.3m、短径約0.3m、深さ約0.3mの長方形の土坑から常滑窯壺が3点が発見された。(宍戸2004)

以上、藏骨器の出土しているやぐらは以上の9遺跡である。藏骨器の種類を見てみると、舶載陶磁器は、



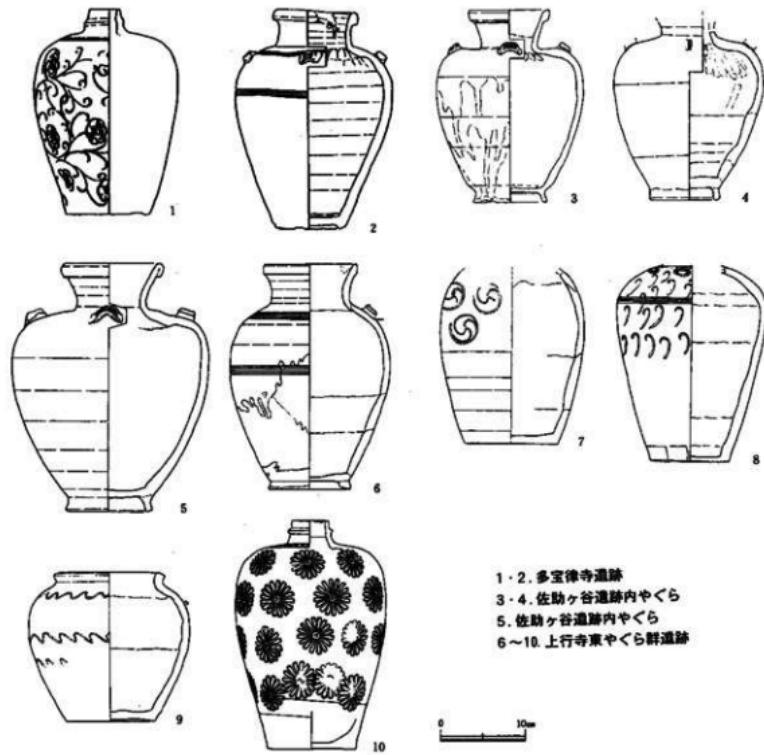
1・2. 多宝律寺遺跡、3. 新善光寺内やぐら、4. 佐助ヶ谷遺跡内やぐら、5. 上行寺東やぐら群遺跡

第4図 舶載陶磁器 藏骨器 [S=1/6]

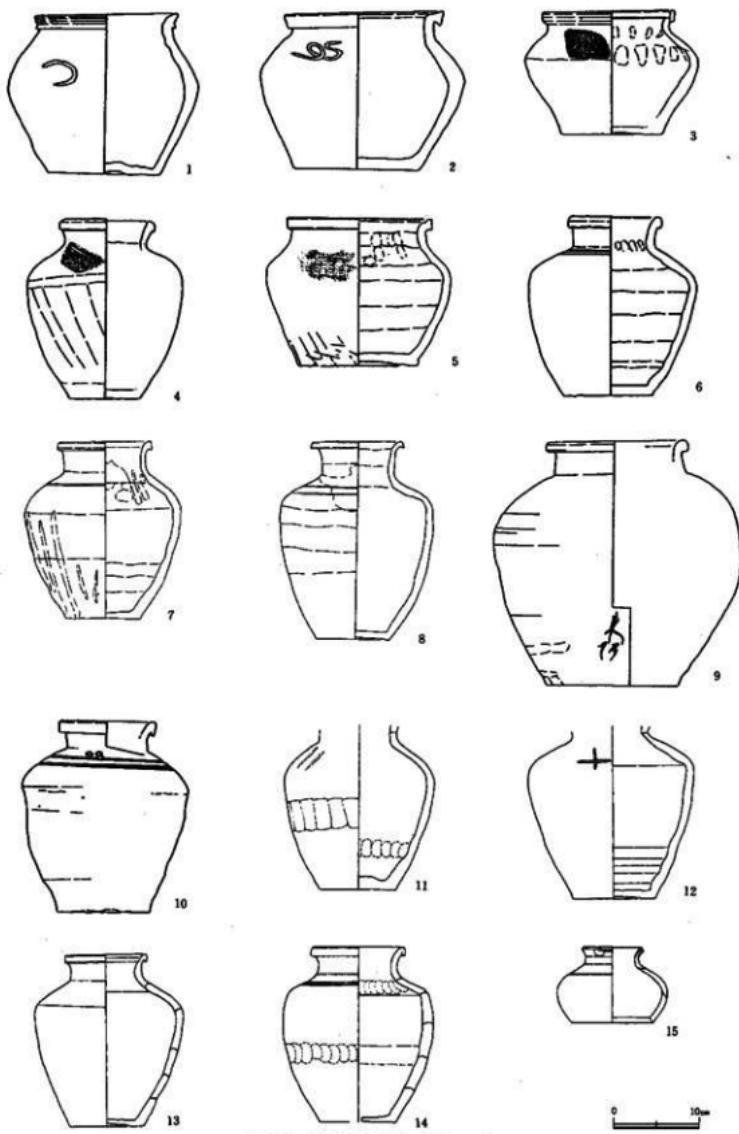
多宝律寺遺跡の4号及び10号やぐらから黒褐釉壺、新善光寺内やぐらの「コ」字形区画造構から白磁四耳壺、佐助ヶ谷遺跡内やぐらの2号窯から白磁水柱、上行寺東やぐら群遺跡の34号やぐらから雜釉壺である。時期としては、14世紀代の製品である。鎌倉において貿易陶磁の輸入が盛んになるのは13世紀中頃以降であり、輸入された貿易陶磁の品々が藏骨器として多く使用されることになったと考えられる。

瀬戸窯の製品としては古瀬戸灰釉四耳壺・灰釉三耳壺・灰釉巴文瓶子・灰釉割花文瓶子・灰釉水注・灰釉菊花文瓶子・灰釉印花割花文瓶子等が出土している。遺物の時期としては、佐助ヶ谷遺跡内やぐらや山王堂東谷やぐらから出土した灰釉四耳壺が古瀬戸前期様式、上行寺東やぐら群遺跡17号やぐらから出土した灰釉三耳壺が古瀬戸後期様式Ⅲ～Ⅳ期の製品である。それ以外の物は、古瀬戸後期様式Ⅰ～Ⅱ期、14世紀代～15世紀代の製品が多く出土している。

常滑窯の製品としては玉縁口縁壺・嵩口壺・壺・大壺が出土している。遺物の時期としては、常滑編年6・7型式を中心とし、一部8・9型式の製品が見られ、13世紀中頃～14世紀代が中心となると考えられる。薬王寺やぐら群から出土した3点の常滑窯の壺は、古瀬戸前期様式と中期様式壺を模した物で常滑編年

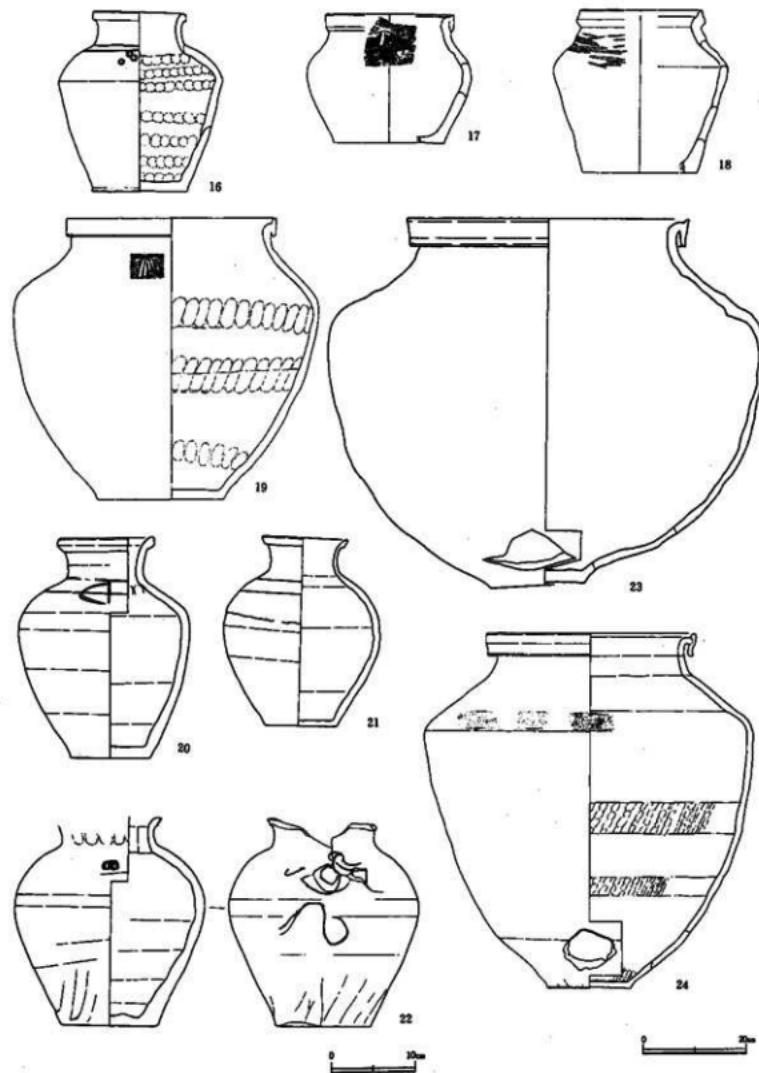


第5図 瀬戸窯 藏骨器 [S=1/6]



第6図 常滑窯藏骨器(1) [S=1/6]

神奈川県内の「やぐら」集成 (5)



1~4. 多宝律寺遺跡、5~8. 佐助ヶ谷遺跡内やぐら、9~10. 松谷寺跡内やぐら、11~19. 上行寺東やぐら群遺跡、
20~22. 桑王寺やぐら群、23. 濱戸町やぐら群、24. 井ヶ谷東やぐら群

第7図 常滑窯 蔵骨器 (2) [16~22 S=1/6, 23・24 S=1/10]

6～7型式14世紀初頭～中葉にあたる。常滑窯の製品は、13世紀中頃になると古瀬戸製品をモデルとした製品が多く作られるようになる。

蔵骨器のほとんどは、内部に火葬骨が納めているか、火葬骨の痕跡が認められる状態で出土しているが、瀬戸町やぐら群と弁ヶ谷東やぐら群の2ヶ所から出土した2点の瀬戸窯大甕の内部には未火葬人骨が納められた状態で発見されている。大甕は、口縁部の特徴から常滑窯年7型式の14世紀初頭～後半である。この他に、戦前の不時発見であり詳細については不明ではあるが、大甕内に未火葬人骨が納められた物は、二階堂の亀ヶ瀬やぐら群1号穴（赤星1936・1943）及び3号穴（赤星1936・1943）、二階堂の理智光寺やぐら（赤星1943）、材木座・弁ヶ谷浜口邸やぐら（赤星1936・1953）の4ヶ所から発見されている。いずれも、やぐら内から出土した五輪塔や宝篋印塔の状況から、瀬戸町やぐら群と弁ヶ谷東やぐら群とはほぼ同じ14世紀代の製品と考えられる。

(宮坂)

参考文献

- 赤星直忠 1936「第34回鎌倉史跡めぐり記録」「鎌倉」2-4
- 赤星直忠 1943「鎌倉中期に於ける一寺方に於いて」「考古学雑誌」33-4（赤星1980『中世考古学の研究』に再録）
- 赤星直忠 1959「淨光明寺境内やぐら調査概報」「鎌倉」1号
- 赤星直忠 1959「鎌倉市史考古編」
- 池田治・宍戸信悟 2001『山王堂東谷やぐら群』かながわ考古学財団調査報告117
- 学習院大学輔仁会史学部 1966『中世墳墓「やぐら」の調査』
- 鹿島保宏・鈴木重信 1997「六浦大道やぐら群」神奈川県横浜治水事務所・財団法人横浜市ふるさと歴史財団
- 小林義典 2002『上行寺東やぐら群遺跡』
- 宍戸信悟・谷正秋 2004『薬王寺やぐら群』かながわ考古学財団調査報告176
- 鈴木庸一郎 2000a「鎌倉城（二階堂紅葉ヶ谷）所在やぐら群」かながわ考古学財団調査報告88
- 鈴木庸一郎 2000b「鎌倉城（大町三丁目）所在やぐら」かながわ考古学財団調査報告89
- 鈴木庸一郎 2000c「弁ヶ谷東やぐら群」かながわ考古学財団調査報告94
- 鈴木庸一郎他 2004「大倉幕府北やぐら群」かながわ考古学財団調査報告162
- 鈴木庸一郎他 2005「西御門東やぐら群」かながわ考古学財団調査報告181
- 全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会2005『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨
- 田代都夫・繼実・大坪聖子 1996「天王寺跡やぐら」「中世石窟造構の調査—鎌倉所在の「やぐら」群」東国歴史考古学研究所調査研究報告第7集
- 田代都夫 1993「鎌倉の「やぐら」—中世墓造・墓制史上における位置付け」「中世社会と墳墓」名著出版
- 田代都夫 1998「中世石窟「やぐら」の盛期と質的転換」「考古論叢神奈川」第7集 神奈川県考古学会
- 田代都夫 2004「中世鎌倉の石窟寺院」「平成16年度発掘調査成果発表会・公開セミナー発表要旨」かながわ考古学財団
- 田代都夫・宗臺秀明・宗臺富貴子 1998「松谷寺跡内やぐら」「中世石窟造構の調査Ⅱ」東国歴史考古学研究所調査研究報告15集
- 多宝律寺遺跡発掘調査団 1976「多宝律寺遺跡発掘調査報告書」
- 多宝律寺遺跡発掘調査団 1977「多宝律寺遺跡第7次発掘調査報告書」
- 繼 実 1991a「佐助ヶ谷遺跡内やぐら」「平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
- 繼 実 1991b「本城跡内やぐら」「平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
- 東国歴史考古学研究所 1998「中世石窟造構の調査Ⅱ」東国歴史考古学研究所調査研究報告15集
- 中野晴久 1995「生産地における編年について」「常滑焼と中世社会」小学校
- 長谷川厚・大塚建一 1999「鎌倉城所在やぐら群」かながわ考古学財団調査報告74
- 長谷川厚・大塚建一 2000「瀬戸町やぐら群・横穴墓」かながわ考古学財団調査報告86
- 原廣志・田代都夫 1990「並目遺跡内やぐら」「昭和63年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
- 原廣志・福田誠他 1988「新善光寺跡内やぐら発掘調査報告書」新善光寺跡内やぐら発掘調査団
- 宮坂淳一・鈴木庸一郎 2003「長坂宮ノ前やぐら群」かながわ考古学財団調査報告144
- 山本信夫 2000「太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-」太宰府市の文化財第49集 太宰府市教育委員会

近世民家の集成（4）

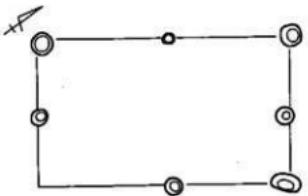
近世プロジェクトチーム

はじめに

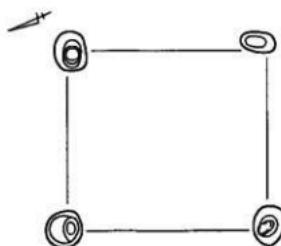
県内の近世民家の集成の第4回目である。本プロジェクトチームでは、これまでに横浜市、川崎市、横須賀市、鎌倉市、平塚市、藤沢市、茅ヶ崎市、逗子市、小田原市、相模原市、綾瀬市の集成を行って86棟分のデータを蓄積してきた。今回は厚木市、伊勢原市、大和市において新たに33棟分のデータを得ることができたが、建物の詳細が判然としない厚木市東町二番のE 5号建物址及びD 2号建物址については除外し、31棟分を追加した。なお、市の集成は今回をもって終了し、次回は町村の集成を行う予定である。

凡例

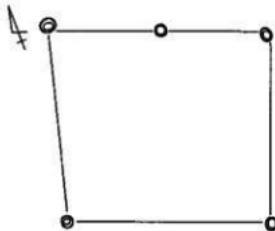
- 資料Noは近世民家の集成（1）からの続巻番号である。
- 遺構名は報告書の記載に基づく。
- 建物の縮尺は1/100とし、スケールを省略したが、規模の大きいものについては適宜縮尺を変え、図面ごとにスケールを示した。
- 梁間、桁行の間数は単に柱穴の数ではなく、柱間距離から概略割り出した1間の梁間及び桁行寸法で換算した数値を示している。
- 坪数は梁間×桁行の面積を、現行の一坪3.3m²で除したものである。
- 建物の機能・構築時期については、報告書の記載に準じているが、母屋と付属建物の別が明確なもの、出土遺物から時期が推定できるものについては記載した。

資料No	87	遺跡名	恩名沖原遺跡				所在地	厚木市恩名字沖原										
遺構名	4号掘立柱建物址				構築場所	丘陵縁辺部												
規模	梁間	2.9 m	桁行	4.9 m	2 × 2 間	面積	14.2 m ²	坪数	4.3坪									
柱穴の形状	方形、円形	柱間距離	梁	1.4、1.5 m	桁	2.4、2.5 m	主軸方位	N-13°-E										
出土遺物					付属施設													
建物の機能	作業場小屋的な施設		構築時期															
備考																		
																		

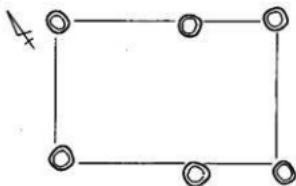
資料No.	88	遺跡名	恩名沖原遺跡				所在地	厚木市恩名字沖原		
造構名	5号掘立柱建物址				構築場所	丘陵縁辺部				
規模	梁間	3.5m	桁行	4.0m	1	×	1	間	面積	14m ²
柱穴の形状	略円形	柱間距離	梁	3.5m	桁	4.0m	主軸方位	N-28°-E		
出土遺物				付属施設						
建物の機能	作業場小屋的な施設				構築時期					
備考										



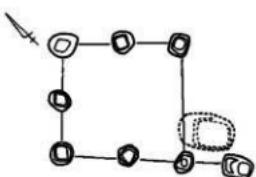
資料No.	89	遺跡名	恩名沖原遺跡				所在地	厚木市恩名字沖原		
造構名	6号掘立柱建物址				構築場所	丘陵縁辺部				
規模	梁間	3.7m	桁行	4.2m	1	×	2	間	面積	15.5m ²
柱穴の形状	略円形	柱間距離	梁	3.7m	桁	2.0, 2.2m	主軸方位	N-18°-E		
出土遺物				付属施設						
建物の機能	作業場小屋的な施設				構築時期					
備考										



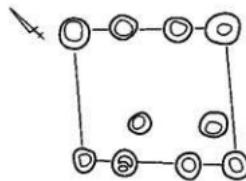
資料No	90	遺跡名	恩名沖原遺跡			所在地	厚木市恩名字沖原	
遺構名	7号掘立柱建物址 構築場所			丘陵縁辺部				
規模	梁間	2.8 m	桁行	4.4 m	1 × 2 間	面積	12.3 m ²	坪数
	柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	2.8、3.0 m	桁	1.7、2.7 m	主軸方位
出土遺物				付属施設				
建物の機能	作業場小屋的な施設			構築時期				
備考								



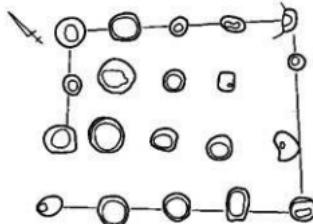
資料No	91	遺跡名	愛名宮地遺跡			所在地	厚木市愛名宮地	
遺構名	第1号掘立柱建物址 構築場所			山裾の段切りされた緩斜面上				
規模	梁間	2.2 m	桁行	3.6 m	2 × 3 間	面積	7.9 m ²	坪数
	柱穴の形状	不整円形	柱間距離	梁	1.1 m	桁	1.1~1.2 m	主軸方位
出土遺物				付属施設 土坑				
建物の機能				構築時期 17世紀後半～18世紀初頭				
備考	溝状遺構によって区画されている							



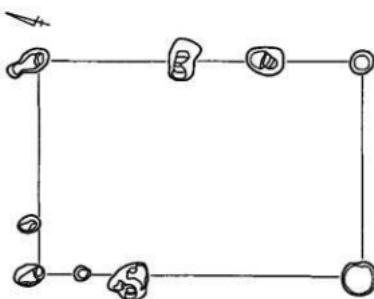
資料No	92	遺跡名	愛名宮地遺跡				所在地	厚木市愛名宮地			
遺構名	第2号掘立柱建物址				構築場所	山裾の段切りされた平坦面上					
規模	梁間	2.65m	桁行	3.0m	1 × 3間	面積	8m ²	坪数	2.4坪		
柱穴の形状	不整円形	柱間距離	梁	2.5, 2.65m	桁	0.8~1.2m	主軸方位	N-43°-W			
出土遺物					付属施設						
建物の機能					構築時期	17世紀後半~18世紀初頭					
備考	溝状造構によって区画されている、南東6mに第3号掘立柱建物址がある										



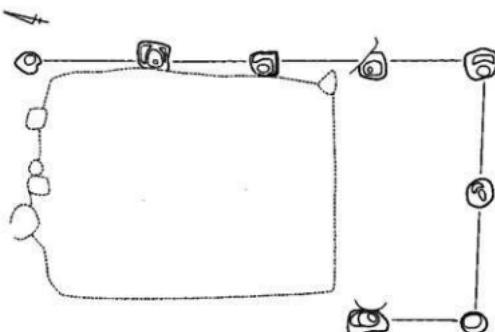
資料No	93	遺跡名	愛名宮地遺跡				所在地	厚木市愛名宮地			
遺構名	第3号掘立柱建物址				構築場所	山裾の段切りされた平坦面上					
規模	梁間	3.7m	桁行	5.0m	3 × 4間	面積	16.9m ²	坪数	5.1坪		
柱穴の形状	不整円形	柱間距離	梁	1.1~1.3m	桁	1.2~1.3m	主軸方位	N-50°-W			
出土遺物					付属施設						
建物の機能					構築時期	17世紀後半~18世紀初頭					
備考	溝状造構によって区画されている、北西6mに第2号掘立柱建物址がある										



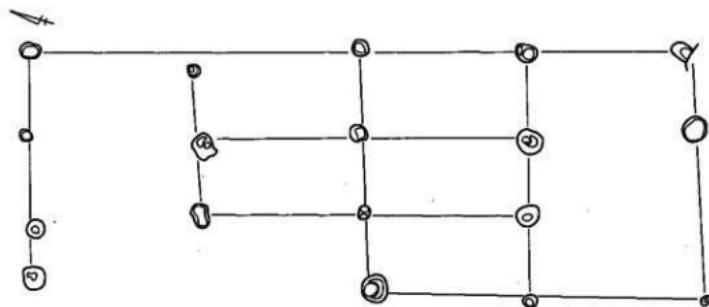
資料No	94	遺跡名	愛名宮地遺跡	所在地	厚木市愛名宮地
遺構名	第4号掘立柱建物址	構築場所	土丹地業が施された谷戸入口		
規模	梁間 4.2m	桁行 6.2m	2 × 3間	面積 26m ²	坪数 7.9坪
柱穴の形状	不整円形	柱間距離 梁 2.1m	桁 0.9~1.7m	主軸方位 N-10°-W	
出土遺物	煙管雁首、縦部小皿	付属施設			
建物の機能		構築時期			
備考					



資料No	95	遺跡名	愛名宮地遺跡	所在地	厚木市愛名宮地
遺構名	第5号掘立柱建物址	構築場所	山裾の段切りされた平坦面上		
規模	梁間 7.0m	桁行 12.5m	2 × 4間	面積 87.5m ²	坪数 26.5坪
柱穴の形状	方形	柱間距離 梁 3.5m	桁 3.3~3.5m	主軸方位 N-24°-W	
出土遺物		付属施設			
建物の機能		構築時期	17世紀後半~18世紀初頭		
備考	東方2~3mに主軸の直行する第6・7号掘立柱建物址がある				

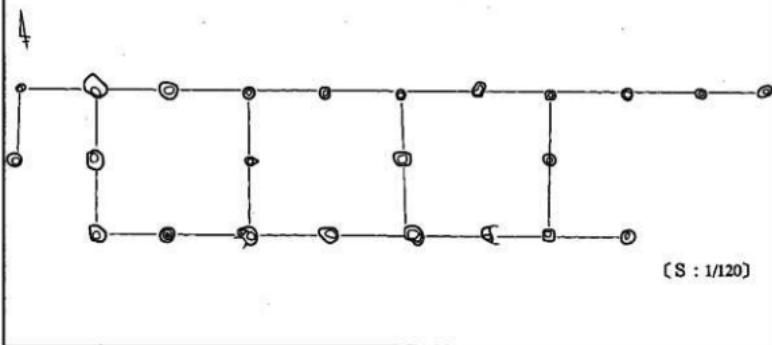


資料No.	96	遺跡名	愛名宮地遺跡	所在地	厚木市愛名宮地
遺構名	第6号掘立柱建物址 構築場所 山裾の段切りされた平坦面上				
規模	梁間	6.0m	桁行	15.5m	3 × 4間 面積 93m ² 坪数 28.2坪
柱穴の形状	不整方形	柱間距離	梁	1.8m	桁 3.75m 主軸方位 N-19°-W
出土遺物	付属施設				
建物の機能	構築時期 17世紀後半～18世紀初頭				
備考	第7号掘立柱建物址と重複する、西方2mに主軸の直行する第5号掘立柱建物址がある				



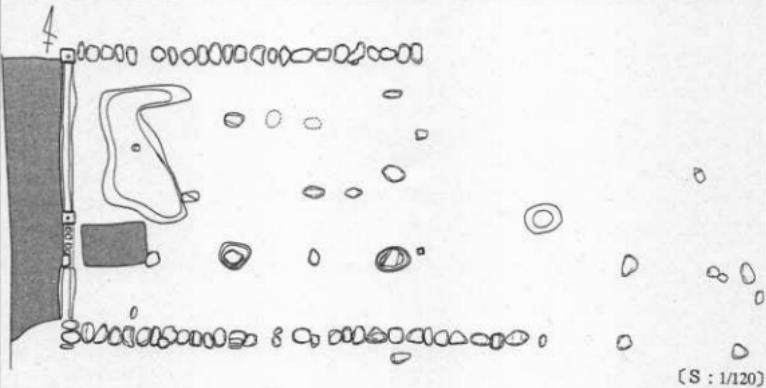
(S : 1/120)

資料No.	97	遺跡名	愛名宮地遺跡	所在地	厚木市愛名宮地
遺構名	第7号掘立柱建物址 構築場所 山裾の段切りされた平坦面上				
規模	梁間	3.6m	桁行	18.0m	2 × 10間 面積 64.8m ² 坪数 19.6坪
柱穴の形状	不整円形	柱間距離	梁	1.8m	桁 1.8m 主軸方位 N-80°-W
出土遺物	付属施設				
建物の機能	構築時期 17世紀後半～18世紀初頭				
備考	第6号掘立柱建物址と重複する、西方3mに主軸の直行する第5号掘立柱建物址がある				

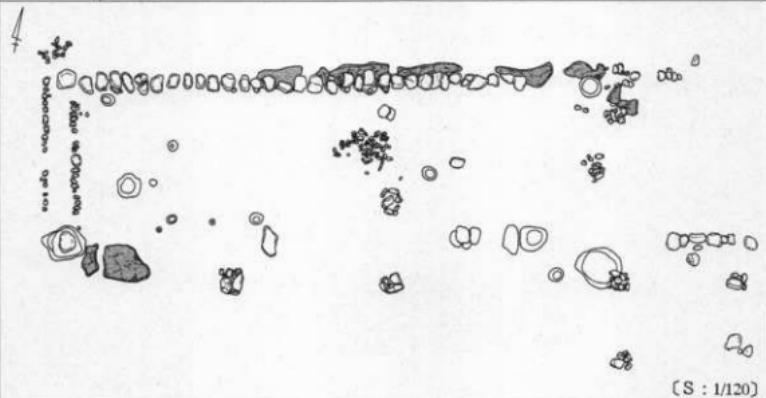


(S : 1/120)

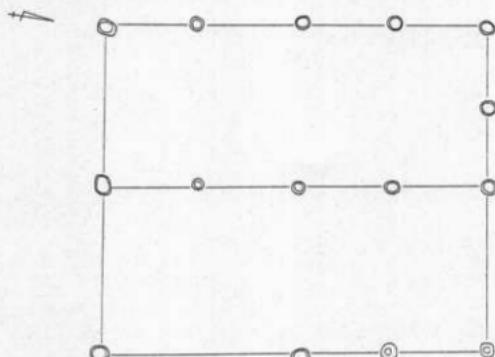
資料No	98	遺跡名	東町二番	所在地	厚本市東町二番
遺構名	A 3号建物址	構築場所			
規模	梁間	6.4 m	桁行	10.4 m	3.5 × 6.4 間 面積 66.56 m ² 坪数 20.2坪
柱穴の形状		柱間距離	梁	m 桁	m 主軸方位 N-80°-E
出土遺物			付属施設		
建物の機能	店蔵?		構築時期	18世紀後半～幕末	
備考	店部分と通り土間を有する建物、1867年に罹災、2mほど東側に礎石あり（同一の建物か？）				



資料No	99	遺跡名	東町二番	所在地	厚本市東町二番
遺構名	A 4号建物址	構築場所			
規模	梁間	4.5~m	桁行	12.5~m	× 間 面積 m ² 坪数 坪
柱穴の形状		柱間距離	梁	m 桁	m 主軸方位 N-78°-E
出土遺物			付属施設		
建物の機能			構築時期	18世紀後半～幕末	
備考	A 3号建物址に切られ詳細は不明、西側に10~20cmの玉石が二列敷き並べられている				

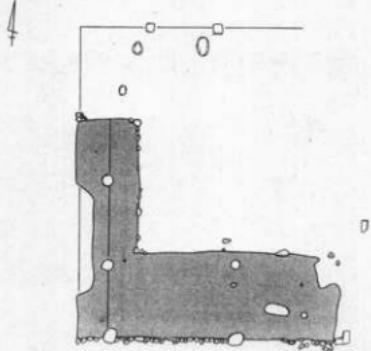


資料No.	100	遺跡名	東町二番				所在地	厚木市東町二番					
遺構名	B 1号掘立柱建物址 構築場所												
規模	梁間	7.6 m	桁行	9.0 m	4 ×	4.6 間	面積	68.4 m ²	坪数	20.7坪			
柱穴の形状	円形、椭円形	柱間距離	梁	1.8~1.9 m	桁	2.1~2.4 m	主軸方位	N-8°-W					
出土遺物					付属施設								
建物の機能	一時的な建物?				構築時期	幕末~明治前期							
備考	ピットに玉石を据えている、B 4号建物址を切っている												



〔S : 1/120〕

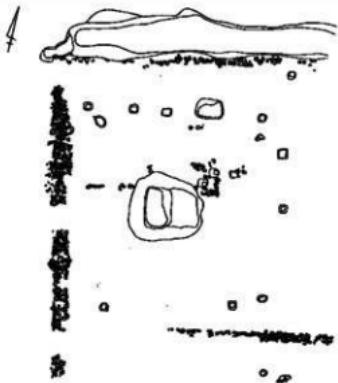
資料No.	101	遺跡名	東町二番				所在地	厚木市東町二番		
遺構名	B 4号建物址 構築場所									
規模	梁間	9.0 m	桁行	8.0~ m	4 ×	間	面積	m ²	坪数	坪
柱穴の形状	柱間距離				梁	m	桁	2.0 m	主軸方位	N-80°-E
出土遺物	瀬戸・美濃陶磁器				付属施設					
建物の機能	店蔵?				構築時期	18世紀後半~幕末				
備考	タクキ遺存、B3号建物址、B1号掘立柱建物址によって切られている、規模は4間×5.5間程度と推定									



〔S : 1/150〕

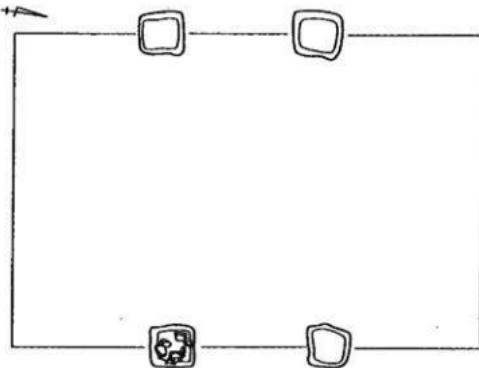
近世民家の集成 (4)

資料No	102	遺跡名	東町二番	所在地	厚木市東町二番
遺構名	B 5号建物址	構築場所			
規模	梁間	10.0 m	桁行	10.4~m	×間面積
柱穴の形状		柱間距離	梁	m	桁
出土遺物	培塿、肥前及び漁戸・美濃陶器	付属施設			
建物の機能		構築時期	18世紀後半		
備考	B 4号建物址の下層にある、柱大の跡が幅40~80cmに渡って敷き詰められている				



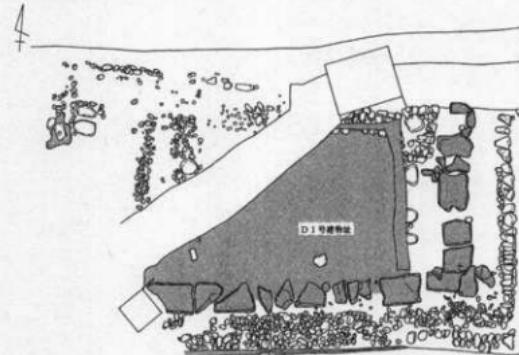
(S : 1/200)

資料No	103	遺跡名	東町二番	所在地	厚木市東町二番
遺構名	B 6号建物址	構築場所			
規模	梁間	7.5 m	桁行	11~m	2 × 3~間面積
柱穴の形状	方形	柱間距離	梁	m	桁
出土遺物		付属施設			
建物の機能		構築時期	18世紀前半		
備考	跡が充填された1m角の土坑を基礎とする、B 2~4号建物址に切られており全容不明				



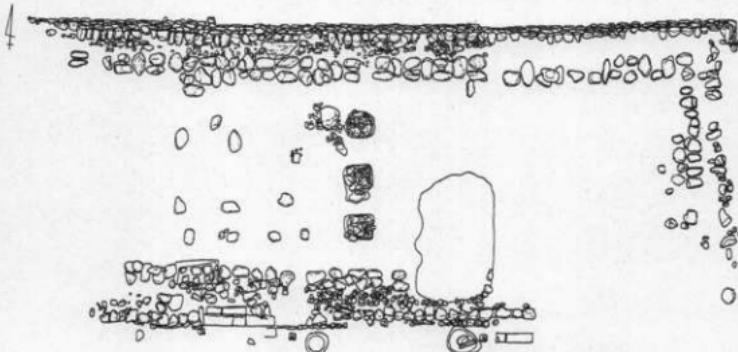
(S : 1/120)

資料No.	104	遺跡名	東町二番	所在地	厚木市東町二番
遺構名	D 1号建物址	構築場所			
規模	梁間 3.6 m	桁行 7.6 m	2 × 4.2 間	面積 m ²	27.3 m ² 坪数 8.3坪
柱穴の形状		柱間距離 梁 m	桁 m	主軸方位	N-82°-E
出土遺物	瀬戸・美濃、京都・信楽陶器	付属施設			
建物の機能	土蔵跡	構築時期	19世紀後半		
備考	東側に石垣、南側に雨落ち石あり				



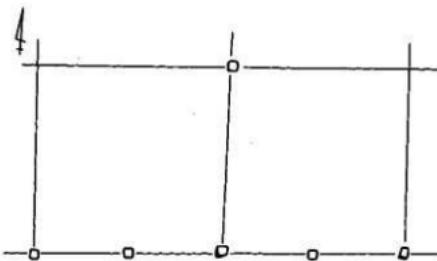
(S : 1/150)

資料No.	105	遺跡名	東町二番	所在地	厚木市東町二番
遺構名	E 4号建物址	構築場所			
規模	梁間 4.5 m	桁行 14.5 m	2.5 × 8 間	面積 m ²	65.3 m ² 坪数 19.8坪
柱穴の形状		柱間距離 梁 m	桁 m	主軸方位	N-86°-E
出土遺物	肥前・瀬戸・美濃陶磁器	付属施設			
建物の機能		構築時期	18世紀後半～幕末		
備考	間仕切りの基礎残存、北側に石垣あり				

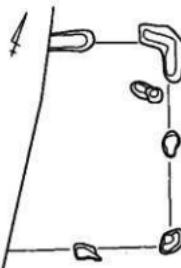


(S : 1/120)

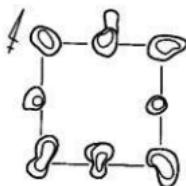
資料No.	106	遺跡名	東町二番	所在地	厚木市東町二番				
遺構名	A 5号建物址	構築場所							
規模	梁間	3.7~m	桁行	7.4~m	2~ × 4~ 間	面積	m ²	坪数	坪
柱穴の形状		柱間距離	梁	3.6 m	桁	1.8 m	主軸方位	N-86°-E	
出土遺物			付属施設						
建物の機能			構築時期	幕末~明治前期					
備考	礎石建物址、規模はさらに大きくなる可能性あり								



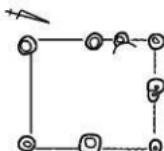
資料No.	107	遺跡名	上柏屋・川上遺跡 (No.6)	所在地	伊勢原市上柏屋字川上				
遺構名	5号据立柱建物址	構築場所	丘陵据部の緩斜面上						
規模	梁間	4.0 m	桁行	3.2~m	2 × 1~ 間	面積	m ²	坪数	坪
柱穴の形状	不整形、長方形	柱間距離	梁	2.0 m	桁	1.7、2.0 m	主軸方位	N-67°-E	
出土遺物			付属施設						
建物の機能			構築時期						
備考									



資料No	108	遺跡名	上柏屋・川上遺跡 (No 6)	所在地	伊勢原市上柏屋字川上
造構名	6号掘立柱建物址	構築場所	丘陵裾部の緩斜面上		
規模	梁間 2.2m	桁行 2.2m	2 × 2間	面積 4.84m ²	坪数 1.5坪
柱穴の形状	不整梢円形	柱間距離 梁 1.1、1.2m	桁 1.1m	主軸方位 N-18°-W	
出土遺物		付属施設			
建物の機能		構築時期			
備考	北側に8号掘立柱建物址が隣接している				

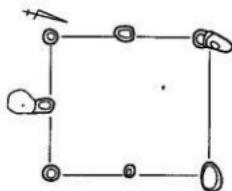


資料No	109	遺跡名	上柏屋・川上遺跡 (No 6)	所在地	伊勢原市上柏屋字川上
造構名	7号掘立柱建物址	構築場所	丘陵裾部の緩斜面上		
規模	梁間 2.1m	桁行 2.5m	2 × 2間	面積 5.25m ²	坪数 1.6坪
柱穴の形状	円形、梢円形	柱間距離 梁 0.9、1.2m	桁 1.2~1.4m	主軸方位 N-16°-W	
出土遺物		付属施設			
建物の機能		構築時期			
備考	9号掘立柱建物址と重複している				

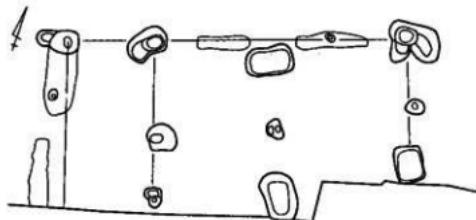


近世民家の集成（4）

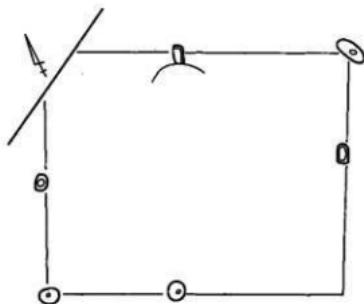
資料No.	110	遺跡名	上柏屋・川上遺跡（No.6）	所在地	伊勢原市上柏屋字川上
遺構名	8号掘立柱建物址	構築場所	丘陵裾部の緩斜面上		
規模	梁間 2.7m	桁行 3.1m	2×2間	面積 8.4m ²	坪数 2.5坪
柱穴の形状	不整梢円形	柱間距離 梁 1.3, 1.4m	桁 1.5~1.7m	主軸方位 N-16°-W	
出土遺物		付属施設			
建物の機能		構築時期			
備考	南側に6号掘立柱建物址が隣接している				



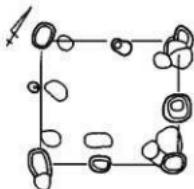
資料No.	111	遺跡名	上柏屋・川上遺跡（No.6）	所在地	伊勢原市上柏屋字川上
遺構名	9号掘立柱建物址	構築場所	丘陵裾部の緩斜面上		
規模	梁間 5.0m	桁行 3.5~m	2×2~間	面積 m ²	坪数 坪
柱穴の形状	梢円形、方形	柱間距離 梁 2.3, 2.7m	桁 1.2~1.9m	主軸方位 N-20°-W	
出土遺物		付属施設			
建物の機能		構築時期			
備考	6・7号掘立柱建物址と重複している				



資料No.	112	遺跡名	上柏屋・メ引北邊跡 (No11)	所在地	伊勢原市上柏屋メ引
造構名	10号掘立柱建物址	構築場所	台地上		
規模	梁間 4.7m	桁行 6.2m	2 × 2間	面積 29.1m ²	坪数 8.8坪
柱穴の形状	円形、楕円形	柱間距離 梁 1.7、2.1m	桁 2.1、3.0m	主軸方位 N-67°-W	
出土遺物		付属施設			
建物の機能		構築時期	幕末		
備考					

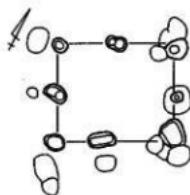


資料No.	113	遺跡名	坪ノ内・宮ノ前遺跡 (No17)	所在地	伊勢原市坪ノ内
造構名	17号掘立柱建物址(新)	構築場所	丘陵上		
規模	梁間 2.4m	桁行 2.8m	2 × 2間	面積 6.72m ²	坪数 2坪
柱穴の形状	方形、開丸長方形	柱間距離 梁 1.0~1.5m	桁 1.3~1.5m	主軸方位 N-34°-E	
出土遺物		付属施設			
建物の機能		構築時期			
備考	新旧2棟あり				

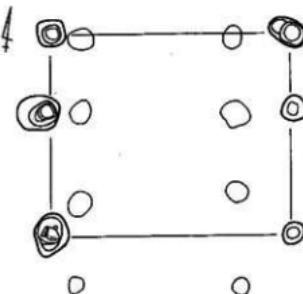


近世民家の集成 (4)

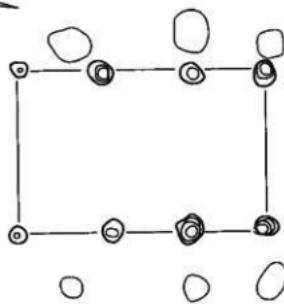
資料No.	114	遺跡名	坪ノ内・宮ノ前遺跡 (No17)	所在地	伊勢原市坪ノ内
遺構名	17号獨立柱建物址(古)	構築場所	丘陵上		
規模	梁間 1.8m	桁行 2.3m	2 × 2 間	面積 4.1 m ²	坪数 1.3坪
柱穴の形状	椭円形、扇丸方形	柱間距離 梁 0.8、1.0 m	桁 1.0~1.4 m	主軸方位 N-62°-E	
出土遺物		付属施設			
建物の機能		構築時期			
備考	新旧2棟あり				



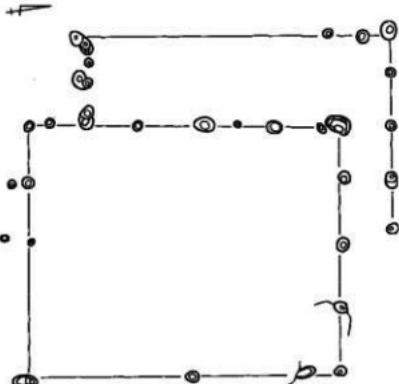
資料No.	115	遺跡名	坪ノ内・宮ノ前遺跡 (No17)	所在地	伊勢原市坪ノ内
遺構名	18号獨立柱建物址(新)	構築場所	丘陵上		
規模	梁間 4.0m	桁行 4.8m	2 × 1 間	面積 19.2 m ²	坪数 5.8坪
柱穴の形状	椭円形、扇丸方形	柱間距離 梁 1.5、2.5 m	桁 4.8 m	主軸方位 N-81°-E	
出土遺物		付属施設			
建物の機能		構築時期			
備考	新旧2棟あり				



資料No.	116	遺跡名	坪ノ内・宮ノ前遺跡 (No17)	所在地	伊勢原市坪ノ内
遺構名	18号掘立柱建物址(古)	構築場所	丘陵上		
規模	梁間 3.2m	桁行 5.0m	1 × 3 間	面積	16 m ²
柱穴の形状	椿円形、方形	柱間距離 梁 3.2, 3.3m	桁 1.5~1.8m	主軸方位	N-8°-W
出土遺物		付属施設			
建物の機能		構築時期			
備考	新旧2棟あり				



資料No.	117	遺跡名	神明若宮地区内遺跡	所在地	大和市福田
遺構名	第4号掘立柱建物址	構築場所			
規模	梁間 7.5m	桁行 9.2m	4 × 5 間	面積	69 m ²
柱穴の形状	円形、椿円形	柱間距離 梁 4.2, 4.3m	桁 1.5~2.2m	主軸方位	N-7°-E
出土遺物	かわらけ、石臼	付属施設			
建物の機能		構築時期			
備考	北側と西側に張り出しあり				



〔S : 1/150〕

神奈川県域における弥生時代木器農工具にみる地域相と変遷

—逗子市池子遺跡群の木器農工具出土事例を中心に—

渡辺 外

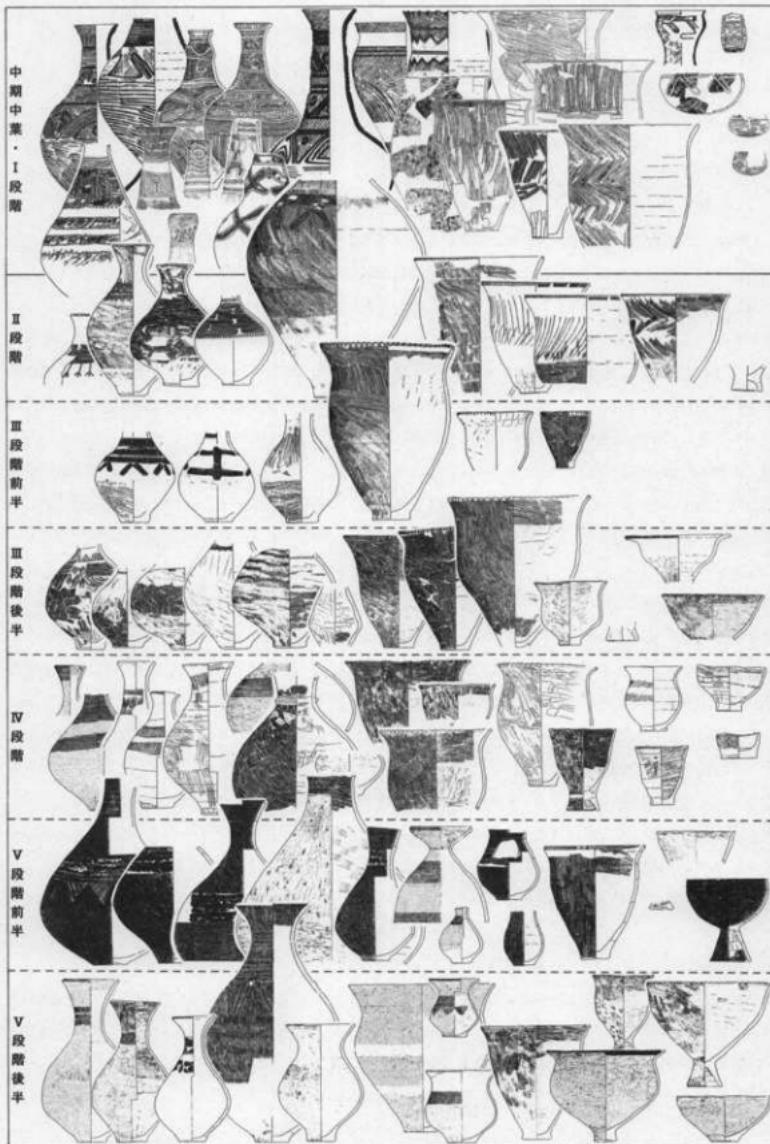
1.はじめに

弥生時代農工具の研究では、これまで木製品の鋤・鎌等を低地での耕作具、打製石斧を一括して台地上等での陸耕のための土掘具に位置付けてきたことは周知の通りである。これは弥生時代文化を規定する主たる要素として、水稻耕作を中心とした生業としての食料生産があると考えられたためであり、いずれも耕作の痕跡を示す遺物としての認識により扱われてきた。しかし実際の遺跡にみる弥生時代の木器農工具はそれぞれ出土状況も異なり、必ずしも耕作のみに用いたとする論拠になり得るものではない。また全国的な視点からすれば、時期により規格・形態も一様ではなく、地域によっては出土遺物の漸移的な変遷を確認できるだけでなく、共同体の成立や共同体間の分業体制の確立に至るまで議論を進めている場合もみられるが、関東地方では未だ資料の充実を待たざるを得ない状況である。用途については形態・製作技法の分析による推定のみで、出土例の観察と模作品による使用実験等の対比による裏付けが必要との指摘もある。掘削に適した機能を持つことは間違いないが、未だその用途に関する議論が解決した上で研究が進んでいる訳ではない。

筆者は從前より、弥生時代における社会を考察するためには、まず該期の遺物全体の変遷を把握する必要があることを指摘してきた。そのための基礎作業の一つとして、弥生時代前期～中期の遺物の変遷について土器の形式組列と打製石斧の様相を比較し、遺物全体の様相の中に時間的・空間的なまとまりを見出すことが出来るのか検索してきた(註1)。本稿ではそれらの作業を継続させ、神奈川県域における弥生時代の遺物の中で、木器農工具と土器との伴出状況や様相の変化についての整理を試みる。分析資料は、神奈川県域及び周辺地域において弥生時代前期～中期の遺跡から出土した木製品のうち、農工具としての機能を持つ、いわゆる「鋤・鎌」類の製品と未製品を対象とする。その中で残存状況の良好な資料について実見し、形態的な特徴と共に素材の選択や製作技法・生産体制を探る。それらを基本に各形態の組成を見出し、神奈川県域における木器農工具の時間的な変遷と、地域相について検討を行う。それぞれの遺物に見られる地域相を対比させ、型式学的研究法によって比較的細かく時間的・空間的な範囲を特定できる土器との対比により、木器農工具の編年的な位置付けと地域相について、より明らかにしていきたい。

2. 分析の方法

分析の対象としては、まず弥生時代木製品のうち鋤・鎌類について、なるべく形態と製作技法の検討が可能で、かつ共伴遺物から時間的な位置付けが比較的明瞭な資料を抽出することとした。抽出した資料は肉眼での観察を行うと共に、場合により再実測及び計測、デジタルカメラによる撮影などの手法を併用して資料化を行った。再実測したものについては、模式図化して類例との形態的特徴を検討し、その結果から、土器編年との対比を行い、神奈川県域における木器農工具の変遷試案を作成することを目標とした。また本来は集落間での遺物の形態・製作技法・生産体制上の相違を比較することで木器農工具の時間的・空間的な変遷を抽出する作業が必要となるが、県内で該期の木器農工具が出土している遺跡自体が非常に少なく、逗子市



第1図 神奈川県域における弥生中期の土器 [1/12]

池子遺跡群を除けば、数点の出土事例が認められるだけである。本稿における神奈川県域の様相については、池子遺跡群の弥生時代旧河道から出土した、弥生時代中期の木製品を中心に分析・検討を行うこととした。

最終的には、関東地方の木器農工具を未製品も含めて資料約100点程を実見した。弥生時代中期の資料は、旧河道等の低地域から広鉗・狭鉗・又鉗・横鉗等の鉗身と未製品、鉗柄(直柄及び膝柄)、鉗が出土しており、各器種毎の木取りと方向、製作工程や細部整形痕を観察した。

3. 神奈川県域における弥生時代中期の土器様相

池子遺跡群の弥生時代旧河道からは、主として弥生時代中期のうち中期中葉～中期後業の土器が出土している。同様に河道内から出土している木製品や石器・骨角器等の遺物についても同じ時期に属するものと考えられるが、ここではまず、神奈川県域における該期の土器様相を踏まえることで、遺物全体としての時間的な位置付けとその範囲を押さえておきたい。本県域では、該期のうち中期中葉の段階が所謂「須和田式」土器、後続する中期後業の段階が「宮ノ台式土器」の時期として認識されている。池子遺跡群の旧河道出土土器は、このうち中期後業段階の資料が圧倒的に多く、その埋没時期の主体を占めていたものと考えられる。現在までの宮ノ台式土器研究では、その変遷について全体を大別5段階・細別7段階に細分し、宮ノ台式の成立以後、壺は櫛描文を中心とした文様構成が確立し、壺は羽状文が主体となる古い様相(Ⅱ段階以前)と、壺は羽状縄文帯を多用して文様帶の縮小化が進行し、壺は刷毛目調整だけの無文のものが主体となり、地域差が強まる新しい様相(第Ⅳ～V段階)に把握されてきた(弥生時代研究プロジェクトチーム2002～2005)。以下、中期中葉段階からの流れを含めて略述する(第1図)。

中期中葉段階：所謂「須和田式」土器の段階。壺は細口長頸で多段の横帯による文様帯構成を持ち、条痕・縄文・半截竹管状工具による沈線で幾何学文を施される。壺は広口で斜位・縱位・横位羽状の条痕を全体に施されるものと、これに口縁部へ縄文を加えたもの、縄文を地文として壺と同様の沈線文を描かれるものがある。他に小型の土器で筒形や楕・鉢形を呈し、縄文帯や沈線文を施されるものがあるが継続しない。

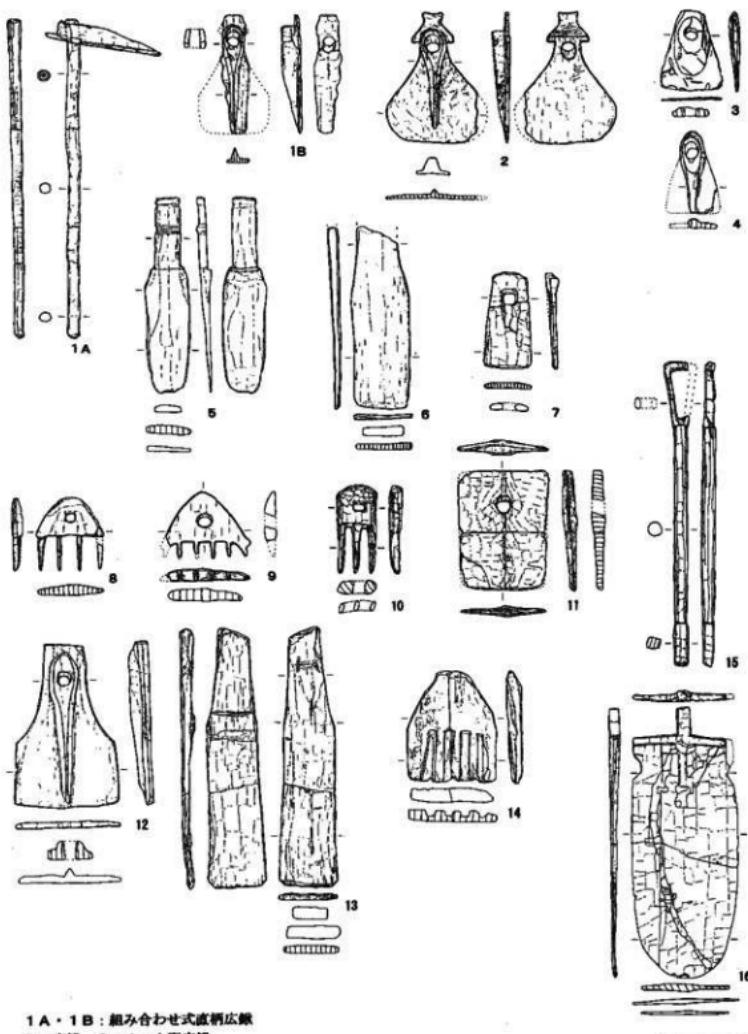
I段階：宮ノ台式土器の成立段階とされるが、前段階の新しい様相を持つ部分とは、型式として不分明な要素も見られる。壺は東海地方西部の影響から櫛描文が定着する一方、壺は中期中葉の手法の一部が残り、横位羽状の条痕文や櫛描文が主体となる。文様要素を書き込む手法や工具等に前段階との明瞭な隔絶ではなく、むしろ共通する部分が多い。

II段階：壺は櫛描文を文様の主体とし、壺は横位羽状文が特徴的な段階。壺の文様では櫛描文が圧倒的に増えるが、中期中葉段階から見られる縄文帯を主要要素とした文様を持つもの他、複合鋸歯文と格子目文の組合せをもつた類型として存在する。文様要素として刷毛目状工具が多用されるようになる。台付壺や高坏が僅かにみられるが、量的にはまだ明確に組成する程ではない。

III段階：壺の文様構成が前段階から変化し、壺は刷毛目整形が盛行する段階。前段階の要素を残す前半と、文様構成が多様化する後半に細分される。壺は文様帯が縮小し、壺は羽状文が痕跡的に残存する。器種としては台付壺や高坏・鉢などが見られるようになる。

IV段階：壺は横方向の単純な縄文帯を多用し、壺は刷毛目が主体となる段階。全面赤彩される例が多くなる他、大型・小型の容量分化が見られる。この他に広口壺・楕・鉢・高坏などが組成するようになる。

V段階：壺の文様帯の縮小化と文様の単純化が更に進行する段階。簡略化傾向と器形の定型化的進行により前・後後に細分される。壺は沈線を伴わない縄文帯が盛行し、無文部に赤彩を施す例や大型のものが増加す



- 1A・1B:組み合わせ式直柄広鋤
 2:広鋤 3・4:小型広鋤
 5・6:狭鋤 7:小型狭鋤 8~10:又鋤
 11:横鋤 12:広鋤未製品 13:狭鋤未製品
 14:又鋤未製品 15:組み合わせ式鋤柄
 16:組み合わせ式鋤身

第2図 神奈川県域における弥生時代の木器農工具 [1/12]

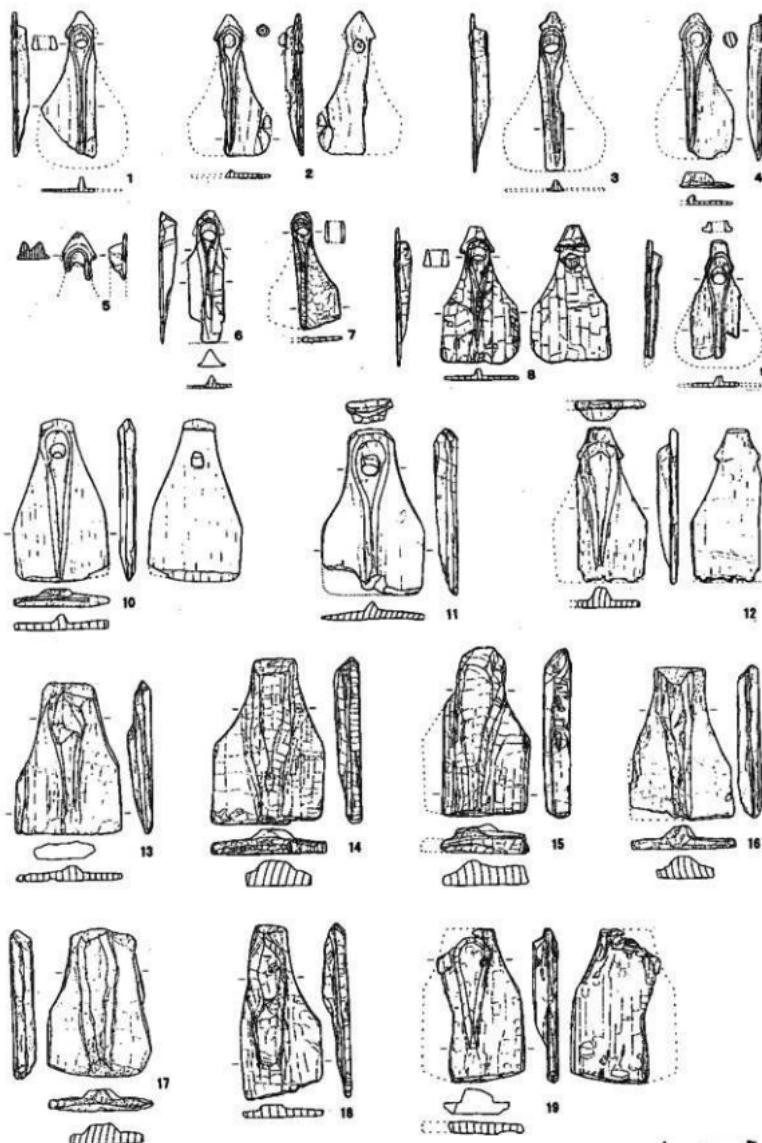
る。妻は刷毛目整形だけの無文が主体となる。この他、台付妻・椀・鉢・無頸壺・広口壺・高壺などがみられるが、その全てが器種組成として定型化している訳ではない。

宮ノ台式土器の研究は、周辺地域との並行関係について各地で検討され、空間的な分布と周辺型式との伴出状況とが明確にされてきた。しかしその一方で、編年研究そのものは停滞してきており、上記の変遷過程全体の流れは間違いなくとも、個々の段階の資料同士に時間的な隔離や重複が全くないのかどうかという点については未解決のままである。型式編年として確固たるものを作り上げるためにには、それを構成する各形式の組列を、出土状況から補強する作業が必要となることは既に指摘してきた(註2)。今後は横浜市折本西原遺跡や秦野市砂田台遺跡のような、一定期間にわたり継続した大規模集落遺跡の調査事例を精査し、形式組列の検証事例を蓄積していくことが編年研究の進展へと繋がるものと考えられる。また池子遺跡群の弥生時代旧河道の場合は、覆土の最下層～上層にかけて、弥生時代中期中葉～後葉の全役階の遺物を包含している。流路の堆積は決して整然とした時間軸を示すようなものではないが、一定期間の内に大きな断絶を挟むことなく埋没していたものと想定される。埋まりきる迄の間には膨大な量の情報が含まれている筈であり、そこには集落遺跡とは別種の資料として、検証すべき価値が認められる。次節では、まず旧河道から出土した資料のうち、本稿における分析対象である弥生時代の木器農工具について詳述する。

4. 池子遺跡群から出土した弥生時代の木器農工具

池子遺跡群の弥生時代旧河道から出土した木製品には、農工具や紡織具・漁労具の他、食器や容器・雑具等の木器だけでなく、梯子や建築部材なども多量に存在する。このうち農工具は様々な種類の鍛身や柄、鋸などが出土した。第2図1～16は、旧河道から出土した農工具の器種を例示したもので、その他の主要な出土例は第3・4図に示している。また残存度や樹種・木取り等については、末尾の表に一括した(第1表)。

広鍬 (第2図1・2、第3図1～9) :下端の平たい鍛身のうち、幅の広いものを広鍬とした。池子遺跡群で出土しているのは鍛身の上部に孔を持ち、他の樹の幹や枝の芯持ち材を棒状に加工した柄を付ける、直柄広鍬と呼ばれるものである。第2図1は鍛身と柄が付いて出土したもので、着柄状態の良くわかる良好な資料の一つである(第2図1A・B)。鍛身は前面が平滑に加工され、後面の中央に舟形を呈する稜部を削り出している(註3)。基部の上位には身本体の部分より若干薄めの板状突起が作られ、上端は平坦に加工される。2も同様の個体で、比較的幅広で小さな鍛身である。上端の突起も平坦に作られ、前面には孔の直上に明瞭な段を削り出している。前面が非常に平滑に整形されているのに対し、後面は器面整形こそされているものの、加工時の工具痕が残っている。1・2共に側面が非常に平滑に加工され、端部が面取りされていない。第3図1～7は比較的長めで幅狭な例である。第2図の例と異なり、孔が全体の上端近くに位置し、上部の突起は三角形状を呈する。後面の舟形隆起も幅狭で、側面の端部が面取りされ丸味を帯びるものと、面取りされないものの両者が存在する。8・9は全長が短めで上部に平坦な突起を持ち、比較的幅広な例である。8は第2図2と同様に、前面の孔直上に明瞭な段差を削り出している。広鍬の出土例全体の形態的な特徴を概観すると、鍛身の最大長が40cm弱程度で、最大幅は20cm程度と比較的狭く、基部上の突起が三角形を呈するもの(第3図1～7)と、最大長が約30cm程度、最大幅が25cm程度の幅広の身を持ち、基部上の突起上端が平坦なもの(第2図1・2、第3図8・9)との両類型に二分することが出来る(註4)。これ以降、本稿では前者を広鍬A類、後者を広鍬B類と呼称する。樹種と木取りについては、報告された広鍬出土例の全てが葉樹の桟目材を用いており、アラカシ・シラカシ・アカガシ等のアカガシ亜属であると同定されている。



第3図 池子遺跡群出土の弥生時代木器農工具① [1/12]

広鋸未製品（第2図12、第3図10～19）：図示していないが、広鋸は複数個体分の縦長材を切り出し、幾つかの鋸身が連結した状態で加工・整形する。後面となる部分に稜を作り、工具で分割痕を付けてから割り出している。第2図12及び第3図10・11は分割後の未製品で、中央の稜部をはじめ各所の整形が進み、穿孔後の細部加工途中の状態である。いずれも形態的な特徴から、広鋸A類に属する。第3図12～19は分割直後で、まだ柄を嵌める孔があけられていない状態のものである。12は広鋸A類の未製品。基部上位の突起付け根の成形が行われているが、上端は割り出した時のままで工具痕が残る。それ以外のものは、鋸身全体の成形と稜部の割り出しを行った状態である。これらの未製品については、大きさとその形状からは広鋸A・B両類に加工し得るが、ここでは全長を合わせて加工・成形しているものと考えA類と推定しておく。

小型広鋸（第2図3・4、第4図20～24）：鋸身の下端が平たく幅広で、広鋸の1/2～2/3程度の大きさのものを小型広鋸とした。広鋸と同様に、上部の孔に直柄を付けて使用する。第2図3・4及び第4図20・21は、どれも完形又は全体を推定し得る程度に欠損した例である。縦長の三角形状を呈し、後面中央には広鋸よりも小振りな稜部を持つ。出土する量は他の鋸身よりも少ないが、広鋸と同様に一つの材から連続成形される。広鋸と同様に、アカガシ亜属の柾目材を使用している。

狭鋸（第2図5・6、第4図25）：鋸身下端が平たいもののうち、比較的幅の狭いもの。膝柄と呼ばれる、下方に屈折した柄を付けて使われる。第2図5は狭鋸の鋸身としてはやや小さく、基部は明瞭な段で分けられており平坦に加工されている。また着柄箇所には二段の段が作出されている。6も膝柄狭鋸で基部を欠損。基部へ向かって両側面を抉り込んでいる。アカガシ亜属の柾目材を使用している。

狭鋸未製品（第2図13、第4図26）：狭鋸も広鋸と同様に連続製作され、切り離し後に細部加工を行う。図示した例はいずれも分割直後の未製品で、細部の加工途中の状態である。

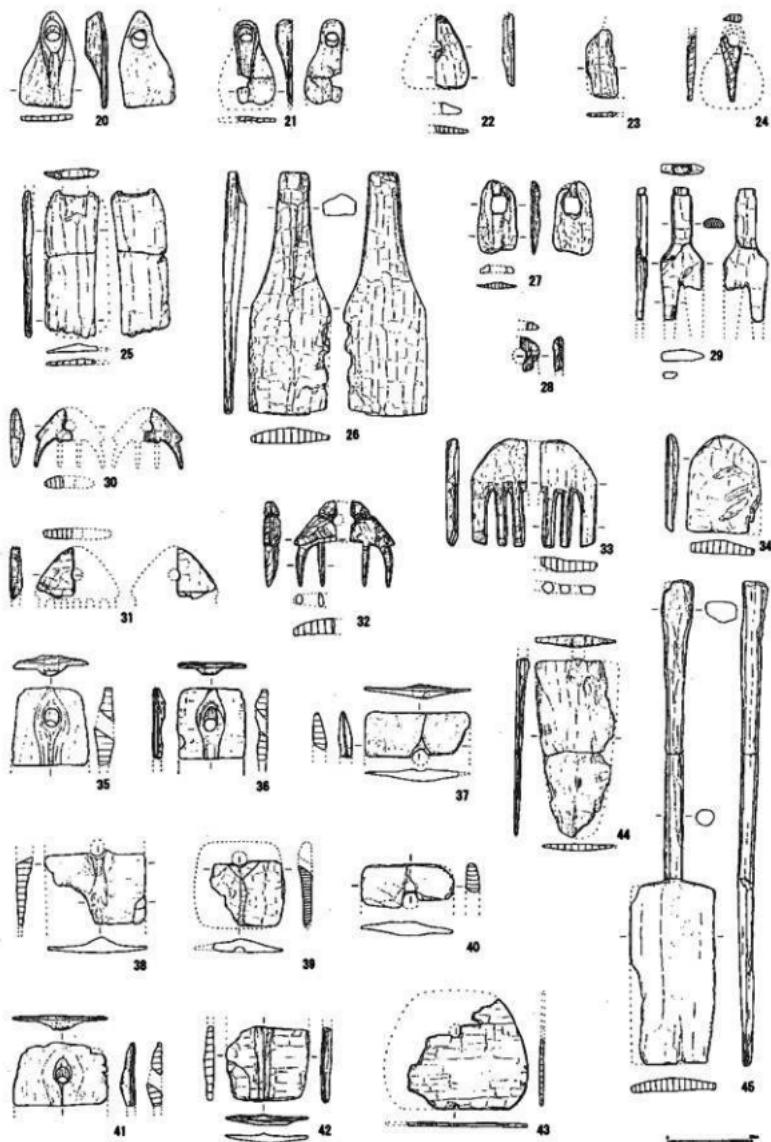
小型狭鋸（第2図7、第4図27・28）：鋸身が狭鋸の半分以下のものを小型狭鋸とした。上部に孔を持ち、直柄を付けて使う。第2図7は旧河道の試掘坑から出土したもので、完形の事例である。全体が端部に向けて僅かに広がり、中央より上位の位置に方形の孔を持つ。アカガシ亜属の柾目材を用いる。

又鋸（第2図8・9・10、第4図29～32）：鋸身が小振りで三角・半円・方形を呈し、下端に3～5本の細い歯を削りだしているもの。身の中央付近に孔を持ち、直柄を付けて使用する。両側面の歯の付け根付近に突起を持つもの（第2図9、第4図30）や、更に鋸身上端に装飾的な段差を削り出しているもの（第4図32）などがあるが、出土例自体の数が少ないため、現時点では広鋸のような類型別の細分を行わない。

又鋸未製品（第2図14、第4図33・34）：第2図14は五本歯に整形する直前の状態で、離れて出土した二片が接合したものである。第4図33は歯を削りだした直後の状態。同図34はアカガシ亜属の柾目材を必要な大きさに切り、上部を半円形に加工している。又鋸は他の鋸身と違い、单品で加工・生産されたことがわかる。

横鋸（第2図11、第4図35～42）：鋸身が方形もしくは長方形で、下端だけでなく両側面も刃のように薄く平坦に加工される。後面中央に稜部を持ち、上方寄りに孔を穿ち直柄を付けて使われる。横鋸も他の鋸身と同様に縦長の材で連続製作されるが、唯一特異な点は、その柾目材を横向きにして製作されることである。

鋤（第2図15・16、第4図44・45）：第2図15は組合せ式鋤の柄で、把手の片側を欠損する。アカガシ亜属の削材を加工しており、芯持ち材を使用している鋤柄とは用材の選択自体が異なる。同図16はNo1-A南地点の2号旧河道から出土した。非常に薄手で各所に加工痕を残している。基部近くの両側面に抉りが入れられている。第4図44は鋤の一部で、鋤先の部分だけが残ったもの。同図45は一木鋤の未製品で、成形後の段階で細部の加工を行う前の状態である。どれもアカガシ亜属の柾目材を使用している。



第4図 池子遺跡群出土の弥生時代木器農工具② [1/12]

泥除（第4図43）：鍔身の前面側に装着し、同じ柄に嵌めて使用する板状のもので、掘削時の泥除けのためのものと考えられている。アカガシ亞属の柾目材を、横方向に使用している。池子遺跡群においては、出土例は極めて少ない。

5. 弥生時代旧河道の遺物出土状況にみる時間的な変遷

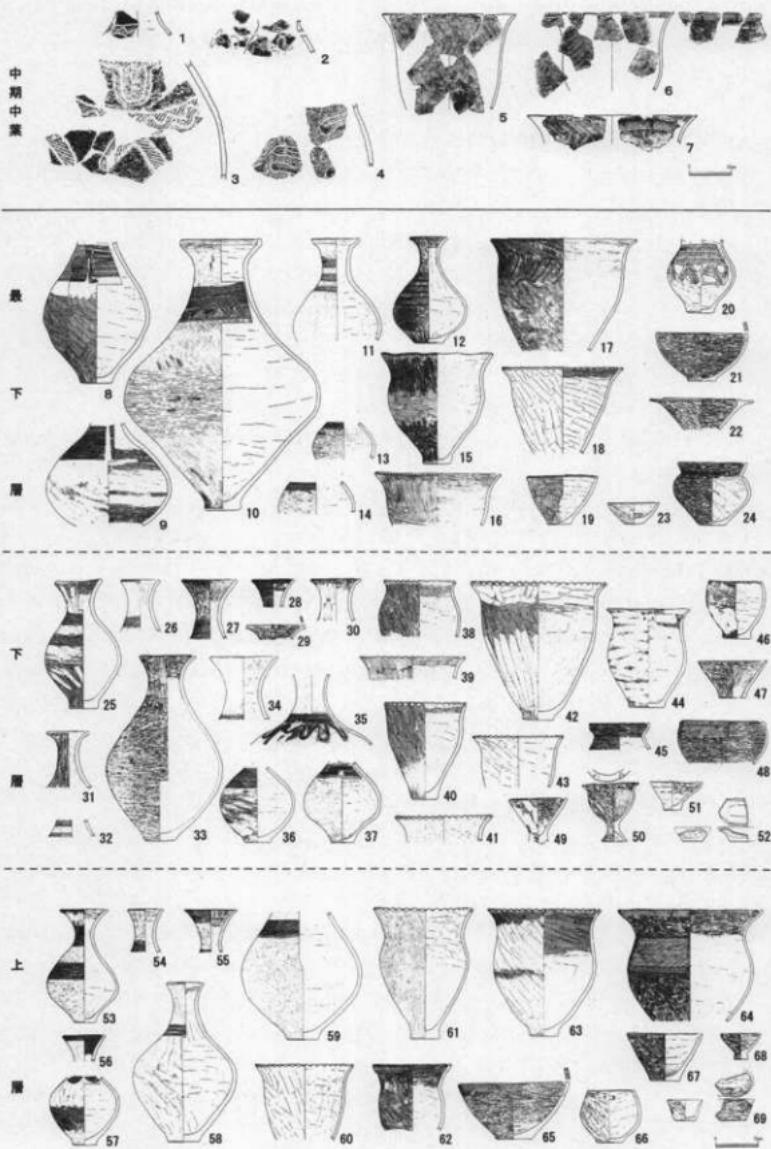
前節で述べた木器農工具は、弥生時代旧河道の最下層～上層にかけて、種々雑多な木製品やその未製品の他、多量の土器・石器・骨角器と共に出土している。その出土状況は、覆土中の各層で複数種別の遺物が混在しているといったもので、特定の種別の遺物や器種への偏りなど、何か意図を持って埋められたような規則性・法則性を窺わせる状態ではない。河道が長期間かけて漸移的に埋没していくのに伴い、製作途中の木製品を保管・加工するために水漬けにしたものや、様々な種別の製品が廃棄されたものが包含されていったと考えられる。第5・6図は池子遺跡群No1-A地点の弥生時代旧河道のうち、D-XI-91グリッドに該当する部分から出土した土器と木製品について、各層位別に提示したものである。土器は最下層・下層・上層にわたり包含され、帰属時期の主体は中期後葉の宮ノ台式土器の古相から終末まで全体にまたがっている（第5図）。ただし河道底面から最下層にかけて、更に古い中期中葉段階の壺・甕の破片が出土しており、埋没当初から、包含する遺物の時期には時間的な混交が認められる（註5）。よって宮ノ台式土器を主体とする部分についても、河道の覆土が上層に移行するに従い、遺物の様相も古相から新相に向かって漸移的に変化する、といった整然かつ理解しやすい状況などではない。以下、各層毎の出土土器の様相を詳述する。

最下層：壺は櫛描文を主体とするもの（第5図8・9）や複合鋸齒文と縄文の組合せ例（10）のほか、沈線区画を持つ縄文帯や羽状縄文帯を主要な文様要素とするもの（11・12）などがみられる。甕は刷毛目主体のもの（15・16）、刷毛目を地に櫛齒状工具による横羽状文を加えるもの（17）、ヘラナデにより整形されるもの（18）など様々である。この他に小型の鉢（19）や碗（21・23）、鍔付の東海系高坏（22）も存在する。本層全体としては、宮ノ台式土器の変遷段階におけるⅡ段階の様相を示す資料が目立つものの、一部には明らかにⅢ段階の様相を持つ資料も含まれており、Ⅱ～Ⅳ段階にかけて埋没したものと推定される。

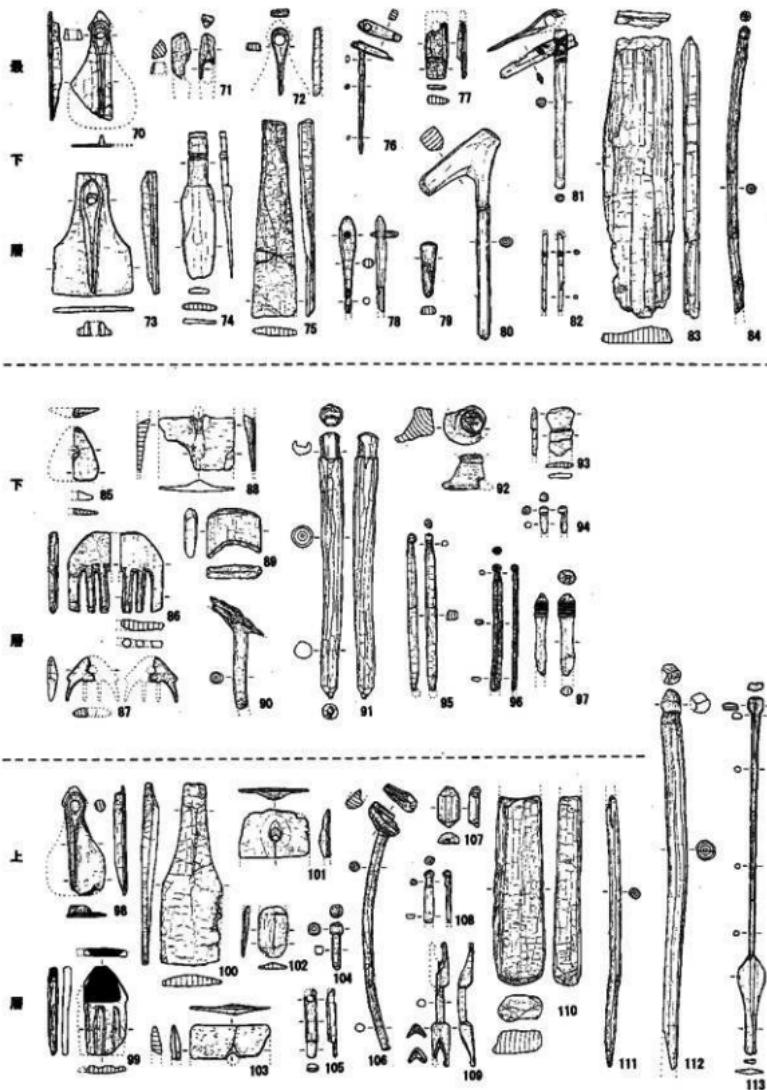
下層：壺は縄文の横帯と細沈線の組合せを主文様とするもの（25～27・36）や、刷毛目調整のみの簡素なもの（31・33）等、文様帯の縮小傾向がみられる。甕も刷毛目のみの例（38～40）や刷毛目地にヘラナデを加えるもの（42）、全面ヘラナデのもの（43・44）などがみられ、刷毛目が盛行し主体となっている。他の器種としては、小型の台付甕（50）や碗（48）、小型の鉢（47・51・52）などがみられる。これらの特徴を総合すると、本層出土の遺物はⅢ段階とⅣ段階両方の特徴を含んでおり、Ⅲ～Ⅳ段階にかけて埋没したものと考えられる。

上層：壺は下層の例より更に文様帯の縮小化・単純化が進んでおり、縄文帯や羽状縄文帯のみ施文されるもの（53～55・59）や櫛齒状工具による横線のみのもの（57・58）などがある。甕は下層と同様に、刷毛目主体のもの（61・62）やヘラナデ整形によるもの（60・63）の他、壺と同様に羽状縄文帯を巡らすもの（64）も見られる。小型の碗（66）や鉢（67～69）も組成している。全体的にⅤ段階の傾向が非常に強いが、一部に下層と同じ様相を持つ土器も含んでおり、確実な範囲としてはⅣ～Ⅴ段階にかけて埋没したものと推定される。

これら各層の出土土器の様相は、それぞれ上下の層の様相と時期的に重複する部分を持っており、各層毎にこの帰属時期に埋没した可能性が指摘できる、という段階にとどまっている。最下層と下層、下層と上層間でそれぞれ土器が接合する事例があり、出土遺物の様相としても単純に最下層→下層→上層という段階設定が出来る訳ではない。しかし最下層と上層の間に遺物の接合関係は認められず、遺物の様相としても重複



第5図 池子No 1-A地点旧河道 D-XI-91区出土土器 [1/12]



第6図 池子No1-A地点旧河床 D-XI - 91区出土木製品 [1/12]

	広頭(A種)	広頭(B種)	小型広頭	狭頭	小型狭頭	又頭	横頭
最下層 2・3段階							
下層 3・4段階							
上層 4・5段階							

▲を付したものは未製品

第7図 池子遺跡群出土 弥生時代農工具の変遷 [1/16]

する部分は見られない。つまり上下に連続する各層から出土した遺物群同士で、相対年代として「部分的に重複する可能性がある」のであって、旧河道の出土土器全体としては、その埋没過程に伴い河道底面から覆土上層に向けて時間的な変遷が存在することは間違いない事実である。それを各層位に対応して累重的に土器の変遷過程を提示できないだけで、上層の土器群が下層出土の土器群よりも明らかに古い、又は最下層の土器群が下層の土器群よりも明らかに新しい様相である、といった様な混在は見られない。

同様に、各層から出土している木製品についても、その埋没時期について最下層はⅡ～Ⅲ段階、下層はⅢ～Ⅳ段階、上層はⅣ～Ⅴ段階にそれぞれ帰属する可能性が高いことが指摘出来る(第6図)。土器の場合と同様に、各層から出土した木製品もまた、あくまでも埋没時期であるという前提付きではあるが、全体的に最下層から上層に向けて時間的な変遷が存在するものと考えられる。これを弥生時代旧河道出土の木器農工具全体に当て嵌めて考えた場合、層位的な位置付けからみた変遷段階を各器種別に提示すると、第7図のようになる。以下、各器種・類型別に想定される変遷過程と所見を詳述する。

広鎌A類：広鎌のうち幅狭で長い鍔を持つA類は、最下層・下層・上層全てに分布する。基部上位に特徴的な三角形状の突起を出す事や、柄孔が全体的にやや上端よりに位置する事を含めて、Ⅱ段階～Ⅴ段階にかけて特に大きな変化はない。強いて言えば、ごく僅かに器長が短くなる傾向が見られる。

広鎌B類：広鎌のうち幅広で短めの鍔を持つB類は、下層及び上層から出土しており、Ⅲ～Ⅴ段階に見られる。B類自体の出土例が比較的少いこともあってか、下層と上層の資料間に大きな相違は見られない。**広鎌A類との比較**で言えば、A・B両類型はA類が僅かに先行するが、時間的にはほぼ重複・併行することから、元々用途・目的が異なるものか、又はA類からB類が派生した可能性もある。広鎌B類は柄孔がやや下方に穿たれ、より重心に近い位置に柄を通して使うことになる。前面側の孔上位に段差を持つ例がB類に限られることや、基部上位の突起が必ず平坦に加工され泥除の装着用であるとすれば、A・B両類の違いは泥除装着用の鍔と装着しない鍔、という使い分けであるかもしれない。また大きさからの推定という前提付きではあるが、A類の未製品は何点も出土しているのに対し、明瞭なB類の未製品という物自体が見出せないことが判った。

小型広鎌：広鎌B類と同様に、下層及び上層から出土している。もともと小型広鎌自体の出土例自体が他の鍔身と比べて少なく、個体毎の特徴も強い。現時点では特にⅢ段階～Ⅴ段階にかけての変化は見られない。

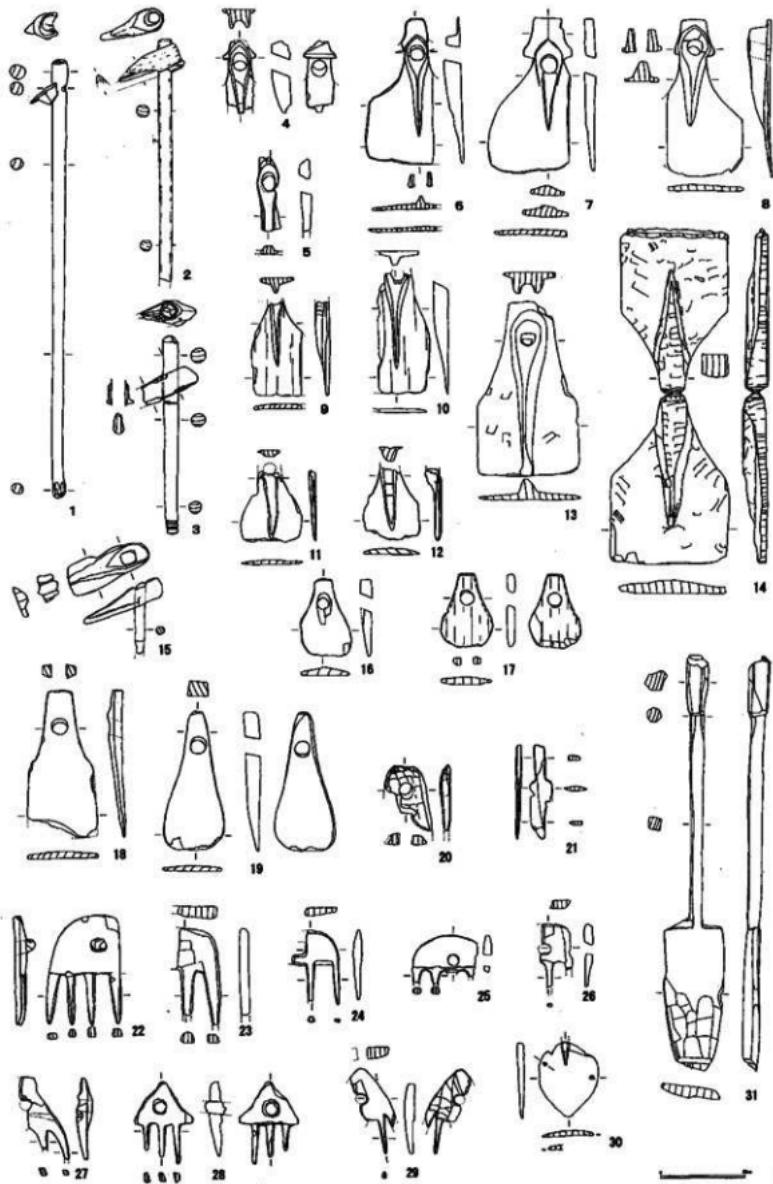
狭鎌：最下層と下層からは出土しているが、上層からの出土例を欠く。もともと出土例自体の数が多くはなく個体差も大きい。Ⅱ～Ⅳ段階の資料が認められる。

小型狭鎌：狭鎌とは逆に上層からのみ出土している。同様に個体差が大きく、Ⅳ～Ⅴ段階の資料がみられる。

又鎌：最下層・下層・上層全てに分布し、Ⅱ～Ⅴ段階の資料が認められる。鍔身の形状だけでなく、歯の長さにより长短二種に分かれる傾向がみられる。

横鎌：下層及び上層で出土しており、Ⅲ～Ⅴ段階の資料がみられる。特に出土例間の変化は確認できない。

全ての鍔身に共通して言えることは、樹種の選択・木取りと器種との相関関係は極めて強いことが実見により確認できた。横鎌以外の鍔身は必ず縦木取りの柾目材を用いており、使用時に力がかかる方向と年輪や放射状組織との方向を意識して取材していたことが窺われる。鍔柄は直柄・藤柄共に枝材(芯持ち材)を用いることが多いが、鍔柄は柾目材や削材で作られていた。



第8図 千葉県常陸勝出土の弥生時代木器農工具 [1/12]

6. 周辺地域における弥生時代木器農工具の出土事例との比較

前節までの間に、池子遺跡群の弥生時代旧河道から出土した木器農工具について、器種毎の特徴と変遷について分析を行った。その所見に基づいて、本節では周辺地域での出土事例との比較を行い、木器農工具にみる地域相の検討を行う。

(1) 千葉県域における弥生時代中期の木器農工具

千葉県域では君津市常代遺跡群でも池子遺跡群と同様に弥生時代中期の旧河道が検出されており、覆土の下層～中層にかけて多量の木器農工具が出土している(第8図)。器種組成は池子遺跡群の出土例と良く似ており、違うのは横鋸が存在しないことと、組合せ式の鋸先に特徴的な例が存在する事くらいである。

広鋸(1~12・15)：常代遺跡の場合も直柄広鋸で、1~3は着柄した状態で出土した。柄はそれぞれ削材を加工している。4・5は基部の破片で、基部上位の突起を持つが、欠損のため形状は不明である。4は前面の孔直上に段差を削り出している。6~8は最大長が約40cm程度の大型で、最大幅が約30cm程度を測る、幅広の鋸身である。後面中央に短めの隆起があり、基部の上位に板状の突起を持ち、上端を平坦に加工する。

9・10は幅狭な鋸身で、柄孔以上を欠損しているために最大長は不明である。11・12は全体的にやや小振りのもので、後面中央に浅い隆起を持つ。15は同様のものが着柄した状態で出土した。

広鋸未製品(13・14)：13は比較的幅狭の鋸身未製品。柄孔は貫通しておらず、前後両面から穿つ途中の状態である。14は2連で対向するように削り出されたもの。6~8のような幅広の鋸身の未製品である。

小型広鋸(16・17)：16・17は共に長さ約20cm弱の小型のもので、側面が湾曲した台形状を呈する。16は后面中央が僅かに隆起している。片側は被熱により炭化している。前面側は平坦に整形される。

狭鋸(18・19)：全体的に平坦で、後面中央に僅かな稜部を持つ。着柄部分に向か幅が狭まる形状である。

小型狭鋸(20・21)：平坦で逆台形状を呈する。下半が欠失しているため、全体の規模は不明である。

又鋸(22~29)：22~25は鋸身が半円形で4~6本の長めの歯を持つ。26は方形の、27は台形の身に4本程度の歯を持つ。28・29は三角形の身にやや長めの歯を3~5本持つ。いずれも鋸身の中央に柄孔を穿たれる。

鎌(30・31)：30は極めて薄手で平滑な衛先で、先端は鋭利な刃部を持つように加工されている。31は一木箒の未製品で、全体を削りだした後の細部加工直前の状態である。

(2) 静岡県域における弥生時代中期の木器農工具

静岡県域では、有東遺跡、梶北遺跡、角江遺跡などの低地遺跡で弥生時代の旧河道が検出され、木器農工具が出土している(第9図)。器種組成は池子遺跡群や常代遺跡群に類似するが、横鋸が存在しないこと、関東地方には存在しない器種の鋸身がみられる点で異なっている。

広鋸(1~11)：比較的幅狭で、後に舟形隆起を持ち、基部上位に三角形状を呈する突起を持つものが殆どで、柄孔は円形と方形の両方がある。

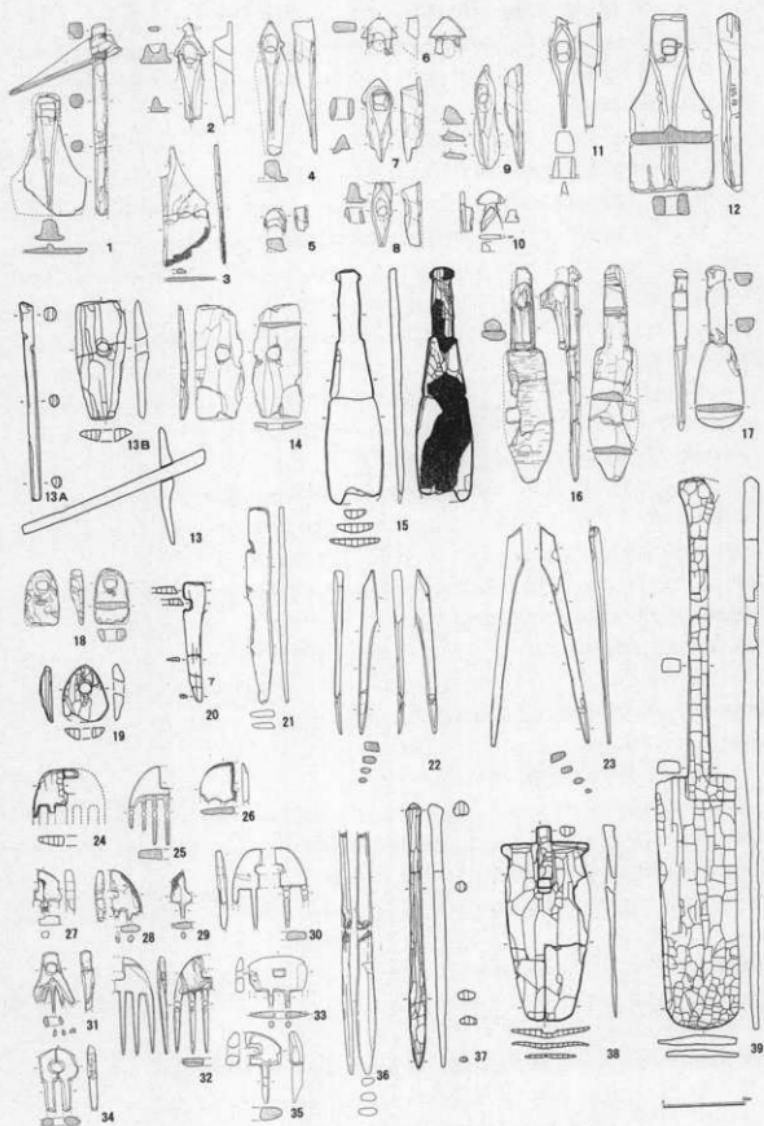
広鋸未製品(12)：幅狭でやや厚手の未製品。方形孔を持ち、各所の細部整形前の段階である。

平鋸(13・14)：最大長約30cm程度の短冊形又は逆台形を呈する鋸身で、中央やや上方よりに柄孔を有する。後面側中央には僅かな隆起を持つ。

狭鋸(15~17)：大小様々な鋸身が存在するが、何れも藤柄を着装する部分を明瞭に区画し、着柄用の稜を削り出している。身の端部は平坦なもの(15)、尖ったもの(16)、湾曲するもの(17)がある。

小型狭鋸(18・19)：小型で片面に緩い稜をもつ直柄の鋸である。上方寄りに柄孔を有する。

又鋸(20~35)：20~23は大型で薄手の鋸身である。20・21は二又の、22・23は3~4本の多又を呈する。



第9図 静岡県域における弥生時代中期の木器農工具 [1/12]

24~35は小型の銀身である。銀身の形状は半円(24~30・32)・台形(31)・方形又は長方形(33~35)の各種があり、3~6本の長い歯を持つ。柄孔は方形を呈する。

振り棒(36・37)：長さ65~70cm程度の削材の先端を尖らせ、平坦な棒状の道具に加工したもの。先端が摩滅していることから、掘削用の道具だと考えられている。

鋤(38~39)：38は組合せ式の鋤先。基部側付け根に突起を持ち、上方には方形孔を有する。39は一本鋤の未製品。細部加工の途中の状態である。

(3) 池子遺跡群の弥生時代木器農工具との比較と所見

先述のように、池子遺跡群と千葉県の常代遺跡群、そして静岡県の有東・梶子北・角江の各遺跡から出土した木器農工具は、基本的な器種構成は類似するが組成比はまるで異なり、それぞれ若干の相違点もみられる。以下、各器種毎に列記し、地域相の把握としての検討に繋げたい。

広鋤：池子遺跡群の広鋤が形態的な特徴でA・B類の2種に分類出来るのに対し、常代遺跡群では大型で幅広のものと、やや小振りで幅狭なものに分かれる。常代の銀身は特に大型で、池子のものよりも一回りは大きい。静岡県域の事例では幅狭で長く、柄孔が方形孔・円孔であるなど遺跡により細部の属性が異なる。

小型広鋤：池子・常代共に存在するが、形態・細部属性が異なる。静岡県域には見られないが、その代わりに平鋤ともいべきもののが存在する。

狭鋤：常代は簡素で着柄部を細く削るのみのもの。静岡県域では着柄部を後部・段差等で明確に区別して加工する。池子の場合はこの両者が存在する。

小型狭鋤：池子・常代・静岡県域共に同様の器種が存在するが、銀身の形状から細部形態に至るまで異なる。

又鋤：銀身が半円・三角・方形を呈するものがあり、長短両方の歯が3~6本付される。どの地域でもほぼ同じ様相を呈する唯一の器種である。

横鋤：明瞭に組成するのは池子のみで、常代・静岡県域共に確認されない。

こうして器種毎の地域間の比較を行ってみると、木器農工具としての基本的な構成はほぼ同列にあっても、広鋤や又鋤等の、各器種それぞれの大きさや細部形状等の属性は一致しない事がが多い。同じ静岡県域の遺跡同士であっても、遺跡毎に違う場合も認められる。こうした木製品にみる遺跡間の差異が存在する場合、その理由には次のようなことが考えられる。

①木製品の製作がその集落内、又は幾つかの集落で構成される共同体の中だけで行われ、他地域の集落には供給されない。但し何らかのレベルでの技術的な交流は存在する。これは、池子と常代のような他地域の集落同士であっても広鋤の同じ2種の類型が存在し、未製品と併せて考えると製作技法もほぼ同一のものである。しかし基部上位の突起の断面形は板状と菱形とで異なっている。全く隔絶している訳ではないが、両者は細部に至るまでの整形技法を共有する程の交流は持っていない。

②木材は当該集落をとりまく環境の中で獲得される。例えば同じアカガシ亜属の柾目材を使用して製作される広鋤でも、集落間で明らかに大きさや細部形状が異なる場合、使用可能な材自体の限界が地域による差となって現れているということになる。また器種によっては意図的に小さいサイズを保っており、一元的により大きな材の獲得を必要とする訳ではないことも注意を要する。

所見に記したような木器農工具の様相にみる地域間の相違点は、同時期の土器及び石器の様相と併せて比較・検討することで、弥生時代における地域社会の実像の一端を解明する手がかりとなるものである。

しかしながら現状では未だ南関東地方と東海地方の一部の資料についての比較検討作業に留まり、研究は東

北・中部・北陸・東海等の周辺諸地方における木器農工具との比較に移行したところである。早急に各地方における資料の実見・観察をすすめることが、本研究の当面の課題である。

本稿提出にあたっては、研究紀要編集担当の富永樹之氏に様々な点で御配慮を賜った。資料の実見については、逗子市教育委員会の佐藤仁彦氏、君津市教育委員会の豊巻幸正・矢野淳一・當眞紀子の諸氏らに格別のご配慮を賜った。

また執筆にあたり、何人かの方々より御指導・御教示をいただいた。文末ではあるが、皆様の御名前を記すことで感謝の意を表したい。

上田 煙、大上周三、大島慎一、柏木善治、谷口 肇（敬称略・五十音順）。

註

- (註1) 摂製2003『長原壹と石器』『考古論叢 神奈川』第十一集、及び『弥生時代中期における打製石斧の地域性』『神奈川考古』第39号
- (註2) 倍数の形式組列がなるべく長期間にわたり確保されることが望ましい。神奈川県域における宮ノ台式土器の編年研究を進展させるには、特に砂田台遺跡のような調査事例での一括資料から形式組列を見出す作業が必要不可欠であろう。
- (註3) 銀身の表裏両面のうち、使用者の側となる面を前面、裏を後面と呼称する。
- (註4) 広鉗で前面に段差を持つ例について、谷口肇氏は泥除の着装用の加工であることを指摘している。また基部上の突起の形態により、広鉗が2類に分類出来る可能性もまた既に指摘されているところである（山本・谷口1999）。
- (註5) 池子遺跡群の弥生時代旧河道からは、河道底面から最下層にかけて、弥生時代初頭～中期前葉の土器も僅かながら出土している。

引用・参考文献

- 安藤広道 1990『神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分－遺跡群研究のためのタイムスケールの整理－』『古代文化』第42巻6・7号
- 1991『相模湾沿岸地域における宮ノ台式土器の細分』『唐古』田原本唐古整理室OB会
- 飯塚武司 2001『農耕社会成立期の木工技術の伝播と変容』『古代学研究』155号 古代学研究会
- 2003『弥生時代中期後半の南関東における木工生產』『考古学研究』196号 考古学研究会
- 2004『弥生時代の木器生產を巡る諸問題』『考古学研究』201号 考古学研究会
- 石井 寛・倉沢和子 1980『折本西原遺跡』横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 上田 煙・岡本孝之 1980『新羽大竹遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告17 神奈川県教育委員会
- 大島慎一 2000『第Ⅳ章第1節出土遺物の分析』『王子ノ台遺跡』第Ⅲ巻弥生・古墳時代編 東海大学校地内遺跡調査団
- 大村浩司 1988『下寺尾西方A遺跡』茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報告1 茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会
- 及川良彦 1987『弥生土器の移動と地域性－鎌倉出土の弥生土器を中心として－』『青山考古』第5号 青山考古学会
- 甲斐博幸他 1986『常代遺跡群』財团法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第112集
- 神奈川県立博物館 1969『神奈川県考古資料集成』1 弥生式土器
- 工業普通・黒崎 直也 1994『特集 先史時代の木工文化』『季刊考古学』第47号 雄山閣
- 宍戸信悟・上本進二 1989『砂田台遺跡I』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20
- 宍戸信悟・谷口 肇 1991『砂田台遺跡II』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20

- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994「古代における農具の変遷－播磨技術史を農具から見る－」
- 杉山幾一ほか 1986「羽根尾原ノ上遺跡」小田原市文化財調査報告書第19集
- 滝澤 亮ほか 1989「山神下遺跡」山神下遺跡発掘調査団
- 中山正典 1994「第Ⅴ章第3節 静岡県における弥生時代・古墳時代の木製農耕具」「瀬名遺跡Ⅲ（遺物編Ⅰ）」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第47集（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 永井正憲他 1984「手広八反目遺跡発掘調査報告書」手広遺跡発掘調査団
- 中川律子 1996「角江遺跡Ⅱ 遺物編2（木製品）」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第69集
- 中山正典・中鉢賛治 1994「瀬名遺跡Ⅲ（遺物編Ⅰ）」静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第47集
- 種上 升 1990「弥生時代中期における木製農耕具の器種組成について」「岡島遺跡」愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第14集
- 2000「『木製農耕具』ははたして『農耕具』なのか」「考古学研究」第47巻第3号
- 日野一郎・伊東秀吉・杉山博久 1985「秦野市史」別巻考古編 秦野市
- 平野哲郎・中川律子他 1983「有東遺跡Ⅰ下」静岡県文化財調査報告書第28集 静岡県教育委員会
- 宮原俊一他 2000「王子ノ台遺跡」第Ⅲ巻 弥生・古墳時代編 東海大学校地内遺跡調査団
- 望月幹夫・山田不二郎他 1983「子ノ神（Ⅱ）」厚木市教育委員会
- 1998「子ノ神（Ⅳ）」厚木市教育委員会
- 山田昌久 2006a「遺跡発見の植物と木工技術からみた人と森の関係史」「日本植生史学会第21回大会講演要旨集」日本植生史学会
- 2006b「弥生時代における沖積平野居住者のスギ大経木利用構想」「日本植生史学会第21回大会講演要旨集」日本植生史学会
- 山本輝久・谷口 肇 1999「池子遺跡群X No1-A地点」かながわ考古学財団調査報告46
- 弥生時代研究プロジェクトチーム 2002~2005「宮ノ台式土器の研究(1)~(4)」「研究紀要7~10 かながわの考古学」
(財)かながわ考古学財団

第1表 弥生中期木製品農工具 分析資料一覧

No	遺跡名	図	No	出土地点	器種	部 位	時 期	報告書 図 No	樹種と本取り	
									樹種	本取り
1	池子No1-A	2	1B	旧河道	広歛	両端欠損	中期後半	194	70	アカガシ亜属 柄目
2	池子No1-A	2	1A	旧河道	広歛柄	一部欠損	中期後半	194	69	サカキ 丸木材
3	池子No1-A	2	2	旧河道	広歛	一部欠損	中期後半	200	30	アカガシ亜属 柄目
4	池子No1-A	3	5	旧河道	広歛	基部破片	中期後半	194	71	アカガシ亜属 柄目
5	池子No1-A	3	9	旧河道	広歛	端部欠損	中期後半	212	128	アカガシ亜属 柄目
6	池子No1-A	3	3	旧河道	広歛	両側欠損	中期後半	212	129	アカガシ亜属 柄目
7	池子No1-A	3	2	旧河道	広歛	片側欠損	中期後半	227	66	アカガシ亜属 柄目
8	池子No1-A	6	72	旧河道	広歛	基部破片	中期後半	287	394	アカガシ亜属 柄目
9	池子No1-A	3	1	旧河道	広歛	端部欠損	中期後半	287	392	アカガシ亜属 柄目
10	池子No1-A	3	4	旧河道	広歛	片側欠損	中期後半	287	391	アカガシ亜属 柄目
11	池子No1-A	3	8	旧河道	広歛	端部欠損	中期後半	83	92	アカガシ亜属 柄目
12	池子No1-A南	3	6	旧河道	広歛	中央断片	中期後半	83	93	アカガシ亜属 柄目
13	池子No1-A東	3	7	旧河道	広歛	片側欠損	中期後半	220	26	アカガシ亜属 柄目
14	池子No1-A南	2	3	旧河道	小型広歛	端部欠損	中期後半	53	63	アカガシ亜属 柄目
15	池子No1-A南	2	4	旧河道	小型広歛	片側欠損	中期後半	85	99	アカガシ亜属 柄目
16	池子No1-A	4	20	旧河道	小型広歛	片側欠損	中期後半	412	82	アカガシ亜属 柄目
17	池子No1-A	4	21	旧河道	小型広歛	片側欠損	中期後半	393	72	アカガシ亜属 柄目
18	池子No1-A	4	22	旧河道	小型広歛	片側欠損	中期後半	288	398	アカガシ亜属 柄目
19	池子No1-A	4	23	旧河道	小型広歛	端部破片	中期後半	227	67	アカガシ亜属 柄目
20	池子No1-A	4	24	旧河道	小型広歛	基部破片	中期後半	200	31	アカガシ亜属 柄目
21	池子No1-A	2	5	旧河道	勝柄狭歛	完形	中期後半	288	399	アカガシ亜属 柄目
22	池子No1-A	2	6	旧河道	勝柄狭歛	基部欠損	中期後半	314	258	アカガシ亜属 柄目
23	池子No1-A	4	25	旧河道	勝柄狭歛	基部欠損	中期後半	412	83	アカガシ亜属 柄目
24	池子No1-A	2	7	旧河道	小型狭歛	端部欠損	中期後半	194	72	アカガシ亜属 柄目
25	池子No1-A	4	27	旧河道	小型狭歛	端部欠損	中期後半	214	142	アカガシ亜属 柄目
26	池子No1-A	4	28	旧河道	小型狭歛	破片	中期後半	212	130	アカガシ亜属 柄目
27	池子No1-A	2	8	旧河道	直柄又歛	ほほ完形	中期後半	201	33	アカガシ亜属 柄目
28	池子No1-A	2	9	旧河道	直柄又歛	先端欠損	中期後半	212	133	アカガシ亜属 柄目
29	池子No1-A南	2	10	旧河道	直柄又歛	完形	中期後半	85	101	アカガシ亜属 柄目
30	池子No1-A	4	29	旧河道	直柄又歛	先端欠損	中期後半	186	33	アカガシ亜属 柄目
31	池子No1-A	4	30	旧河道	直柄又歛	片側欠損	中期後半	287	395	アカガシ亜属 柄目
32	池子No1-A	4	31	旧河道	直柄又歛	片側欠損	中期後半	212	134	アカガシ亜属 柄目
33	池子No1-A	4	32	旧河道	直柄又歛	片側欠損	中期後半	212	135	アカガシ亜属 柄目
34	池子No1-A	2	11	旧河道	横歛	完形	中期後半	194	75	アカガシ亜属 横方向柄目
35	池子No1-A	4	35	旧河道	横歛	端部欠損	中期後半	314	255	アカガシ亜属 横方向柄目
36	池子No1-A	4	36	旧河道	横歛	端部欠損	中期後半	336	271	アカガシ亜属 横方向柄目
37	池子No1-A	4	37	旧河道	横歛	下半欠損	中期後半	289	403	アカガシ亜属 横方向柄目
38	池子No1-A	4	38	旧河道	横歛	下半破片	中期後半	289	404	アカガシ亜属 横方向柄目
39	池子No1-A	4	39	旧河道	横歛	下半破片	中期後半	187	36	アカガシ亜属 横方向柄目
40	池子No1-A	4	40	旧河道	横歛	下半欠損	中期後半	289	404	アカガシ亜属 横方向柄目
41	池子No1-A	4	41	旧河道	横歛	端部欠損	中期後半	289	402	樹種不明 横方向柄目
42	池子No1-A	4	42	旧河道	横歛	上半欠損	中期後半	374	11	アカガシ亜属 横方向柄目
43	池子No1-A	2	12	旧河道	広歛未製品	完形	中期後半	287	393	アカガシ亜属 柄目
44	池子No1-A	3	10	旧河道	広歛未製品	端部欠損	中期後半	393	71	アカガシ亜属 柄目
45	池子No1-A	3	12	旧河道	広歛未製品	片側欠損	中期後半	417	49	アカガシ亜属 柄目
46	池子No1-A	3	11	旧河道	広歛未製品	端部欠損	中期後半	75	54	アカガシ亜属 柄目
47	池子No1-A	3	13	旧河道	広歛未製品	完形	中期後半	417	51	アカガシ亜属 柄目
48	池子No1-A	3	14	旧河道	広歛未製品	完形	中期後半	351	122	アカガシ亜属 柄目
49	池子No1-A	3	15	旧河道	広歛未製品	片側欠損	中期後半	212	132	アカガシ亜属 柄目
50	池子No1-A	3	16	旧河道	広歛未製品	端部欠損	中期後半	382	56	アカガシ亜属 柄目

No.	遺跡名	図	No.	出土地点	器種	部位	時期	報告書		樹種と木取り
								図	No.	
51	池子No 1-A	3	17	旧河遺	広鉢未製品	完形	中期後半	312	243	アカガシ亜属 横目
52	池子No 1-A	3	18	旧河遺	広鉢未製品	片側欠損	中期後半	351	123	アカガシ亜属 横目
53	池子No 1-A	3	19	旧河遺	広鉢未製品	片側欠損	中期後半	372	33	アカガシ亜属 横目
54	池子No 1-A	2	13	旧河遺	狭鉢未製品	完形	中期後半	314	259	アカガシ亜属 横目
55	池子No 1-A	4	26	旧河遺	狭鉢未製品	完形	中期後半	288	400	アカガシ亜属 横目
56	池子No 1-A	2	14	旧河遺	又鉢未製品	完形	中期後半	312	247	アカガシ亜属 横目
57	池子No 1-A	4	33	旧河遺	又鉢未製品	片側欠損	中期後半	287	396	アカガシ亜属 横目
58	池子No 1-A	4	34	旧河遺	又鉢未製品	端部欠損	中期後半	312	246	アカガシ亜属 横目
59	池子No 1-A	4	43	旧河遺	泥除	片側欠損	中期後半	417	52	アカガシ亜属 横方向横目
60	池子No 1-A	2	15	旧河遺	組合式鋸歯	把手破損	中期後半	375	7	アカガシ亜属 横目
61	池子No 1-A	2	16	旧河遺	組合式鋸歯	完形	中期後半	47	62	アカガシ亜属 横目
62	池子No 1-A	4	44	旧河遺	一木撃？	鋸先部のみ	中期後半	384	62	アカガシ亜属 横目
63	池子No 1-A	4	45	旧河遺	鋸未製品	端部欠損	中期後半	337	276	アカガシ亜属 横目
64	常代	8	1	SD 220	広鉢・柄	一部欠損	中期後半	692	60	身:アカガシ亜属 柄:サカキ削材
65	常代	8	2	SD 220	広鉢・柄	一部欠損	中期後半	692	58	身:アカガシ亜属 柄:ムクロジ削材
66	常代	8	3	SD 220	広鉢・柄	一部欠損	中期後半	692	59	身:アカガシ亜属 柄:ヤマグワ削材
67	常代	8	4	SD 220	広鉢	基部破片	中期後半	691	39	アカガシ亜属 横目
68	常代	8	5	SD 220	広鉢	基部破片	中期後半	692	55	アカガシ亜属 横目
69	常代	8	6	SD 220	広鉢	片側欠損	中期後半	690	32	アカガシ亜属 横目
70	常代	8	7	SD 220	広鉢	片側欠損	中期後半	690	33	アカガシ亜属 横目
71	常代	8	8	SD 220	広鉢	片側欠損	中期後半	690	35	アカガシ亜属 横目
72	常代	8	9	SD 220	広鉢	一部欠損	中期後半	691	43	アカガシ亜属 横目
73	常代	8	10	SD 220	広鉢	一部欠損	中期後半	691	44	アカガシ亜属 横目
74	常代	8	11	SD 220	広鉢	基部欠損	中期後半	690	30	アカガシ亜属 横目
75	常代	8	12	SD 220	広鉢	一部欠損	中期後半	690	31	アカガシ亜属 横目
76	常代	8	13	SD 220	広鉢未製品	一部欠損	中期後半	690	36	アカガシ亜属 横目
77	常代	8	14	SD 220	広鉢未製品	完形2連	中期後半	692	57	アカガシ亜属 横目
78	常代	8	15	SD 220	広鉢・柄	一部欠損	中期後半	692	54	共にアカガシ亜属 横目材
79	常代	8	16	SD 220	小型広鉢	端部欠損	中期後半	690	28	アカガシ亜属 横目
80	常代	8	17	SD 220	小型広鉢	完形	中期後半	690	29	アカガシ亜属 横目
81	常代	8	18	SD 220	狭鉢	先端欠損	中期後半	691	46	クヌギ節 横目
82	常代	8	19	SD 220	狭鉢	完形	中期後半	691	47	アカガシ亜属 横目
83	常代	8	20	SD 220	小型狭鉢	基部のみ	中期後半	691	48	アカガシ亜属 横目
84	常代	8	21	SD 220	膝柄狭鉢？	基部のみ	中期後半	693	76	ヒノキ 横目
85	常代	8	22	SD 220	又鉢・柄	片側欠損	中期後半	692	61	アカガシ亜属 横目
86	常代	8	23	SD 220	又鉢	片側欠損	中期後半	692	62	アカガシ亜属 横目
87	常代	8	24	SD 220	又鉢	片側欠損	中期後半	693	64	アカガシ亜属 横目
88	常代	8	25	SD 220	又鉢	片側欠損	中期後半	692	68	アカガシ亜属 横目
89	常代	8	26	SD 220	又鉢	基部のみ	中期後半	692	66	アカガシ亜属 横目
90	常代	8	27	SD 220	又鉢	片側欠損	中期後半	692	65	アカガシ亜属 横目
91	常代	8	28	SD 220	又鉢・柄	一部欠損	中期後半	692	62	身:アカガシ亜属 柄:ヒノキ
92	常代	8	29	SD 220	又鉢	片側欠損	中期後半	692	67	アカガシ亜属 横目
93	常代	8	30	SD 220	轍？	基部側欠損	中期後半	693	78	アカガシ亜属 横目
94	常代	8	31	SD 220	轍	先端欠損	中期後半	693	79	アカガシ亜属 横目
95	角江	9	1	SR 01 II層	広鉢	一部欠損	中期	14	60	身:アカガシ亜属 柄:ツブライジ 削材
96	角江	9	2	SR 01 北縁 IV層	広鉢	基部破片	中期	15	62	アカガシ亜属 横目

No.	遺跡名	図	No.	出土地点	器種	部 位	時 期	報告書 図 No.		樹種と木取り
								図	No.	
97	角江	9	3	SR 01 Ⅲ層下	広歫	片側欠損	中期	14	58	アカガシ亞属 楊目
98	角江	9	4	SR 01 中層	広歫	両端欠損	中期	15	65	アカガシ亞属 楊目
99	角江	9	5	SR 01 IV層	広歫	基部破片	中期	15	66	アカガシ亞属 楊目
100	角江	9	6	SR 01 中層	広歫	歫身基部片	中期	15	63	アカガシ亞属 楊目
101	角江	9	7	SR 01 Ⅲ層下	広歫	基部破片	中期	15	64	アカガシ亞属 楊目
102	角江	9	8	SR 01 IV層	広歫	基部破片	中期	15	69	アカガシ亞属 楊目
103	角江	9	9	SR 01 北縁 ラミナ層	広歫	両側欠損	中期	15	68	アカガシ亞属 楊目
104	角江	9	12	SR 01 Ⅱ層	広歫未製品	完形	中期	29	156	アカガシ亞属 楊目
105	角江	9	14	SR 01 Ⅱ層	直柄狹歫	片側欠損	中期	15	70	アカガシ亞属 楊目
106	角江	9	16	SR 01 Ⅲ層	曲柄狹歫	歫身・柄破片	中期	21	112	身:アカガシ亞属 楊目 柄:サカキ 芯持ち材
107	角江	9	17	SR 01 中層	曲柄狹歫	歫身 完形	中期	20	111	クヌギ節 楊目
108	角江	9	18	SR 01 V層	小型広歫	歫身端部欠	中期	16	72	アカガシ亞属 楊目
109	角江	9	22	SR 34 4層	又歫	破片	中期	24	134	アカガシ亞属 楊目
110	角江	9	23	SR 34	又歫	破片	中期	24	133	アカガシ亞属 楊目
111	角江	9	25	SR 01 IV層	直柄又歫	片側欠損	中期	18	88	アカガシ亞属 楊目
112	角江	9	26	SR 01 Ⅲ層	直柄又歫	片側欠損	中期	18	93	アカガシ亞属 楊目
113	角江	9	28	SR 01	直柄又歫	片側欠損	-	18	83	アカガシ亞属 楊目
114	角江	9	29	SR 01 IV層	直柄又歫	破片	中期	18	94	アカガシ亞属 楊目
115	角江	9	30	SR 01 IV層	直柄又歫	片側欠損	中期	18	87	アカガシ亞属 楊目
116	角江	9	31	SR 01 中層	直柄又歫	歫欠損	中期	18	91	アカガシ亞属 楊目
117	角江	9	32	水田畦畔 SK 01 8層	直柄又歫	片側欠損	中~後期	18	85	アカガシ亞属 楊目
118	角江	9	33	SR 01 IV層	直柄又歫	歫欠損	中期	18	92	コナラ節 楊目
119	角江	9	34	SR 01 北縁 ラミナ層	直柄又歫	両端欠損	中期	18	90	コナラ節 楊目
120	角江	9	35	SR 01 Ⅲ層	直柄又歫	片側欠損	中期	18	89	クヌギ節 楊目
121	梶子北	9	10	旧河道 (SX 10 南)	広歫	基部破片	中期	25	145	クヌギ 木取り不明
122	梶子北	9	11	旧河道 (SX 10 南)	広歫	基部破片	中期	25	144	クヌギ 木取り不明
123	梶子北	9	21	旧河道 (SX 10 北)	又歫未製品	片側欠損	中期	25	148	クヌギ 木取り不明
124	梶子北	9	27	旧河道	又歫	歫身破片	中期	25	147	樹種・木取り不明
125	梶子北	9	36	旧河道	掘棒	折損	中期	25	149	クヌギ 木取り不明
126	有東	9	13	SP 04 C - 3 F	直柄狹歫	一部欠損	中期	37	1	身:アカガシ亞属 楊目 柄:サカキ 制材
127	有東	9	15	SD 03 C - 6 Ⅲ層	曲柄狹歫	先端一部欠損	中期	37	4	アカガシ亞属 楊目
128	有東	9	19	SD 03 6区	小型広歫	先端欠損	中期	37	8	アカガシ亞属 楊目
129	有東	9	20	SD 03 D - 7 Ⅲ層	直柄又歫	片側欠損	中期	37	7	アカガシ亞属 楊目
130	有東	9	24	SD 03 6区 Ⅲ層	又歫	片側欠損	中期	37	11	アカガシ亞属 楊目
131	有東	9	37	SD 03 5区 IV層	曲柄 (握り棒?)	完形	中期	37	14	アカガシ亞属 制材
132	有東	9	38	SD 03 5区 IV層	組合式歫	歫先	中期	37	12	アカガシ亞属 楊目
133	有東	9	39	SD 03 5区 II層	一木歫	柄途中を欠損	中期	38	21	アカガシ亞属 木取り不明

研究紀要12

かながわの考古学

発行日 2007(平成19)年3月10日

発行 財団法人かながわ考古学財團

〒232-0033 横浜市南区中村町3-191-1

tel (045)-252-8689 fax (045)-262-8162

<http://www.planet.pref.kanagawa.jp/city/koukogaku/zaidan.htm>

印 刷 株式会社ナディック

KANAGAWA NO KOUKOGAKU

Vol. 12

(**Bulletin of KANAGAWA Archaeology Foundation**)

CONTENTS

Project Team for Palaeolithic Studies: Palaeolithic Remains in Kanagawa Prefecture (6): Summary	1
Project Team for Jōmon Period Studies: Change of the Jōmon Culture in Kanagawa Prefecture (VIII): An Example in the earliest Late Period. An Aspect of the Shomyōji-Type Pottery Period, Part 2 : A tentative plan of Chronological order of Pottery	21
Project Team for Yayoi Period Studies: Yayoi period Sites in low land of the Sagami gulf coast	33
Project Team for Kofun Period Studies: Track of Dr. Naotada Akaboshi, A Pioneer of Archaeological Research in Kanagawa Prefecture (4): A Report of Materials of the Kofun Period in the So-called "Akaboshi Note"	49
Project Team for Nara-Heian Period Studies: Farm Implements of the Nara-Heian Period in Kanagawa Prefecture (2).	61
Project Team for Medieval Age Studies: The Corpus of "Yagura" (horizontal loam-cut cave burial chamber of the Kamakura period) in Kanagawa Prefecture (5): Potteries, Ceramics from "Yagura".	75
Project Team for Early Modern Age Studies: The Corpus of Common Houses in the Early Modern Age (4).	91
Watanabe Gai: Local color and a change of a wooden tool for farming and tool of Yayoi period of Kanagawa Prefecture: mainly on exhumation example of Ikego Sites in Zushi City.	107

March, 2007

KANAGAWA Archaeology Foundation

Yokohama, Japan